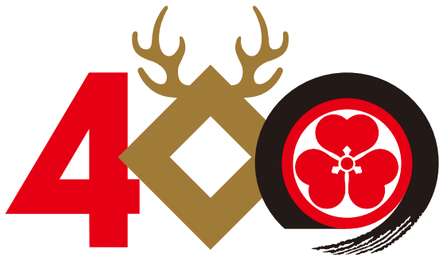
酒井家庄内入部４００年記念誌



酒井家庄内入部400年記念誌

SHONAI
400年から学ぶ庄内
SHORAI
みんなでつなごう将来

酒井家庄内入部400年記念誌
発行　酒井家庄内入部400年記念事業実行委員会

酒井家庄内入部４００年記念誌



皆川　治
酒井家庄内入部４００年記念事業実行委員長
鶴岡市長

令和４（２０２２）年は、元和８（１６２２）年に、徳川四天王の筆頭・酒井忠次公を祖とする庄内藩酒井家３代忠勝公が、ここ庄内に入部してから４００年の節目の年を迎えました。

この大きな節目を、私たちが暮らす庄内地域を見つめなおす契機とし、郷里への愛着と誇り・シビックプライドを醸成するとともに、その魅力を生かした観光振興を図るべく、庄内二市三町で実行委員会を立ち上げ、酒井家庄内入部４００年記念事業を実施してまいりました。

庄内の歴史を知り、庄内の精神・価値を学び考え、持続可能な未来を創造する、という基本方針のもと実施した記念事業の取組とその理念を、多くの方、特に将来を担う若い世代から知っていただき、また、伝えていくため、このたび記念誌を発刊することといたしました。

「４００年から学ぶ庄内　みんなでつなごう将来」をキャッチフレーズに掲げ、本番年の前年の令和３年度から本格的な記念事業をスタートいたしました。

この３年間、徳川宗家と四天王家ご臨席のもと執り行った記念式典や、歴史学者で東京大学史料編纂所教授の本郷和人氏による歴史講演会、小学生親子を対象とした子ども記者プロジェクトや庄内地域ミュージアムスタンプラリーなど各種取組を実施し、多くの方に地域の歴史文化に触れ、学ぶ機会を提供することができました。コロナ禍の中で記念事業を成功裏に終えることができましたのは、酒井家の皆様をはじめ、実行委員、各専門部会員や多くの関係者の皆様のご尽力の賜物であり、正にキャッチフレーズのとおり、みんなでつないだ記念事業でありました。この場をお借りし、改めまして御礼申し上げます。

ここ庄内には、地域固有の歴史文化が、伝統となり〝今〟に継承されています。受け継がれてきた伝統の力を礎とし、新たな価値を生み出す創造の力が加わることで、そこに暮らす全ての人が「本当の豊かさ」を享受できる地域へとつながっていくものと確信しております。４００年から続くその先、次の１００年を見据えた、伝統と創造のまちづくりに向け、一歩一歩、力強く歩みを進めてまいります。

地域の宝である歴史文化、伝統を守り、育み、そして受け継いできてくださった先人たちに対し、心から敬意を表します。そして、〝今〟を生きる私たちは、先人たちより受け取った伝統というバトンを〝将来〟へと引き継ぐ大きな役割を担っております。この冊子が、次代を担う若者たちにとって、自分たちが暮らす、ここ庄内の歴史文化に興味を抱き、深く学ぶきっかけとなれば幸いです。

結びに、記念事業の実施並びに本書の発刊にご協力いただきました皆々様に心より感謝を申し上げ、ご挨拶といたします。



酒井忠久

酒井家庄内入部400年記念事業実行委員会 顧問
旧庄内藩主酒井家18代当主
公益財団法人 致道博物館 顧問・名誉館長

酒井家庄内入部４００年記念誌の刊行をお慶び申し上げます。令和４年酒井家入部４００年をむかえるにあたって、令和２年「酒井家庄内入部４００年記念事業実行委員会」が組織されました。４００年から学ぶ庄内（ＳＨＯＮＡＩ）みんなでつなごう将来（ＳＨＯＲＡＩ）をキャッチフレーズに、事業の基本方針として庄内の歴史を知り、庄内の精神・価値を学び考え、持続可能な未来の創造をめざしました。令和４年を中心に令和３年はプレ、令和５年はネクストとして、この３年間コロナ禍にも細心の注意をしながらも庄内全域で多様な記念事業が行われてまいりました。あらためて鶴岡市、酒田市、三川町、庄内町、遊佐町、実行委員会はじめ庄内の皆様に酒井家といたしまして有り難く厚く御礼を申し上げます。あわせて入部４００年の歩みの中、コロナ禍のため令和２年公益財団法人致道博物館創立70周年は記念展のみ、松ヶ岡開墾１５０年は令和４年記念式を縮小しての催行という形ではありましたが、節目を迎えることができ厚く御礼申し上げます。

酒井家の歴史をふりかえりますと、徳川四天王酒井忠次を祖とし2代家次は三河吉田（豊橋市）、下総臼井（佐倉市）、上州高崎（高崎市）、越後高田（上越市）と任地を移り譜代としての役割を果たしてまいりました。3代忠勝は越後高田で跡を継ぎ、その後転封した信州松代（長野市）から元和８年１６２２年庄内に入部しました。そして農政に力を注ぎ、庄内は、良米の産地として名声を高め、日本海航路の拠点・酒田港や加茂港の発展により豊かな文化と産業が育まれた４００年の歩みでした。

地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化伝承を語るストーリーを日本遺産として文化庁が認定しています。山形県には

●出羽三山「生まれかわりの旅」
●サムライゆかりのシルク
●北前船寄港地・船主集落
●山寺が支えた紅花文化

と4件の日本遺産があり、鶴岡市は

●ユネスコ創造都市ネットワーク食文化部門への加盟

が認定されていますが、４００年の歴史は広く関わりをもっています。

庄内入部に際して、忠勝は家臣角田儀右衛門を密かに庄内へ派遣、調査を命じました。「北には鳥海山が雲外に秀で、西を望めば蒼海限りなく、東南には出羽三山などの山々が連なり、いわゆる天府の国である」と絶賛の評価をして入部した庄内でした。海、山、川、平野と豊穣の地と豊かな自然の恵みに「天府の国庄内」と４００年たった今も私たちは庄内を誇りに思っております。

庄内藩水野元朗、疋田進修との二人の質問に徂徠が答えた徂徠先生答問書は「天地は活物、人も活物ですのに縄で縛りからげ窮屈に見るのは無用な学問」と断じ、「学問は歴史に極まる、手応えある歴史、事実がごつごつとして転がっている歴史、それを恐れずに把握せよ」そして「見聞広く事実に行きわたり候を学問という」等と述べ平易に著された徂徠学の入門書として出版、好評を博し、藩校致道館の基となりました。9代酒井忠徳が創設した藩校致道館では、天性重視個性伸長、自学自習、会業の重視による教育方針により多くの人材が育ち活躍をしました。また明治には西郷南洲翁遺訓が庄内で編まれ、西郷隆盛の哲学を知る貴重なものであり、その心を庄内の精神的バックボーンとしておりました。

本記念誌に多様な４００年事業が凝縮されており、歴史と文化と地域の良さをあらためてみつめ、国内外への発信と交流拡大に資するものと思います。日本のこころを大切にしてきた先人先輩に敬意と感謝を捧げ、「最上のものは過去にあるのではなく将来にある」（ロバート・ブラウニング）といわれるように、この４００年を節目に庄内の夢ある将来をめざして、益々の発展を祈念申し上げます。



吉村美栄子

山形県知事

酒井家第3代当主酒井忠勝公が藩主として庄内に入部してから４００年の節目を迎え、「酒井家庄内入部４００年記念誌」の刊行にあたり、心からお祝いを申し上げます。

庄内は豊かな自然に育まれた深い精神文化が色濃く根付き、人々の生活と結びついた産業文化や食文化、地域色豊かな伝統芸能、有形無形の文化財など、多くの文化的資源が守り受け継がれています。近年では、出羽三山、鶴岡のシルク、酒田・加茂の北前船が日本遺産に認定されるなど、高い評価を受けており、全国に誇る山形県の宝です。

酒井家庄内入部４００年記念事業では、「４００年から学ぶ庄内（ＳＨＯＮＡＩ）」をキャッチフレーズに、歴史講演会の開催や観光モデルルートの構築、小中学生向け歴史文化副読本の刊行など、各地で多彩な取組が展開されたと伺っております。庄内地域の歴史と文化の確実な継承と郷土愛の醸成につきまして、実行委員会をはじめ関係者の皆様方の御尽力の賜物と深く敬意を表する次第であります。

県では、県民共通の財産である文化の次世代への継承と、その多様な可能性を人づくりや社会づくりに活かし、心豊かな県民生活と活力ある地域社会の実現、さらには経済の活性化や交流人口の拡大に取り組んでおります。県民の皆様とともに、郷土の文化を受け継ぎ誇りに思える元気なふるさとやまがたを実現してまいりたいと考えておりますので、今後とも御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、この度の記念事業を契機として、地域住民の郷土への愛着と誇りがさらに高まり、地域の歴史・文化の継承が図られ、また、国内外に対して広く庄内の魅力が発信されますことを御期待するとともに、関係の皆様方の御健勝を心からお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。



徳川家広

徳川宗家 19 代当主・公益財団法人 徳川記念財団理事長

酒井家の庄内入部４００年に、心よりのお祝いを申し上げたいと思います。

みなさまご案内の通り、庄内藩の藩祖である酒井忠勝侯は、徳川家康公の第一の忠臣として戦国末期の日本にその名を轟かせた酒井忠次侯の嫡孫です。

このように徳川将軍家との関係が密接であった酒井家が、徳川家とまったく縁のない庄内に封じられ、最北の譜代大名となったことには、実は重大な意味が秘められていたと、私は考えております。

俗にいう徳川三百年の平和は、豊臣家が朝鮮出兵の惨禍によって崩壊していった教訓に鑑みて、その基礎が構想されたものでした。その際に特に重要だったのが、関東平野と奥羽地方に、未だ開発が行き届かない、広大な人口希薄の土地が存在するという事実でした。朝鮮出兵という対外戦争を求めるほどに増加した西日本の人口を東へ北へと移していくことが、徳川幕府の最も根本的な政策だったのです。酒井家の庄内移封は、東北開発という幕府にとっての最重要であり、かつ三河武士にとって馴染みのない豪雪地帯の開発という困難な政策の推進役を任せることに他なりませんでした。酒井家に対する信任の厚さのなせる技です。

果たして、１６２２年の庄内入部以来、酒井家君臣はこのような幕府の期待に、実によく応え、徳川の平和を支えるうえで、大功を果たしました。酒井家は江戸時代を通じて善政を行ない、おかげで庄内の人口は順調に増加を続けました。また、戊辰戦争にあっては藩士領民が団結して官軍を一歩も領内に入れないという奮戦ぶりを発揮して、封建政治の有終の美を飾りました。

さらに明治以後も酒井家と庄内との結びつきはいよいよ強まり、日本の伝統的な美徳を残す地として、訪れる者に感銘を与え続けています。そしてこのような庄内酒井家の歴史の流れを貴重な文化財の展示を通じて辿ることのできる致道博物館の重要性も、いや増すばかりであります。

酒井家庄内入部４００年記念誌



正保庄内絵図（鶴岡市指定文化財、致道博物館蔵）

目次

［ごあいさつ］
酒井家庄内入部４００年記念事業実行委員会
実行委員長　皆川　治……2
顧問　酒井　忠久……4

［祝辞］
山形県知事　吉村　美栄子……6
徳川宗家19代当主　徳川　家広……7

第1章　酒井家と鶴岡・庄内の歴史

歴史に名を刻んだ初代・忠次……10
最上家統治時代の庄内……12
酒井家入部……14
【寄稿】酒井家と鶴岡
作家　佐藤　賢一……16
居城跡地に「鶴岡公園」……18
藩政改革……20
【寄稿】酒井家と本間家
公益財団法人本間美術館　館長　田中　章夫……22
国指定重要無形民俗文化財・黒川能……24
三方領知替え……26
戊辰戦争……28
松ヶ岡開墾……30

【寄稿】苦難に立ち向かう
―三方領知替と松ヶ岡開墾
東北公益文科大学　教授　門松　秀樹……32
酒井忠篤、忠宝、玄蕃……34
酒井家による産業振興……36
教学精神の継承……38
庄内の歴史略年表……40

第2章　酒井家庄内入部４００年
記念事業の抄録

キャッチフレーズ、基本方針、事業推進体制……46
公式ロゴマーク……47
総務企画部会の取組……48
【寄稿】４００年から学ぶＳＨＯＮＡＩ
みんなつなごうＳＨＯＲＡＩ
総務企画部会長　武田　真理子……71
歴史文化部会の取組……72
【寄稿】歴史の学びを将来の活力に
歴史文化部会長　上野　由部……79
観光部会の取組……80
【寄稿】四百年の節目の年に感謝し
次の百年につなぐ
観光部会長　石原　純一……93
まちづくり部会の取組……94
【寄稿】明日の鶴岡を創る
駅前地区活性化に向けて
まちづくり部会長　上木　勝司……97
関連事業、他団体の取組……98
令和５年度の取組……104
実行委員会委員、アドバイザー・参与、
専門部会員名簿……108

酒井家庄内入部400年

歩みの先に

歴史に名を刻んだ初代・忠次

「山形新聞」2023年3月17日付より

国宝は県内に6つあり、うち3つが鶴岡市内に存在する。羽黒山五重塔に加え、致道博物館が所蔵する二振りの太刀。刀はともに酒井家初代・忠次が主君らから授かったものだ。

その武功や外交能力の高さから忠次は織田信長、豊臣秀吉といった時の権力者から一目置かれた。徳川家康の側近・徳川四天王の筆頭と評され、酒井家の名を歴史に刻んだ。

忠次を語る上で欠かせないのは1575（天正3）年の長篠の戦い。武田信玄の息子・勝頼率いる軍勢と、織田・徳川の連合軍が相まみえた。

徳川方の長篠城が包囲された局面で、忠次は相手方の砦・鳶ケ巣山への奇襲を進言した。長篠城は劣勢にあったが、敵軍の砦に仕掛けることで「城内の兵は勢いを得て、武田軍は士気を失うだろう」と読んだ。

狙い通り、不意の襲撃は敵軍を打ち崩した。忠次率いる援軍は包囲網を破り、戦局を有利に進めるきっかけをつくった。信長が忠次を称賛したとの逸話もある。

致道博物館が所蔵する国宝の一つ「太刀　銘真光　附　金梨子地糸巻太刀拵」は、忠次が信長から拝領した。1582（天正10）年、忠次の居城に信長が立ち寄った折り、金200両と合わせて刀を贈った。これまでの武功と、もてなしへの感謝だったとされる。

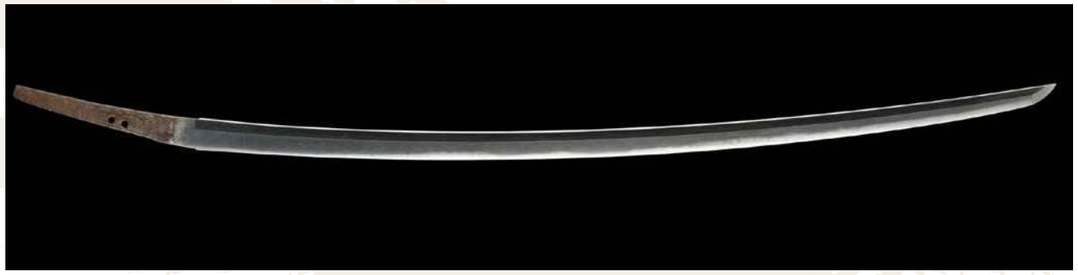
重要な場面で士気を高めた忠次の武勇を彩るような話も残る。1572（元亀3）年、三方ヶ原の戦いで信長に敗れた家康軍が城に戻ったときのこと。追撃を狙う武田軍に向け、城の留守役をしていた忠次は城門を開けて堂々と太鼓を打ち鳴らした。策があると思ったか、敵軍は退却した―そう伝えられている。

「酒井の太鼓」として知られるこの話の関連資料が今年、同館で展示される。酒井家と庄内の歴史に焦点を当てた企画展の一環で、第1部は忠次がテーマ。国宝の太刀二振りに加え、重要文化財の甲冑などが並ぶ。

忠次は家康の天下統一を見ることなく、1596（慶長元）年にこの世を去った。今川家の人質だった時代から家康を支えた忠次。その人物像を同館の菅原義勝学芸員は「家康の15歳年上で義叔父という立場もあり、厚い信頼を得ていた」と解説する。嫉妬や裏切りが日常だった戦国時代に忠義を貫き、徳川家興隆の立役者となった。その存在の大きさが、今日まで続く歩みの礎となっている。

家康支えた武勇と忠義





酒井忠次が織田信長から拝領した国宝「太刀　銘真光」の拵「金梨子地糸巻太刀拵」㊤、
酒井忠次が徳川家康から拝領した国宝「太刀　銘信房作」㊦
（致道博物館蔵）

酒井家庄内入部400年

庄内藩前史

最上家統治時代の庄内

57万石の大大名 最上義光

1600（慶長5）年、東軍の徳川方と西軍の豊臣方に分かれて日本全体を巻き込んだ天下分け目の戦い、関ヶ原の戦いが起こりました。出羽国においても徳川方に味方した最上家と豊臣方の上杉家がぶつかり合い、「北の関ヶ原」といわれる「慶長出羽合戦」が起こりました。関ヶ原の戦いは徳川方が勝利したため、翌年最上義光は庄内を含む57万石の領地（現在の置賜地方を除く山形県内および秋田県由利地域を含む土地）を手に入れました。全国を見渡しても徳川家・豊臣家を除けば5本の指に入るほどの領地をもつ大大名となったのです。

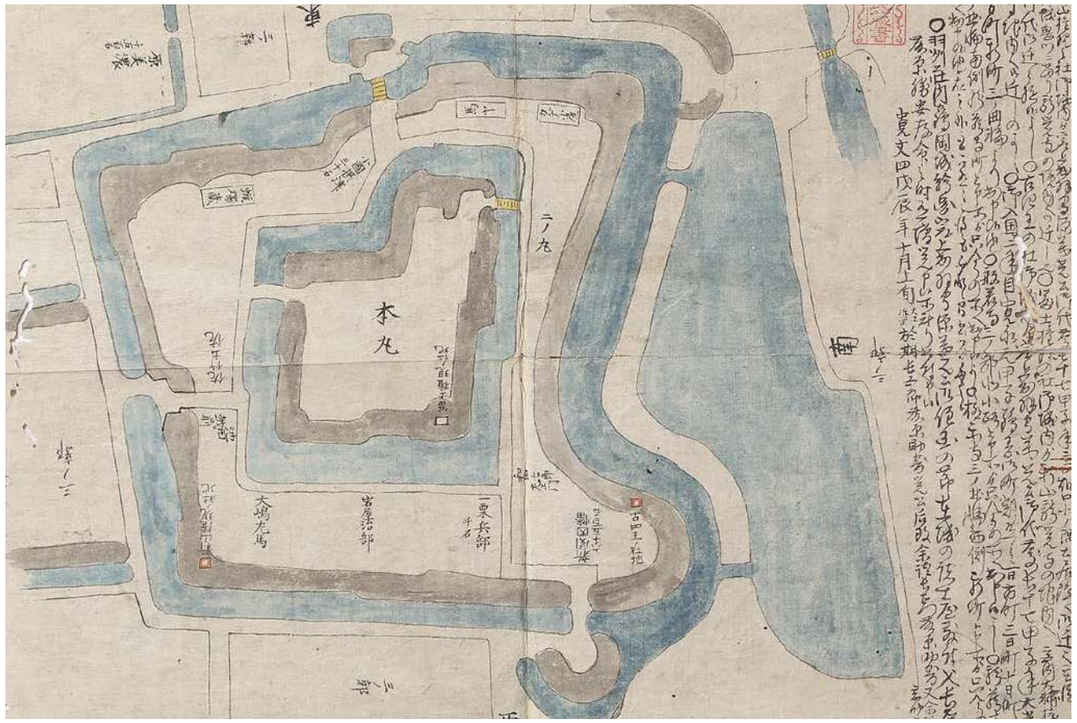
平野が広がり、海を利用した流通も可能な庄内は、内陸の山形城を本拠とする義光にとって重要な拠点でした。そのため、義光は庄内の整備にたくさんの時間と労力を費やしました。

米どころ庄内の基礎を築く

最上義光は、鶴ヶ岡城と亀ヶ崎城（現在の酒田東高等学校周辺）、大山城の3つの城を庄内支配の拠点に定め、戦乱で荒廃していた城の修復や城下の整備を進めました。また、人の移動と物流に欠かせない最上川の整備も行います。危険な岩場を削り、新たな船着き場を設けることで舟が安全に上り下り出来るようになり、酒田湊の商人を通じて小規模ながらも交易を行いました。

鶴ヶ岡城周辺では、長い間赤川の洪水に悩まされていましたが、大々的な治水（川や水路の整備）工事を行って、これを解決しました。また、青龍寺川を切り拓いて広大な平野に水を供給するほか、因幡堰（現在の藤島地域）や中川堰（現在の羽黒地域）などの用水堰を作る工事に着手しています。領内から多くの人夫を雇い、昼夜を徹して完成させた北楯大堰（現在の庄内町）も最上家時代の大工事です。こうして良米の産地として名高い庄内の基盤が整えられました。

しかし、義光が亡くなると、最上家の家臣たちの間で派閥争いが起こります。1622（元和8）年には、藩内の混乱を収束できなかったことを理由に、領地が没収されてしまいました。そして、庄内は酒井家統治時代を迎えます。



最上氏時代の鶴ヶ岡城（山形県指定有形文化財『大泉叢誌絵図』、致道博物館蔵）


現在の北楯大堰（庄内町清川～狩川地内）
1612（慶長17）年に完成した北楯大堰は、2018（平成30）年、農業や地域の発展に貢献した施設として、世界かんがい施設遺産に登録されました。


三十八間総覆輪筋兜（山形市指定文化財、最上義光歴史館蔵）
最上義光所用の兜

「庄内の歴史ハンドブック」より

酒井家入部

戦国時代、庄内支配の状況は目まぐるしく変わりました。関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利し、江戸時代を迎えると、山形藩の最上義光が庄内を治めますが20年ほどで改易となります。新たに庄内統治を任されたのは、徳川家譜代の大名酒井家3代忠勝でした。

歴史に残る「徳川四天王」、その筆頭といわれたのが酒井家初代、忠次です。酒井家はどのような家柄だったのか、また入部後の藩政について、致道博物館主任学芸員の菅原義勝さんに伺いました。「忠次は家康の15歳上で義叔父にあたります。徳川家が大大名へとのし上がり権力を確立していく、その土台を支えた重要な存在でした。三河統一の際も旗頭を任され、多くの戦や大名間の外交でも活躍しました」。酒井家が信濃国松代（長野県）から庄内に入部したのは元和8年（1622）、3代忠勝の時。最上家の改易によって領知が譜代大名らに分与され、酒井家は庄内領約13万8千石を与えられました。忠勝は鶴ヶ岡城を居城とし、亀ヶ崎城（酒田）を支城として城代を置きます。



「酒井忠勝肖像」2代家次の時代に三河国吉田（愛知県）から下総国臼井（千葉県）、上野国高崎（群馬県）、越後国高田（新潟県）へと転封を繰り返し、忠勝の時代に越後国高田から信濃国松代（長野県）、そして出羽国庄内（山形県）へと入った。致道博物館蔵

戦乱の世を終えた時代の変わり目である江戸前期は、転封や取り潰しが全国的に頻発。幕藩体制も安定せず、庄内でも酒井家のお家騒動が起こるなど、領内統治が不安定な時期でした。寛永9（1632）年には、肥後国熊本を治めていた加藤忠広（清正の子）が改易、庄内藩預かりとなり、櫛引の丸岡城に移される一件も。そうした中で忠勝は、信濃国松代からの家臣や諸国の武士、最上家の浪人などを多く召し抱え、鶴ヶ岡城の大規模な整備を進めます。新たに設けた三の丸に家臣を集住させ、菩提寺の大督寺や役所などを置いて本城を築きました。また、最上氏時代の町割をもとに、城下町を整備します。城を取り囲むように商人や職人が住む町人町を14町置いて、政治的、経済的な都市計画を進めていきました。



主君と禄を失った最上家の浪人たちは再仕官を求めて、自らの功名書きを藩に提出。就職活動の履歴書のようなもの。致道博物館蔵

また、忠勝が入部してすぐに行ったのが、庄内藩政で唯一の「一斉検地」です。農民が納める年貢が幕藩の財政の基盤だったこの時代、検地の目的は耕地の生産高を把握することで、これにより庄内藩の内高（実際の石高）は大幅に増加しました。さらに寛永2（1625）年には「定免法」を導入します。「それまでは1年ごとの収穫量によって年貢を決めていたのが、過去5～20年の平均から徴税額を決める方法が採られました。不作凶作が続くと村は困窮し、領民の反発はかなり強かったようです」。そのため遊佐郷の領民らが大量に秋田方面に逃げ出す「欠落」も起こります。

時代の変わり目という混乱の中にも忠勝はそうして城を整え、人々を集めてまちをつくり、新しい時代に向けて藩政の基盤となる支配体制を敷いていきました。



現在の市役所前、江戸期の馬場町十日町口通り。忠勝の時代に始まった城下町の整備はその没後も続き、60年近くをかけて終了した。家数4000余軒、人口17000余人と町の規模は最上氏時代の5倍近くに拡大した。『四方喜我志満』より「馬場町十日町口通りの図」本間家旧本邸蔵

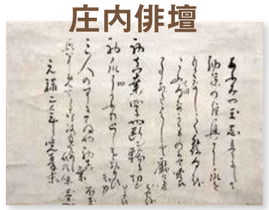
《年表》

400～350年前

- ●元和8（1622）
  信濃国松代10万石から酒井忠勝が入部。13万8千石の庄内藩が成立
- ●元和9（1623）
  ・領内の総検地の実施
  ・町割を開始
- ●寛永9（1632）
  熊本藩主加藤忠広が酒井家預かりとなり、庄内藩領は14万石に
- ●正保4（1647）
  忠勝の死去により忠当が藩主に。三男忠恒に松山2万石、七男忠解に大山1万石を分地、2つの支藩が成立する
- ●承応元（1652）
  忠勝の弟、酒井長門守忠重が策謀したお家騒動は失敗に終わり、忠当は長門守を金2万両で義絶した
- ●元禄2（1689）
  松尾芭蕉が河合曾良を伴い、羽黒・手向に入る

コラム 一

松尾芭蕉と庄内俳壇



松尾芭蕉「玉志亭唱和懐紙」山形県指定文化財 本間美術館蔵

松尾芭蕉が「おくのほそ道」紀行で庄内に入ったのは元禄2年6月3日。羽黒山を下り、同10日には庄内藩士の長山重行の邸宅に到着して句会を開き、3日を過ごしています。鶴岡の人々はここで交流を深めたのを機に、芭蕉が旅を終えた後も師事し「美濃派俳壇」を形成、町人文化として栄えました。芭蕉は酒田の伊藤不玉邸などにも逗留。「玉志亭唱和懐紙」が本間美術館に所蔵されています。



「徳川十六将図」では一番上の家康の左下に酒井忠次が描かれ、家臣団の別格であることが分かる。致道博物館蔵



初代忠次が合戦で手柄を立てたことから家康より贈られた「太刀 銘 信房作」と拵（こしらえ）「金梨子地葵紋散糸巻太刀拵」。忠次は織田信長との交流もあり「太刀 銘 真光」も拝領している。いずれも国宝。致道博物館蔵

酒井家と鶴岡

佐藤賢一
作家

酒井忠勝公が庄内藩主に封ぜられたのが1622年、それから数えて、2022年で400年になる。あらためて、驚くべき年月である。鹿児島の島津家や山口の毛利家、宮城の伊達家というような、その土地に江戸開幕の前からいた外様大名なら珍しい話ではない。が、酒井家のような譜代大名となると、入部300年、いや、200年を数えられる家さえ多くない。幕府の都合で頻繁に移封させられるのが常だったからだ。

例えば、山形藩をみてみよう。酒井家の庄内入部は、米沢を除いて、今の山形県に相当する大領を有した最上氏が、御家騒動を理由に改易され、知行が分割されたことに始まるわけだが、その1622年、山形のほうに入部したのが、やはり譜代大名の鳥居忠政だった。が、もう1636年には改易となり、後に保科正之が入る。二代将軍徳川秀忠の実子だが、それも1643年には会津に移り、1644年に譜代大名の松平直基が入部した。

1648年には松平忠弘、1668年には奥平昌能、1685年には堀田正仲、1686年に松平直矩、1692年に再び松平忠弘と、その後も藩主は短期間で変わり続けた。1700年に堀田正虎が入部、しばらく山形に留まるが、それも1746年に移封を命じられ、松平乗祐に変わった。また1767年に改易になると、代わった秋元家は四代、78年を山形にすごすことになり、これが最長の記録である。それでも幕末までは続かず、1845年には改易、水野忠清の入部となった。「天保の改革」で知られる水野忠邦の子で、幕閣としての失政を問われたあげくの御家左遷だったが、ともあれ1870年の廃藩置県を迎えるのは、この水野家ということになる。

より詳しくは水野忠守の系統の水野家だが、この家に注目してみても、山形藩に来るまでに、下総山川藩、駿河田中藩、三河吉田藩、三河岡崎藩、肥前唐津藩、遠江浜松藩と経なければならなかった。山形藩のような、あるいは水野家のような頻繁な改易も、また普通とはいえないが、譜代大名という立場、身上を理解するには好例である。常ならざるは、やはり庄内酒井家のほうであり、入部400年を数えられる、つまりは開幕から廃藩置県まで、ほぼ江戸時代を通じて一所に居続けた譜代大名となると、恐らく他には彦根井伊家があるのみではないか。

しかも酒井家の場合は、たまたま移封がなかったからではない。1810年、庄内の酒井家を越後長岡へ、長岡の牧野家を武蔵川越へ、川越の松平家を出羽庄内へ動かすという、いわゆる「三方領知替え」を幕府に命じられながら、それを領民の直訴で阻んだという経緯がある。おかげで途切れずに済んだから、今日で400年なのである。

譜代大名として、ただ幕府に命じられて、たまたま居続けただけではない。酒井家は庄内という土地に望まれた大名でもあった。あるいは相性がよかったというべきか。わけても鶴岡であり、ここでは城下町というのが土地の代名詞になっているほどだ。酒井家を語ることなくして、もはや地域の文化、伝統を語ることなどできないのだ。その酒井家が庄内入部400年を迎える――よくよく考えれば、それすら奇妙に感じてしまう。400年前に庄内に入部したとき、酒井家は余所者だったのだと思い当たれば、ちょっとした驚きさえ禁じえないのだ。その余所というのも、また近くではなかった。

そもそも酒井家は室町時代の三河の国、今の愛知県岡崎市に発する豪族だった。新田源氏の血を引く（このため今も酒井家の本姓は、平でも、藤原でも、橘でもなく、源だ）ともいわれるが、史実として確かめられるのは、酒井広親という人物からである。その長男氏忠の系譜が酒井左衛門尉家、つまりは庄内藩、松山藩の系統であり、次男家忠の系譜が酒井雅楽頭家、つまりは姫路藩、小浜藩、敦賀藩、伊勢崎藩、勝山藩の系統になる。

こうまで繁栄したのは、いうまでもなく徳川家に仕えたからだ。まだ名乗りが松平だった頃だが、それを三河一帯の盟主と目して、酒井家も従うようになったのだ。豪族とて自立できない厳しい時代、戦国時代の真只中だったからだが、それもそのうち天下統一の気運が高まってきた。というより、隣国尾張に織田信長が出現した。その同盟者となったのが松平元康こと、後の徳川家康なのである。

信長、秀吉と先駆けられながら、家康が最後に天下を取れたのは、ひとつには家臣に恵まれたからだとされる。その功臣を徳川四天王とも、十六神将とも数えるが、いずれの場合も筆頭に置かれるのが、酒井忠次という人物である。これが庄内藩主となった忠勝公の祖父なのだ。

酒井忠次は1564年に、まず東三河で吉田城主となった。その子である酒井家次のとき、豊臣の天下になり、徳川が関東に移封されたため、1590年には下総臼井で3万石を、さらに1600年には上野高崎で5万石を食むことになった。このあと家康は関ヶ原の戦いに勝利、江戸に幕府を開くが、以後の幕藩体制において譜代大名となった酒井家は、1616年に越後高田藩10万石の藩主になった。それを酒井忠勝が継いだが、ほどない1619年には、もう信州松代藩10万石に移された。さらに1622年に移されたのが、出羽庄内藩14万石だったのだ。

やはり各地を転々としているが、その人としての中身をいえば、酒井家は依然として三河者である。家中の侍たちも、なお大半は三河の出だったと思われる。ということは、今の愛知県民だ。いや、愛知県と一括りにするなかれ、尾張と三河は別であり、気風も全く違うとは、よくいわれる。商業がさかんな風土ゆえ、尾張者は頭の回転が速く、テキパキと何でも割り切る。つまりは利に聡いので、戦国の世に「尾張の弱兵」といわれたように、逃げ足も速い。逆に「三河の強兵」とされたのは、こちらは粘り強く、最後まで戦い抜くからだ。農業的な風土から、三河者は普段おっとりしているが、その実は頑固で、物事を途中で投げ出さないのだ。

酒井家が入部と一緒に庄内に持ちこんだのは、この三河者の気風だった。あるいは持ちこみやすいところに入ったというべきか。庄内といえば、今も酒田と鶴岡だが、それは400年前も変わらなかった。いや、当時は酒田のほうが断然大きかった。それなのに入部した酒井家は、鶴岡を城下に選んだ。小さいので、逆に大きくしなければならないと考えたとか、鶴岡には最上義光が隠居城を整えようとしていて、それを引き継ぐほうが楽だったからとか諸説あるが、いずれも説得力に乏しい。普通に考えれば、大きいほうの酒田だ。織田家や豊臣家の家臣筋が来たなら、まず間違いなく酒田に城を置いたはずだ。酒田は奥州藤原家の家臣36人が築いた港町で、当時すでに中継貿易で栄えていた。要するに商人気質で、つまりは尾張のような土地なのだ。が、これが三河者には堪らない。鎌倉時代に地頭として武藤氏が来て以来、農業的風土において、ずっと城下町だった鶴岡のほうが、遥かに肌が合う。三河者が見出した終の安住の土地こそは、この鶴岡だったのかもしれないと思うにつけても、入部400年という長い長い年月が俄かに頷けてくる。

酒井家庄内入部400年

歩みの先に

居城跡地に「鶴岡公園」

工事フェンスの向こう側で桜が開花の季節を待っている。鶴岡市中心部の鶴岡公園では今、正面広場の整備が進められている。一帯は庄内藩主酒井家の居城となった旧鶴ケ岡城跡。入部400年の歴史の礎となる場所だ。鶴岡市街を代表する観光地、そして憩いの場として市内外から訪れる人に親しまれている。

1622（元和8）年、3代酒井忠勝が信州松代藩（長野県）から入部し、庄内藩が成立した。譜代大名酒井家は江戸時代初めごろは転封を重ねたが、庄内入部後は明治維新を迎えるまで、藩主としてこの地に根を張った。

庄内には二つの城があった。鶴ケ岡（鶴岡市）と亀ケ崎（酒田市）。亀ケ崎は城が堅固で、運送の便も良かったが、忠勝は鶴ケ岡を本城に選んだ。

理由は諸説あるが、将来的な開発を見込んだこと、商業が盛んな港町の反封建的な気風から家臣を遠ざけようと考えたことなどが背景にあったようだ。

一方で当時の鶴ケ岡城は造りが粗野で、本丸、二の丸しかない規模だった。忠勝は入部後、城郭を拡張するだけでなく、一帯の大々的な整備に取り掛かった。

外堀に当たる内川の外側に町人町を移し、三の丸を設けた。東側の大手前に重臣、残る三方に中級家臣の屋敷を配した。住居が整い、家臣の家族を松代から迎えるまでに数年を要したという。

太平の時代でも、城は守りのとりで。増改築には幕府の許可が必要だった。城の象徴といえる二の丸大手門ができたのは1652（承応元）年。忠勝が他界して5年後だった。翌年に本丸御殿が完成するなど、整備が本格化したのはこの頃。城と堀の修築は入部から60年余り続いたとされる。

修築重ね 築いた街の核

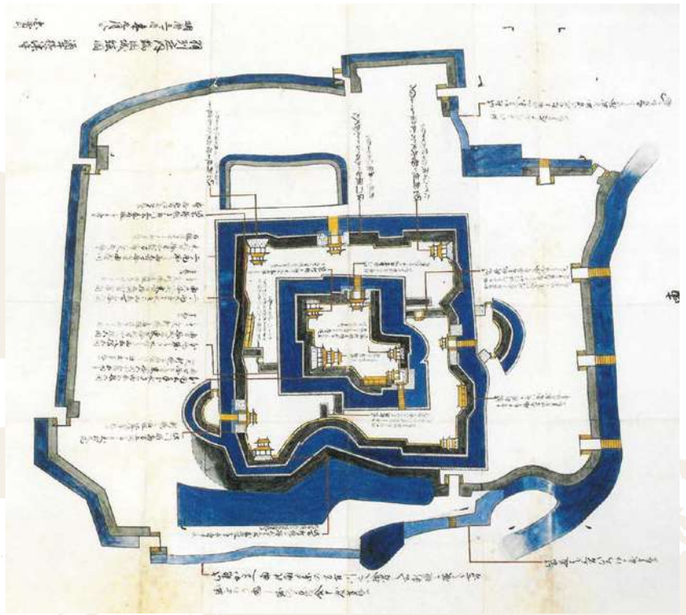
本丸御殿があった場所には現在、荘内神社が鎮座している。廃藩置県に伴って城が取り崩された翌年の1877（明治10）年、旧藩主を慕う領民たちの心のよりどころとして創建された。参拝客はもちろん、日々の憩いの場として市民が足を運ぶ。

神社では毎年元日、その年に期待を込めた一文字を書にしている。2022年は「繋」。宮司の石原純一さん（64）が選んだ。「文化や伝統をつないでいく役割を私たちは担っている」と石原さん。みこしの修繕など、神社も次の時代に向けた準備を始めている。

園内の雪はほとんど解け、散策路を歩けば文学碑や胸像が出迎えてくれる。市都市計画課によると公園整備は来年度末にかけて続く見通し。もう一冬挟んで、新たな装いで401年目の春を迎える。



鶴ヶ岡城本丸跡に鎮座する荘内神社。
入部400年にちなんだ「繋」の文字が参拝客を迎えている。



庄内藩が幕府に提出した「羽州庄内鶴岡城絵図」（1657年）。
整備が本格化したころの城の拡充計画図だが、一部を除き実現しなかった。
（致道博物館蔵）

「山形新聞」2022年3月18日付より

藩政改革

庄内は天恵の沃野、正に之を以て国を立つべき楽土なり――
3代忠勝のこの言葉通り、庄内平野はのちに
日本屈指の穀倉地帯へと発展します。
その土台ができたのは、多くの先人たちが懸命に生きた
庄内藩の〝改革の時代〟です。

徳川幕府の「米本位制」による財政基盤によって、農政をめぐる改革に揺れた江戸前期から中期。鶴岡市郷土資料館の今野章さんと、当時の領民の暮らしぶりについてたどってみます。

「庄内の領民は豊かではなかったかもしれませんが、例えば家族の病気などによる不慮の支出等がなければ、何とか生活はできていたようです」。しかし藩への不慮の出来事は容赦なく降りかかります。宝永4（1707）年の富士山噴火災害復興による東海道宿普請のように、幕府から大掛かりな土木工事への手伝普請をたびたび命じられて工事費がかさみ、また、7代藩主忠寄が幕府の老中となって支出が増加するなど、さまざまな要因が重なって財政を圧迫します。さらに度重なる大凶作が追い打ちをかけ、領民には御用金や年貢の増徴が課せられ、厳しい倹約令も敷かれました。「不慮の出費に充てるため、藩は領内の富裕層から多額の御用金を徴収しました。今は酒田が商人町といわれますが、鶴岡にも豪商はいて、藩財政への借財によって没落した商家もありました」。商人の台頭は江戸だけでなく庄内でも見られ、特に酒田の本間家は廻船問屋として財を成していました。9代忠徳はその商才と財力に着目し、3代光丘を登用して財政改革にあたらせます。光丘が出した「安永御地盤組立」は、3カ年を見据えた収支予算案でした。光丘は藩の借り入れを整理し、幕府から借用していた2万両を返済するなど成果を出しますが、相次ぐ凶作や手伝普請などで頓挫し、財政は行き詰まりに陥っていきます。

そんな局面を救ったのが郡代の白井矢太夫、庄内における「寛政の改革」の立役者です。白井は忠徳の求めに応じて財政再建の改革案を提出、その施策は困窮する農民に対し藩からの貸付米金を切り捨てるなどの、いわゆる「徳政令」でした。この時、本間光丘も案を提出しますが採用ならず、本間家が再び財政改革に参画するのは4代光道、天保の時代に下ります。また白井は、士風の刷新には教育の振興が必要と進言。忠徳は藩政を担う人材の育成を目的とした学校の創設に着手します。そうして文化2（1805）年「個性と自主性を重んじる」徂徠学を採り入れた「藩校致道館」が開校しました。

致道館では武芸も奨励する一方で、磯釣りや鳥刺しなど野外に出かける野遊びも盛んに行われました。その目的は心身鍛錬で、竿を握って磯魚や小鳥を獲ることよりも、猟場までの遠い道のりを歩くことを武用の一助とするなど、自己と向き合い鍛錬に励みました。こうして藩士たちは「個性伸長」を旨とした学問を通して士風を磨きながら、時代は江戸後期、幕末へと向かっていきます。



“日本一の大地主”と称された酒田の本間家は奥羽諸藩への大名貸も行っていた。特に庄内藩には貸付だけでなく資金援助も惜しみなく、藩の運営を大きく支えた。「本間光丘像」本間家旧本邸蔵

《年表》

300〜200年前

- ●宝永4（1707）
  富士山噴火災害復興のため東海道宿普請を仰せつかり、6カ所の手伝普請を受け持つ
- ●寛延2（1749）
  7代忠寄が老中となる
- ●安永5（1776）
  本間光丘が「安永御地盤組立」を提出
- ●天明元（1781）
  本間光丘が「天明御地盤組立」を提出
- ●寛政7（1795）
  寛政の改革
- ●文化2（1805）
  大宝寺に藩校致道館が落成
- ●文化4（1807）
  蓮台火事により家屋1300戸が類焼
- ●文化13（1816）
  致道館を十日町口に移築

コラム 二

藩校教育とゼミナール



出典「庄内藩校致道館」HPより

全国にある多くの藩校では、道徳的な教養を身につける朱子学を教学としていましたが、致道館では道徳を学びながら実践的な考え方に重きを置く「徂徠学」を採用していました。10歳で入学すると、年齢を問わず学力に応じて進級し、小学校から大学院課程まで学ぶことができました。個性を伸ばすこと、自ら学ぶ力をつけることを重視していたため、基本は自学自習。その結果を数人で討論して研究を深める「会業」、今でいう大学のゼミナールが致道館ではすでに行われていました。



庄内藩の武士たちは総じて「野合」といわれる磯釣りや鳥刺しに熱中していた。
夜が明ける前から家を出て、海へ山へと数十キロも歩いて向かったという。
「庄内浜磯釣りの図」（旅河家史料）鶴岡市郷土資料館蔵





田植えは家族、親類総出で行った。絵図には「はんこたんな」をつけた女性の姿が見える。
稲刈りや脱穀、俵詰めなどを経て、11月末の期日に間に合うように村ごとに藩の米蔵に年貢米を納めた。
「大泉四季農業図」より田植えと年貢納入の図 致道博物館蔵

酒井家と本間家

田中章夫
公益財団法人 本間美術館 館長

昨年は酒井家庄内入部４００年の記念の年で、庄内一円で協賛事業が実施され、多くの人が酒井家や庄内の歴史を考える機会になった年でもありました。そこで、この機に庄内の歴史に大きな足跡を残した、酒井家と本間家について振り返って見ようと思います。

酒井家は三河国に興った家で、酒井広親を大祖とする生粋の三河武士でした。酒井家初代酒井忠次が徳川家康に仕え、三河国吉田城主に封じられ、徳川家康のもとで四天王筆頭として重用されます。以後、酒井家は徳川家の重臣として加増と転封を重ねます。やがて3代酒井忠勝が１６２２年（元和８）に、最上家改易に伴い、出羽庄内13万８０００石を賜って入部し、江戸時代の約２５０年間、酒井家は庄内を領国とします。江戸中期以降に幕藩体制の矛盾が顕在化すると、庄内藩も財政窮乏や災害・飢饉などで藩政の危機を迎えます。当時の9代酒井忠徳は危機意識を持って藩政改革や農政改革を断行し、善政により領民に信頼されます。その後の三方領知替え、戊辰戦争と続く危機を領民とともに乗り越えることによって、酒井家と庄内の絆が強くなります。それでも酒井家は武士の矜持を持って、最後まで徳川家に忠勤を尽くしています。そして、明治の廃藩まで、藩主として庄内を治めました。廃藩置県以後も、酒井家は庄内（鶴岡）に居住し、現御当主18代酒井忠久氏まで庄内の産業や文化の振興に貢献しています。

本間家は相模国の本間村を発祥地として、戦国時代末に酒田に定住した、本間主計重光を始祖としています。現在の本間家は、１６８９年（元禄2）に分家して「新潟屋」を開業した本間原光を初代としています。最上川河口の北前船寄港地の利と、有能な当主の輩出によって、本間家は酒田の豪商として成長します。特に3代本間光丘は卓越した商才と勤勉力行により、商業・金融・土地の3事業の協業による経営体制を確立し、本間家の繁栄を盤石にしたことで知られています。一方、私益と公益の融合を考え、得た富みを地域に還元することに努め、砂防林造成・最上川堤防改修工事などの公共事業、備荒籾貯蓄制度創設・冬貸助力銭・消防施設整備などの農村・町方救済事業他、多くの事業に取り組み、酒田や庄内全体の発展に尽くします。後継者たちも光丘の意思を継いで地域貢献に努めています。明治時代以降は、日本一の地主と謳われたこともありましたが、社会の激変を凌いで、常に庄内の人々と共に歩んできたのが本間家でした。

このような歴史を持つ酒井家と本間家ですが、庄内の歴史の中で深い関わりを持つことになります。

ところで、商人は近世封建社会の士農工商の身分制度で、特権階級の武士の下に置かれた平民身分でしたが、江戸中期以降の商品経済の発展により、武士を凌駕する経済力を持ちます。商人は藩や藩主の用立てをする必要な存在となり、商人も商売上、藩を必要とする関係でした。

本間家も藩の他の出入り商人同様、初代本間原光が御用金３００両を提供したことを最初に、代々金穀の献上を行って関わりを深めていきます。唯、本間家が他の商人たちと違っていたのは、歴代商才のある当主に恵まれたこと、3代本間光丘の事績が示すように、得た富みを地域に還元し、積極的に地域貢献に取り組む家であったことです。

時に、財政窮乏に陥った庄内藩は、商才と財力を有し、地域貢献に実績のある3代本間光丘を登用し、財政改革に当たらせます。9代酒井忠徳の信任を得て、光丘が提出した改革案「安永御地盤組立」、「天明御地盤組立」を実行し、一時は財政が改善します。しかし、抜本的な財政再建となるものではなかった。だが、改革を通して忠徳と光丘に信頼が生まれたと思われます。光丘は財政改革以外にも、庄内藩と酒井家の為に先に挙げた備荒籾貯蓄制度創設と籾2万４０００俵の献納の他にも、御米置場の改修、鶴ヶ岡城・亀ヶ崎城の改修、東海道川普請資金調達など多くの支援を行っています。この光丘の代から酒井家と本間家は強い結び付きを持つようになります。

4代本間光道は、１８１３年（文化10）に10代酒井忠器の領内巡視の休憩所（本間家旧別荘「清遠閣」と庭園「鶴舞園」）を築造、１８１５年（文化12）には藩校致道館の移築を担当しています。１８４０年（天保11）には庄内藩を長岡へ転封する三方領知替えが起こります。5代本間光暉は領民の阻止運動を支援すると共に、藩命を受けて転封費用の捻出にも尽力しています。三方領知替えは領民の運動によって幕命が撤回された、前例の無い事件でした。さらに、天保飢饉には藩と協力して米の買入、難民救済に当たり領民から餓死者を出さなかった。支援には、他にも印旛沼疎水工事、庄内沿岸防備費などがあります。

幕藩体制が終焉を迎える江戸から明治の変革期に、庄内藩は13代酒井忠篤の下、最後まで徳川家に忠勤を尽くし、１８６８年（慶応4）の戊辰戦争を領民と一体となって戦い抜きます。この危機に際し、6代本間光美は莫大な資金を提供して藩と酒井家を支え、戦争後の藩の転封にも、領民の阻止運動を受けて、新政府の大隈重信と交渉し献金で収めています。

明治維新後も庄内に居住した酒井家と本間家は、世の変貌にも左右されず、互いに敬愛と信頼によって、前代同様の親交を続けて行きます。１８６６年（明治19）に光美の勧めにより、酒井家が株式会社酒田米商会所を開業。１９２０年（大正9）には8代本間光弥が酒井家入部３００年記念事業として荘内育英会を創設し、酒井家御当主から総裁に就任戴いている事などからも窺われます。この育英事業は今に継続しています。

このように、庄内の歴史の中での酒井家と本間家は、江戸から令和の現在まで、幾多の危機を共にし、乗り越えてきた想いが絆となり、さらに、庄内の風土に育まれ、時を重ねることによって、分かち難くなったこの地、庄内の発展に貢献してきた希有な存在であり、両家であったと言えよう。

そして、酒井家と本間家は、太平洋戦争敗戦後の混乱期に、地方文化の向上を目的として、１９４７年（昭和22）に本間美術館、１９５０年（昭和25）に致道博物館を開館していることも付記しておきたい。

酒井家庄内入部400年

交易と文化の発展

国指定重要無形民俗文化財・黒川能

「庄内の歴史ハンドブック」より

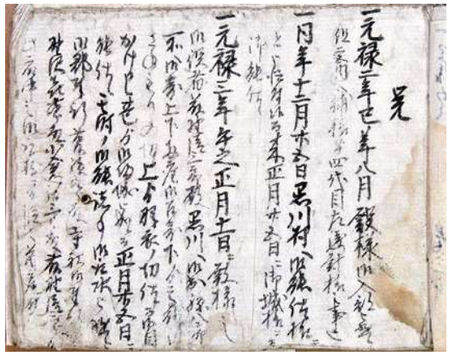
酒井家が庇護した地域芸能

黒川能の起源は1400年代後半と考えられています。このころ庄内を治めていたのは武藤（大宝寺）家でした。戦国時代には庶民も戦乱に巻き込まれ、黒川地区の能も衰退していましたが、江戸時代には庄内に入部した酒井家による多大な援助もあり発展していきました。6代・酒井忠真からは、鶴ヶ岡城で能を演じるよう打診され、1690（元禄3）年2月上旬には初めて黒川能が城の中で上覧（将軍や藩主が観賞すること）されました。以降、黒川能は何度も城中で行われ、11代・忠発は隠居した後の1874（明治7）年にも黒川春日神社を参拝し、能を鑑賞しています。

黒川能は城中上覧によって、酒井家の援助のもとに繁栄していきます。また、上覧能のおかげで庄内全域に知られ、1700年代以降自主公演も盛んになります。そして、現在でも酒井家の保護を忘れず、神事能であることを　しっかり意識しながら繋がっています。



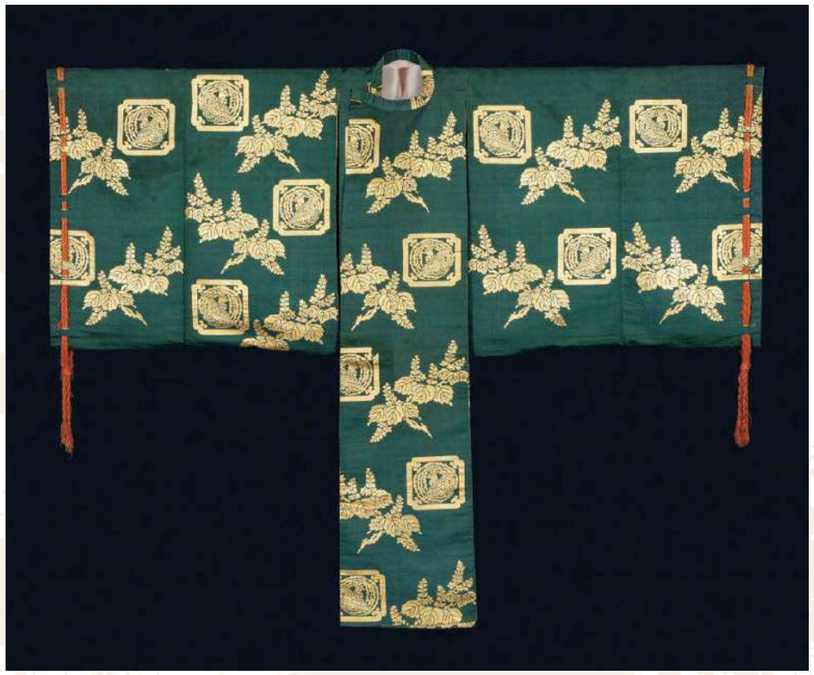
黒川能（国指定重要無形民俗文化財）　能「東北」　黒川春日神社にて



元禄3年上覧の記録（個人蔵）

城中で行われた黒川能

6代 忠真	1690（元禄 3）年
7代 忠寄	1733（享保18）年
	1734（享保19）年
9代 忠徳	1773（安永 2）年
10代 忠器	1807（文化 4）年
	1834（天保 5）年
11代 忠発	1843（天保14）年
	1845（弘化 2）年
	1861（文久元）年に2回
	1865（慶応元）年



狩衣 萌黄地桐隅入角鳳凰丸模様（山形県指定有形文化財、黒川春日神社蔵）
1733（享保18）年に7代酒井忠寄より拝領した装束の1つ。

三方領知替え

10代藩主忠器の藩政時代、「百姓たりと雖も二君に仕えず」とのスローガンのもと、数百人の百姓が江戸に上り、駕籠訴を繰り返した三方領知替え阻止運動。280日にも及ぶこの運動は、幕府の命令が撤回されるという前代未聞の結末につながりました。

天保4（1833）年、半年の間に大洪水と大凶作、大地震、大津波に見舞われた庄内藩。その傷跡も癒えない天保11年11月1日、「庄内藩主の酒井忠器を長岡に、長岡藩主の牧野忠雅を川越に、川越藩主の松平斉典を庄内に」という三方領知替えの幕命が突然出されました。

早追によってその知らせが庄内に伝わると、同月22日には西郷組の百姓が雪深い山を越えて江戸上りを決行。宿の通報で失敗に終わりますが、それに続く川北一番上りが江戸城前で駕籠訴を実現させます。その後も庄内一円の百姓が次々に江戸へ。大老や老中だけでなく、水戸藩主や上野の寛永寺など有力な大名や寺院にも領知替え反対を訴えました。同時に庄内各地では、百姓たちが数万人規模の反対集会を何度も開催。地域全体を巻き込んだ大騒動となります。

なぜ百姓たちがそれほどまでに強く反対したのか、致道博物館主任学芸員の菅原義勝さんは「転封反対を訴える百姓たちの訴状には、天保4年の飢饉で藩が配給米などの救済策を工面したため、領内に一人も餓死者を出さなかったことについて書かれています。実際は、領知替えにあたって酒井家から百姓に課せられる負担や、新しく来る川越松平氏の苛政への危惧もあったようです。いずれにせよ、主君の善政を理由に転封反対を叫ぶ百姓の姿は、幕府の要人や他藩の大名がうらやむほどのものでした」と話します。一方、藩としても幕命には絶対に背けない立場でありながら、何も落ち度のない酒井氏が、大幅に石高が減ることとなる長岡へ転封させられることに対し、内心では納得していなかったといいます。「その中で百姓たちの動きが世の中に影響を与えていたのも確かで、藩役人は江戸に来た百姓たちにこれ以上駕籠訴をしないよう説得することはあっても、厳しくとがめたりはせず、むしろ江戸藩邸で大根汁などの食事を振る舞ってから、国許に帰したりしていたようです」。

天保12年7月、三方領知替えは百姓たちの反対運動に加え、転封を推し進めていた徳川家斉と川越藩松平氏が亡くなったこと、外様大名や幕閣からも反対の声が高まったことなども重なり、徳川家慶によって撤回されました。その知らせがもたらされた庄内では、庄内一円の武士、町民、百姓が一緒に喜び、祝ったといわれています。その後、庄内藩は水野忠邦によって報復ともいえる過酷な印旛沼疎水工事を命じられ、大きな負担と犠牲を払いますが、幕命を覆したこの一件は、幕府権力の弱体化を象徴する出来事として歴史に刻まれるものとなりました。



天保12年4月、中川通荒屋敷（現在の藤島地域新屋敷地区）で、領知替えに反対する百姓たちの大集会が行われた。この規模の集会は他にも庄内各地で何度も行われた。「夢の浮橋」致道博物館蔵



領知替え中止となった天保12年7月、鶴岡七日町橋脇の伽羅屋（床店）が店先で、通行の人々に祝い酒を振る舞った。「夢の浮橋」致道博物館蔵



天保12年1月、川北一番上り11人が、江戸城の大手門を出てきた水野忠邦たち老中に駕籠訴を実行した。「夢の浮橋」致道博物館蔵

《年表》

188〜178年前

- ●天保4（1833）
  - ・最上川や赤川の大洪水が起きる
  - ・冷夏による大凶作となる
  - ・大地震が起き、加茂に9メートル近くの津波がくる
- ●天保9（1838）
  - 郷村の救済を図る農政改革を実施する
- ●天保11（1840）
  - 三方領知替えが申し渡され、庄内百姓たちの反対運動が始まる
- ●天保12（1841）
  - 将軍家慶より三方領知替え撤回が伝えられる
- ●天保14（1843）
  - 庄内藩に印旛沼疎水工事命令が出る

コラム 三

きつねめん



藩主が「お居なり」になったことを受けて、領民が藩主に献上するために菓子商に依頼して作った打ち菓子。「居成」を「稲荷」にかけていて、現在でも縁起菓子として鶴岡市内の各菓子店で販売している。

戊辰戦争

265年にもわたる徳川幕府による支配が続いた江戸時代。
幕末期は庄内藩にもさまざまな難局や試練が訪れ、
ついには会津藩と共に新政府軍の征伐対象となってしまいました。
そして「負けなし」といわれた庄内藩の戊辰戦争へと突入していきます。

江戸幕府の沿岸警備の強化に向けて、庄内藩に品川御台場の警備と西蝦夷地の警備・経営が命じられた江戸末期。家督を継いで1年で急逝した酒井忠寛に代わり、忠篤が13代となった翌年の文久3（1863）年には、江戸市中取締りも命じられ、同年に委任された新徴組・小林組（後の大砲組・新整組）と昼夜巡回を始めます。以後、庄内藩は国許・江戸・蝦夷の3つの支配体制を持つこととなり、1年交代で人員を大きく入れ替えながら、江戸の治安維持に努めました。

その頃、国許では藩政への不満をもつ一部家臣たちが企てた藩政改革が明るみになり、慶応2（1866）年11月より彼らの一斉捕縛が始まりました。いわゆる大山庄太夫一件（丁卯の大獄）です。鶴岡市郷土資料館の今野章さんは「当時、忠篤がまだ15歳と若かったこともあり、庄内藩の政治的な判断はすべて父親の忠発が下したと思われます」と話します。

翌3年12月25日、庄内藩が幕命により薩摩藩邸を焼き討ちします。幕府を挑発するために江戸で乱暴を働く浪人を薩摩藩が扇動していたことが理由でした。翌年の1月3日、鳥羽伏見の戦いが勃発。混乱の最中、忠篤と藩士たちは江戸から庄内に戻ってきます。「この頃、新政府は『庄内藩が恭順の意を示し、藩主が謹慎すれば処分なし』との方針を出していました。庄内藩もそのつもりでしたが、事実上解体した幕府から江戸市中取締りなどの手当として受け取った寒河江・柴崎の領地支配を、2月後半から始めたのです。それが原因となり、ついに征伐対象となってしまいました」。

慶応4（1868）年4月、新政府軍は仙台から山形に入り、新庄に進軍してきます。24日に清川口で戦火が上がると、庄内藩は酒田本間家による最新式の武器による武装と、江戸市中取締りで培った統率の取れた軍勢によって、各地で連戦連勝の強さをみせます。しかし同盟軍が次々と敗北することを受け、降伏を決断。新政府軍が鶴ヶ岡城下に入り、忠篤と参謀黒田清隆が致道館で会談します。9月28日のことでした。「ただ庄内藩は余力もあったし、ドイツからの武器輸入の話も進めていたので、降伏については相当意見が分かれたようです。最終的には忠発が決めましたが、これ以上戦を続ければ、会津のように城下が焼け野原になっていたかもしれないし、その後の西郷隆盛との親交もなかったでしょう。ギリギリでの英断だったと思います」。こうして江戸時代に幕を降ろした庄内藩は、以後、新たな時代へと歩みを進めていきます。



北に進軍した庄内藩の一番大隊と二番大隊は慶応4年8月、横手で新政府軍・秋田藩軍と激戦。横手城を陥落し、秋田藩兵の遺体を竜昌院に丁重に葬った。「戊辰戦争絵巻」致道博物館蔵



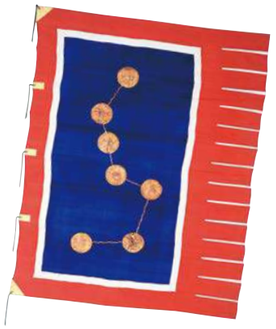
慶応4年4月、庄内藩の戊辰戦争の始まりとなった清川口での戦い。仙台方面から進軍してきた新政府軍を、松平隊が最上川を挟んで迎え撃った。「戊辰戦争絵巻」致道博物館蔵



慶応3年12月25日、主力の庄内藩1000人に、諸藩の1000余人を加え、薩摩藩邸を包囲し、焼き討ちした。「薩州屋敷焼撃之図」致道博物館蔵

コラム 四

破軍星旗



連戦連勝の活躍で、戊辰戦争で「鬼玄蕃（げんば）がきた」と恐れられた酒井玄蕃率いる庄内藩二番大隊の破軍星旗。中国故事に倣い、北斗七星を反転し、必勝を期した。鶴岡市指定文化財。致道博物館寄託

《年表》

177〜153年前

- **●弘化元（1844）**
  庄内藩預かりに反対する天領百姓の大山騒動が起きる
- **●安政元（1854）**
  品川御台場護衛を命じられる
- **●安政5（1858）**
  コレラが流行する
- **●安政6（1859）**
  蝦夷地の西側一帯の警備と経営を割り当てられる
- **●文久3（1863）**
  ・江戸市中取締りを命じられる
  ・新徴組を委任される
- **●慶応2（1866）**
  ・領内の百姓たちによる山王神社境内打寄りが起きる
  ・大山庄太夫、赤沢隼之助など藩政改革派が拘束される
- **●慶応3（1867）**
  幕命により薩摩藩邸を焼き討ちする
- **●慶応4／明治元（1868）**
  ・新政府軍が庄内藩征討を決定し、庄内藩の戊辰戦争が始まる
  ・庄内藩が降伏する

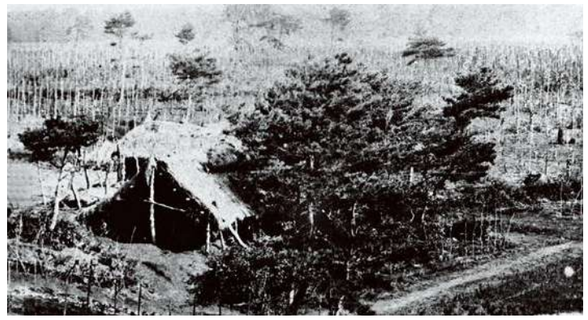


明治5年の開墾士たち。鶴ヶ岡城下から毎日通い、轟音と共に巨木を倒す様は、まるで戦場のようだったそう。

松ヶ岡開墾場150年のはじまり

庄内の近代化を推し進めた絹織物産業。その発端となった松ヶ岡の開墾には幾多の困難があり、開墾士たちは西郷隆盛から贈られた「気節凌霜天地知」の箴言を支えに、乗り越えてきたといわれています。開墾から絹織物産業が庄内に定着するまでの軌跡を追いました。

明治5年8月早朝。旧庄内藩士3千人が刀を鍬に替え、鶴ヶ岡城から列を組んで8キロほどの道のりを歩いて向かったのは、月山麓に広がる後田山の原生林（現松ヶ岡）。その日から開墾士として29組に分かれ、巨木を倒し、巨大な根を掘り起こし、雑木を刈って地面をならす重労働を、雨の日も風の日も続けました。2年で開墾した地は約311ヘクタール。明治6年には桑の栽培を始め、翌年には養蚕の先進地である島村（現群馬県伊勢崎市境島村）へ研修に赴き、学んできたノウハウで大蚕室の建造に着手。完成した蚕室で養蚕、蚕種、製糸を開始し、明治10年には蚕室が



311ヘクタールの開墾地には、明治6年から桑の苗が植えられ、桑畑が広がった。



現存する5棟の大蚕室がある松ヶ岡開墾場。屋根には今も酒井家のかたばみ紋が入った鶴ヶ岡城の瓦が使われている。

10棟に。5年前まで原生林だった地は、一面の桑畑に日本一大きな蚕室群が建ち並ぶ景色に一変しました。

明治初期に旧庄内藩で進められた松ヶ岡開墾事業。旧藩主酒井家18代の酒井忠久さんは、その背景に「戊辰戦争に敗れ、明治維新が進んでいる先行きの見えない時代に備え、人材を温存する」という幹部の思惑がありながらも、「当時の重要な輸出品だった生糸の産業を興して国に貢献することで、戊辰戦争で着せられた賊名を払拭しようという強い志が一人一人にあったから、ここまで成し遂げられたのだと思います。西郷隆盛の勧めでドイツ留学に行っていた旧庄内藩主・酒井忠篤の存在も大きく、忠篤は帰国後の明治政府での活躍の道を約束されていましたから、開墾士たちの希望の星だったのでしょう」と話します。

しかし明治9年、庄内一円で起きたワッパ騒動で酒田県からの開墾事業補助金が打ち切りとなり、明治10年には心の拠りどころだった西郷隆盛が西南戦争で自刃。明治11年にはワッパ騒動の判決で3年分の補助金の返還を命じられるなど、大きな逆風が開墾場を襲います。松ヶ岡開墾場副理事長の山田陽介さんは、当時の人々の落胆ぶりについて話します。

「結果、みんなで話し合って開墾地を国に返そうと、明治11年に幹部が内務省に出かけ、大久保利通に面会したのです。それに対し大久保は明治9年に松ヶ岡を視察し、この事業とその志を高く評価していたため、事業費の返還を免除し、逆に激励して資金を援助してくれました。その計らいがなかったら松ヶ岡はどうなっていたかわかりません」。

難を乗り越えた開墾場は、それでも続く資金不足から蚕室の稼働率を下げ、桑を売却するなど規模を縮小させながら事業を継続。やがて養蚕再興への情熱と蚕種の需要増加によって、次第に事業を盛り返していきます。そして庄内一円に養蚕が定着した明治20年、鶴岡に松岡製糸所を開設。以後、大きな織物工場がいくつも生まれ、職人を育成する学校や織機をつくる鉄工所も生まれるなど地域を挙げた産業クラスターが形成されました。こうして鶴岡は国内屈指の絹織物産地として、明治・大正の近代化を歩み始めたのです。



酒井 忠久さん

松ヶ岡開墾場第4代総長。旧庄内藩主酒井家18代当主、公益財団法人致道博物館代表理事・館長、公益財団法人日本美術刀剣保存協会会長。

苦難に立ち向かう
――三方領知替と松ヶ岡開墾

門松秀樹
東北公益文科大学　教授

天保11年（1840）11月1日の幕命は、庄内藩の士民を震撼させた。長岡藩主牧野忠雅を川越へ、庄内藩主酒井忠器を長岡へ、川越藩主松平斉典を庄内へそれぞれ国替えとするという、いわゆる三方領知替を命ずる内容であったためである。

その理由については、酒井忠器が天保の飢饉の際に多数の女中を引き連れて酒田において本間家の歓待を受けたことが驕慢に当たるとされたことなど、いくつかの説がある。しかし、実態としては、徳川家康の次男の結城秀康を祖とする名門大名ではあるが度重なる転封で膨大な借金を抱えていた松平斉典が、大御所となっていた徳川家斉の子である斉省を自らの養子に迎え、大奥をはじめとしてその伝手を頼って実入りのよい土地への転封を願い出たことに端を発し、自らの権力基盤の確立に腐心していた老中の水野忠邦が、大御所としてなお隠然たる権力を握っていた家斉に迎合して、斉省のために富庶の地であった庄内に狙いを定めたことが背景にあると考えられる。つまり、庄内藩からすれば、謂れのない転封を突然に命じられたことになる。

庄内藩は幕命の撤回に向けて全力を挙げて運動したが、忠邦は頑として庄内藩との交渉に応じようとはしなかった。譜代きっての名門である左衛門尉家（庄内藩酒井家）としては、幕命に背くということは考えられない。やむなく忠器は長岡転封に向けた諸々の準備を進めるように命を下した。

三方領知替の報せは庄内藩の領民にも大きな衝撃を与えた。富裕層である豪商や豪農たちは、酒井家に対する財政的支援と引き換えに得てきた様々な権益を失うことを恐れ、飢饉で困窮した庶民は藩の夫食米、すなわち緊急支援によって命を繋いでいたが、こうした藩からの支援を失うことを恐れた。もっとも、単に損得勘定だけではなく、入部以来200年を重ねた酒井家との関係、特に中興の祖と称される忠徳の藩政改革などもあって、酒井家は領民を守ってくれる殿様としてその信頼を得ていたことがある。

幕命への遠慮もあり積極的な活動ができない藩に代わって、酒井家の転封阻止のための運動の中心を担ったのは領民たちであった。農民たちは秘かに江戸に出府すると、老中をはじめとする幕府要路の人物に対して駕籠訴を開始し、有力商人たちはこれを経済的に支援した。処罰の危険性にもかかわらず続々と駕籠訴を試みる庄内藩の農民たちの姿は、諸大名から「百姓の亀鑑」と称賛された。悪政を理由に殿様を変えてほしいという訴えはそれほど珍しくはないが、殿様を変えないでほしいという訴えは他に例がない。

天保12年に入ると農民たちの運動はさらに広がり、藩内各地で大規模な集会を開き、現在も残る「雖為百姓不仕二君（百姓たりといえども二君に仕えず）」の幟などを掲げて気勢を上げ、さらには仙台や会津、米沢や秋田などの近隣諸藩に対する愁訴も行われるようになった。

庄内藩の領民たちの運動は、諸大名に三方領知替に対する疑義を抱かせるに至った。幕府に対して伺書が出され、三方領知替の理由の開示などが求められているのがその表れである。

天保12年1月末に家斉が、同年5月に斉省が相次いで没したことで大勢に変化が生じた。実権を掌握した将軍家慶は、弛緩していた家斉時代の大御所政治を改めるべく、忠邦を中心に「天保の改革」に取り組もうとしていた。新政の開始に際して、大御所政治の残滓である三方領知替を強行するのはいかにも不都合である。三方領知替は、その実現に固執する忠邦に対して、家慶自身の命令によって中止が指示され、幕命が撤回されるという前代未聞の結末を迎えた。

幕命撤回の報せが伝わると、庄内藩士民の喜びは留まるところを知らず、鶴岡の城下には数千人が集まり、たちまちお祭り騒ぎとなった。三方領知替に対する一連の庄内藩の農民の行動は「天保義民」と称され、酒井家と領民との紐帯を広く世に知らしめたのである。

しかし、一難去ってまた一難の語のごとく、幕末の動乱は新たな苦難を庄内藩にもたらす。佐幕派の雄藩として幕末の動乱に臨んだ庄内藩は戊辰戦争で勇戦するも降伏を余儀なくされ、さらに酒井家転封の危機に再び見舞われるが、これを乗り切って大泉藩として再出発する。

廃藩置県後の明治5年（1872）、酒田県の権大参事を務めていた元庄内藩中老の菅実秀は、明治維新後に俸禄を失いつつあった士族への授産のため、荒蕪地の開墾を計画した。同年8月17日、旧庄内藩士や、江戸幕府から預かった新徴組、新整組の隊士など、約3000名が29組に分かれて後田山の開墾を開始する。

酒井家をはじめ、旧藩士が総力を挙げて取り組んだ開墾事業は、約60日で106町歩あまりの開墾を成し遂げた。なお、開墾の様子を視察に訪れた旧藩主忠発が旧藩士たちの労をねぎらい、自ら「松ヶ岡」と記した立札を立てたことから、この地が松ヶ岡と呼ばれるようになったのは広く知られるところである。

翌年も開墾事業は展開され、高寺・馬渡・黒川などで合わせて204町歩あまりを開墾するなど、大きな成果を上げた。旧藩士たちが刀を鍬に持ち替えて成し遂げた大事業であったといえよう。しかし、軍事行動に準ずる厳しい規律をもって進められたため、厳しさに耐えられず脱走する者もおり、彼らは菅参事の横暴として政府に訴え出た。

時を同じくして、農民たちの間からも不満が噴出してワッパ騒動が起こった。当時、政府は石代納、すなわち、納税を米ではなく相当額の現金で行うことを認めていたが、酒田県では米による納税を続けていた。当時は米価が高騰していたこともあり、貢納米の売却によって多額の利益を上げることができたため、こうした利益を開墾事業の資金などに充てたのである。しかし、農民たちからすれば、幕末の動乱以来の様々な負担に加えて、開墾事業に関連する重税や労力の提供などがさらに重なり、もはやその忍耐は限界に達していた。西郷隆盛は松ヶ岡の開墾事業を高く評価し、擁護したが、酒田県政の中心にあった菅は騒動を受けて権大参事の職を辞している。

松ヶ岡の開墾事業は、輸出の主力であった生糸と茶の生産により、庄内に新たな産業を定着させることを目指していたが、農業はすぐに成果が得られるわけではない。明治維新直後、東京府知事となった大木喬任は大名屋敷跡を桑畑や茶畑にして輸出の振興を図る政策を展開したが、大木の後任となった由利公正は3年も経たないうちに失敗と断じて政策を中止している。松ヶ岡では、鶴岡に製糸工場が建設され、製糸・絹織物業が産業として定着するまでに20年近く、また、米作などを行うことで入植者の生計が安定するまでには30年以上の歳月を要している。この間、事業を放棄することなく努力を重ねた庄内の人々の粘り強さは見るべきものがある。

苦難に遭ってもこれに立ち向かい、一時の損得に左右されず将来を見据えて断行する。こうした先人たちの優れた見識が「サムライゆかりのシルク」を生み出したといえよう。

志を胸に海を渡った酒井忠篤、忠宝、玄蕃

戊辰戦争に敗北した庄内藩は、賊軍の汚名をそそがんと報国の志を抱き歩みを進めます。酒井忠篤は兵学、忠宝は法学を修めにドイツに留学、そして酒井玄蕃は外交進展の使命を帯び、清国へ渡りました。

戊辰戦争で最後に降伏した庄内藩。その処分は極めて寛大でした。13代酒井忠篤は東京での謹慎処分が解かれると、その措置は西郷隆盛によるものと知り、明治3（1870）年11月、旧庄内藩士ら70余人を連れ、鹿児島を訪れます。鉄砲をかついで激しい訓練に励む姿は旧薩摩藩士を驚かせました。4カ月ほどの訓練を経て帰京すると、4年8月兵部省7等に出仕、その後宮内省に出仕し、明治天皇のお相手を務めます。5年2月には陸軍少佐に任じられました。

ある日、西郷の意を受けた黒田清隆に、「欧州に留学し艱難を凌ぎ皇国の柱石となる素質を養わん御心はないか」と問われ、忠篤は熟考の末、応諾しました。洋行の前に4年ぶりに帰郷した忠篤は、松ヶ岡開墾に先立ち荒地の開拓に従事する旧藩士に留学の目的を伝えます。鶴岡市郷土資料館の今野章さんは、「降伏による賊軍の汚名をそそごうとする旧藩士には、前途を嘱望され、欧州留学に旅立つ忠篤の存在は誇らしく、開墾の大きな励みだったでしょう」と話します。5年4月、忠篤は兵学を、そして家督を継いだ14代忠宝も翌6年に法学修業のため、同じくドイツに渡りました。

戊辰戦争で二番大隊長として活躍し「鬼玄蕃」と恐れられた中老酒井玄蕃は、4年9月に忠篤と同じ兵部省7等に出仕しますが、病のため5カ月で辞します。その後6年秋、西郷が「遣韓論」で下野する政変が起きると、酒田県幹部は7年1月玄蕃を西郷のいる鹿児島に派遣します。西郷と会見した玄蕃は、西郷の真意を県幹部に報告し、ドイツにいる忠篤にも書状を送り伝えました。

7年10月、玄蕃は清国に渡ります。当時日本は内務卿の大久保利通が北京に入り、清国と交渉するも難航。玄蕃は北海道開拓長官となっていた黒田清隆の密使として「清国の国情、軍事力などの実態探索」の特別任務を担いました。天津から北京、さらに上海から長江を遡航し漢口まで入り、目にする軍事施設などから探索を遂行。帰国するとその日のうちに黒田長官に「北清視察戦略」を提出、「戦ふの難きに非ず、戦いに至るの難きなり」と10項目の困難を挙げて冷静な判断を示します。この報告書は後に、戊辰戦争での経験や修養が培った戦略眼による卓見と評価されますが、当時は生かされませんでした。生かされていたらその後の歴史は変わったのでは、といわれます。その後、病が再発した玄蕃は9年2月、33歳でその壮烈な生涯を閉じました。

翌年、西郷が西南戦争に敗れ没すると、政府の庄内に対する姿勢は大きく変化します。12年、ドイツ留学から帰国した忠篤と忠宝に、政府での活躍の場なく、14年、2人は鶴岡に帰りました。この間の事情については、「南洲翁すでに没して、廟堂（政府）の形勢一変し、報国の志を伸ぶるに由なく軍職を辞せり」と書き残されています。ドイツに長年留学し、日夜勉学に励んだ2人。兵学、法学の西洋の最新知識を身に付け、中央政府での大いなる活躍を期待された2人にとって、また庄内にとって、その無念は計り知れないものだったでしょう。以後2人は地元庄内の産業・文化振興に意を注ぐことになります。

Column

酒井玄蕃愛用の篳篥（ひちりき）

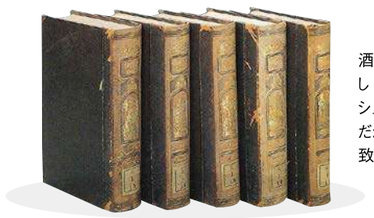
（個人所蔵）



酒井玄蕃は、常に情勢を冷静に分析し明確な戦略を練り戦う一方、書、詩、笛を愛する一面も持つ逸材だった。家族あての遺言書では、「門閥の観念を捨て、新時代の平等な市民の一人たる自覚を持つこと」、「農家の業に従事し独立の計を立てよ」など、これからの世を見通した見識を示している。



酒井忠篤所用地球儀。ドイツ留学中に購入したと伝わる。明治6年7月玄蕃に宛てた書簡ではドイツ語会話もかなり上達し、地理の次に歴史に入り、目的の兵学に進もうとしている旨を報じている。致道博物館蔵



酒井忠宝所用洋書。留学中に購入したゲーテ全集［15巻］。1874年シュトゥットガルトとある。法学を学んだが文学にも勤しんだことが分かる。致道博物館蔵

酒井玄蕃。大山格之助と会談した明治5年4月前後の撮影と推定される。戊辰戦争を戦った大山は「かの鬼玄蕃とはこの美少年か」と驚いたという。

ドイツ留学中の酒井忠宝。戊辰戦争降伏後、兄忠篤に代わり14代として家督を継ぐ。絵画に才があった。

ドイツ留学前の酒井忠篤。明治4（1871）年、19歳。東京で撮影。幕末に10歳で家督を継ぐ。戊辰戦争後、家督を弟忠宝に譲るも、13年再相続し15代を継承。能書家。

徳義を本とし事業を経営して天下に模範たらんとす

「徳義を本として産業を興して国家に報じ以て天下に模範たらんとす」これは戊辰戦争後、旧庄内藩士が地域の殖産のため蚕業に励んだ松ヶ岡開墾場綱領の一節です。この酒井家の藩政の信条は、後に米作りへと受け継がれました。

「庄内は天恵の沃野、正に之を以て国を立つべき楽土なり」酒井家3代、庄内藩租忠勝は、入部に伴い庄内の風土に農の地としての豊かさを見出し、新田開発、水利事業、米蔵の設置など「庄内米」の基盤を築きました。入部から翌々年の寛永元（1624）年には「米札」を発行。これはいわば手形のことで、藩士への俸禄（給与）として支給され、その一部を蔵米と交換することで藩士家族の飯米としました。それ以外の米は、米商人を介して大坂などに移送されました。藩の財源でもある年貢米は厳格に品質管理され、米商人らの間で庄内藩の米札は高い信用を得て、領内だけでなく西廻り航路の軌道にも乗り、「庄内米」はその名を広く知られるようになりました。

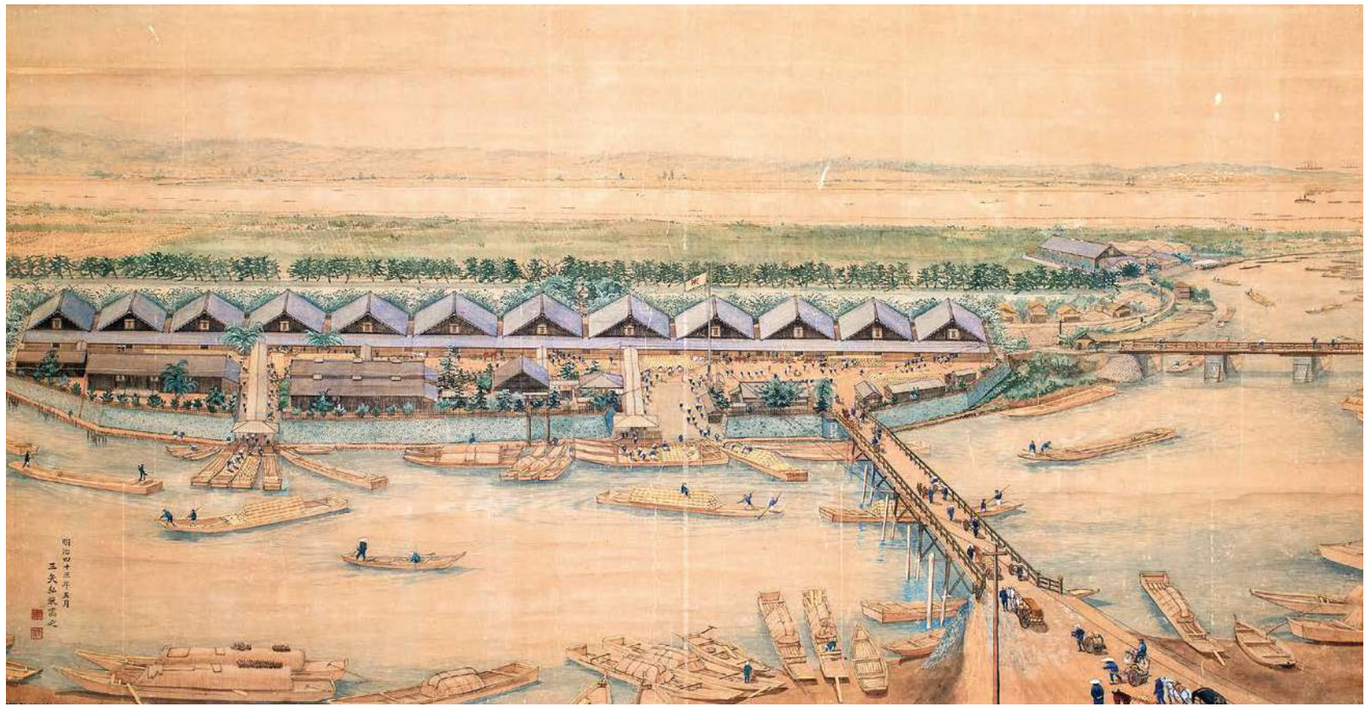
「米札」という先駆的な流通システムで名声を高めた庄内米でしたが、明治時代に年貢米から金納へと税制が変わると、粗悪米が出荷されるなど、市場評価は失墜します。状況を憂えた米商人たちは商会所の設立を本間家に懇願。6代光美は酒井家に経営を進言し、明治19（1886）年、酒井家全額出資による株式会社酒田米商会所が発足しました。その事業を任せられた旧庄内藩中老の菅実秀は「庄内を理想の郷土にするためには産業振興が何としても必要であり、そのためには米を無視することはできない」とし、旧士族や子弟の教育も目的とした経営にあたりました（高橋義順著『山居倉庫と庄内米』）。

その後、政府が米取引の新法を発布したのを機に商会所は「酒田米穀取引所」と改組、新倉庫の建設に取りかかります。建設地はかつて「山居島」といわれた港に近く舟運に適した場所。しかし軟弱な地盤だったため、盛り土をし、石垣をめぐらせ、倉の基礎には3・6メートルもの丸太を杭打つ大規模な工事が進められました。そうして明治26年11月、米穀取引所の附属倉庫として、山居倉庫は開業しました。

山居倉庫は産米の改良を目指して、入庫から保管管理まで類を見ない厳正な基準が敷かれ、また農民らも乾田馬耕などの技術を導入して、良質米の生産と収量の獲得に努めました。

加藤省一郎著『臥牛菅実秀』によると菅は「米の取り扱いは神に祈誓する心をもってせよ」と職員らを指導したといいます。高品質な米蔵として声価を高めた山居倉庫は、日本経済への影響力を持つまでになり、大正4（1915）年には日本銀行の指定倉庫となりました。

こうして庄内米ブランドの礎を築いた山居倉庫は、昭和14（1939）年に「財団法人北斗会」に移管。現在はJA全農山形が所有し、現役の農業倉庫として、また観光施設として、米どころ庄内のシンボルとなっています。



三矢弘毅画「明治四十三年当時之山居倉庫実景」（JA全農山形蔵）。米俵を積んだ川舟が行きかい、荷上場から米を運び込む人の往来で賑わう。



等級別俵装（大正時代）。「黒縄の山居米」は最高級品として流通。米質によって縄のかけ方が異なり、黒縄1本が一等米。
資料提供＝酒田市教育委員会



戊辰戦争後、庄内藩士らは刀を鍬に替えて不毛の地から蚕業を興した。150年の歴史を有する松ヶ岡開墾場。



入庫米の審査は、専門の知識を持つ検査員らによって行われ、一度俵装を解くなどして等級別に品質の均一化を図ったという。大正14年頃。資料提供＝酒田市教育委員会

Column

国指定史跡 山居倉庫



現役の農業倉庫として活用されている山居倉庫。二重屋根で空気を通して熱をためず、にがりを練りこみ塩を敷いた土間で吸湿するという環境で米の品質を保った。並木の美しいケヤキも西日を防ぐために植えられたもの。今に生きる建築の機能美が庄内米ブランドを支えた。令和3年、国史跡に指定。

藩校致道館の教学精神を新たな時代に引き継いで

戊辰戦争の降伏と酒井忠篤、忠宝の帰郷を経て、酒井家と旧庄内藩士によって進められた庄内の産業振興。一方で、酒井家を中心とした人々は藩校致道館からの教学精神を守り、学び続けました。



昭和11年発足の荘内松柏会は現在も鶴岡市家中新町の松柏会館を拠点に活動が続けられている。写真は昭和40年2月に松柏会館で開催された第6回松柏・耕心講座。

明治5（1872）年に明治政府から学制が公布され、廃校となった全国の藩校。庄内でも6年に致道館が廃校となりますが、旧藩士たちは先生の自宅などで学び合いを続けました。致道博物館学芸部長の本間豊さんは「庄内の人々が学び合いを続けられたのは、徂徠学を中心とした致道館の教育によって、自発的に学ぶ姿勢が根づいていたからだと思います。ちょうどその頃に始まった松ヶ岡の開墾士たちも開墾を終えてから鶴岡に戻って勉強会に参加していたそうなので、当時の人々の勉強への熱心さがうかがえます」と語ります。

酒井忠治講話記録「藩校致道館廃校後の庄内の教学」によると「お寄合」と呼ばれた勉強会は、孟子や中庸、大学など経典ごとに日にちを変えて数多く開催され、人々は自分で会を選択して参加。明治14年に酒井忠篤が帰郷してからは酒井家邸内の蚕室なども会場となり、年2回は会合同の磯釣り会をするなど心身を鍛錬する催しもあったといいます。また学問の内容は、菅実秀が西郷隆盛から教わった「およそ学問は堯舜を手本とし、孔子を教師とせよ」をもとに、次第に庄内独自のものに発展。明治24年に明治政府の副島種臣が鶴岡を訪れた時には、副島から「庄内はもはや徂徠学ではなく庄内学だ」と言われるまでになります。



明治24（1891）年、關雎堂（現在の致道博物館御隠殿内）で行われた副島種臣による詩経の講義の様子。正面に座っているのは左から副島、酒井忠篤、忠宝。中根竜渓著「夢幻録」（致道博物館蔵）より。

その後、それぞれに勉強会を開いていると派閥争いや分裂につながると考えた菅の発案で、酒井家邸内の蚕室に学問所「文会堂」を開設し、文会堂を主会場にした学び合いが続きました。そして酒井忠勝公入国300年記念式が開催された大正10（1921）年には「少年会」を発足。14歳から20歳までの青少年が「南洲翁遺訓」や論語を学び、海浜学校などに参加しました。この会は昭和30年代に一旦途絶えたものの「少年少女古典素読教室」として復活し、続けられています。

さらにこの教学の姿勢は農業分野にも広がりました。昭和11（1936）年、安岡正篤創設の日本農士学校の教えを汲んだ「荘内松柏会」が設立。酒井忠篤の四男・忠悌を創設者の一人としたこの会は、「右手に論語、左手に鍬」を合言葉に、庄内学を軸に農業技術の向上を追究。人間教育と実学を共に学ぶ姿勢は、戦後松ヶ岡に菅原兵治によって創立された東北農家研究所（後の東北振興研修所）にもつながりました。

こうして致道館の教学を源泉に庄内学を構築し、学び続けた人々。この独自の教学精神は明治、大正、昭和を通し庄内の産業振興や文化継承を支える精神的支柱となり、太平洋戦争後「以文会」という新たな形に受け継がれていくこととなります。



大正時代、酒井家邸内の学問所「文会堂」に集まり、学び合う青年たち。会場奥に「文会堂」の扁額が掲げられている。



今から100年前の大正10（1921）年4月、酒井忠勝公入国300年記念式と記念展覧会が開催された。酒井家16代忠良があいさつしている。会場は西田川郡郡会議事堂（後の鶴岡市公会堂）。

Column

少年少女古典素読教室



大正10（1921）年に文会堂で発足した「少年会」の流れを汲む小・中学生向けの素読教室。昭和43（1968）年度に始まり、現在は致道博物館、致道館文化振興会議、市中央公民館の共催で市内の小・中学生を対象に、6月から7月にかけて開催している。

庄内の歴史略年表

庄内および酒井家のできごと

1532（天文元）　武藤氏が本拠を大宝寺城から大浦（尾浦）城に移す
1575（天正3）5月　酒井忠次が長篠の戦いで戦功をあげる
1583（天正11）3月　武藤義氏が家臣の謀反により自害する
1587（天正15）10月　最上義光が武藤氏を追い出し庄内を支配する
1588（天正16）8月　武藤氏が本庄氏の力を借り、庄内を奪い返す（十五里ヶ原の戦い）
10月　酒井忠次が隠居、晩年は京都に住む
1590（天正18）8月　酒井家次が三河国吉田から下総国臼井3万石を与えられる
10月　上杉景勝が庄内の検地を実施、反対する一揆を鎮める
1601（慶長6）　最上義光が庄内3郡を加増される
1603（慶長8）3月　大宝寺が鶴ヶ岡、東禅寺が亀ヶ崎、大浦が大山と改称する
1604（慶長9）12月　酒井家次が上野国高崎5万石に転封となる
1606（慶長11）　青龍寺川の開削工事に着手する（1609年頃完成）
1607（慶長12）　因幡堰の開削に着手する（元禄年間に完成）
1612（慶長17）7月　北楯大堰の開削工事が完成する
1616（元和2）9月　酒井家次が越後国高田10万石に転封となる
1619（元和5）3月　酒井忠勝が信濃国松代10万石に転封となる
1622（元和8）8月　酒井忠勝が出羽国庄内13万8000石に転封となる
1623（元和9）　酒井忠勝が領内の総検地を実施する
1632（寛永9）6月　熊本藩主加藤忠広が改易となり、酒井忠勝に預けられる
1647（正保4）12月　酒井忠勝の3男忠恒が松山2万石、7男忠解が大山1万石を支藩として分け与えられる

酒井家歴代当主と家督期間

初代 忠次（ただつぐ） 1536〜1588
第2代 家次（いえつぐ） 1588〜1618
第3代 忠勝（ただかつ） 1618〜1647
第4代 忠当（ただまさ） 1647〜1660
第5代 忠義（ただよし） 1660〜1681
第6代 忠真（ただざね） 1682〜1731
第7代 忠寄（ただより） 1731〜1766
第8代 忠温（ただあつ） 1766〜1767
第9代 忠徳（ただあり） 1767〜1805
第10代 忠器（ただかた） 1805〜1842
第11代 忠発（ただあき） 1842〜1861

1600　1700　1800

全国のできごと

1560（永禄3）5月　織田信長が桶狭間で今川義元を破る
松平元康が岡崎に帰る
1573（天正元）7月　織田信長が将軍足利義昭を京都から追放し、室町幕府を滅ぼす
1575（天正3）5月　織田信長・徳川家康連合軍が長篠の戦いで武田勝頼軍を破る
1582（天正10）6月　織田信長が明智光秀の謀反により自害する（本能寺の変）
7月　羽柴秀吉が山城で検地（太閤検地はじまる）
1590（天正18）7月　豊臣秀吉が北条氏を滅ぼし、全国を統一
徳川家康に関東を与える
1592（文禄元）3月　豊臣秀吉が朝鮮に出兵する（1597年に再出兵）
1600（慶長5）9月　関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利する
1603（慶長8）2月　徳川家康が征夷大将軍となり、江戸に幕府を開く
1615（慶長20）5月　大坂夏の陣で豊臣氏が滅ぶ
（元和元）7月　幕府が武家諸法度を制定する
1635（寛永12）6月　武家諸法度を改定し、参勤交代制度が確立する
1641（寛永18）5月　オランダ商館を出島に移し、鎖国が完成する
1672（寛文12）2月　河村瑞賢が西廻り航路を整備し、酒田に幕府の米置場を設置する
1682（天和2）2月　酒井忠高に余目5000石を与える
1689（元禄2）6月　松尾芭蕉が庄内に入り、出羽三山・鶴ヶ岡・酒田などに滞在する
1690（元禄3）1月　黒川能がはじめて鶴ヶ岡城中で演じられる
1749（寛延2）9月　酒井忠寄が幕府老中に就任する
1767（明和4）1月　本間光丘を中心に藩の財政再建に当たる
1779（安永4）12月　若年寄の松山藩主酒井忠休が上野国に5000石を加増される／松山城築城が許される
1793（寛政5）4月　鶴ヶ岡城の大手前に異国船打払いの人数を揃え、周囲を行軍する
1805（文化2）2月　酒井忠徳が藩校致道館を大宝寺地内に設立する
1807（文化4）5月　ロシア船の来航で争いになり、庄内藩など東北4藩が出兵を命じられる
1813（文化10）2月　鶴ヶ岡城内で剣術・居合術・鎗術の門弟による御前試合を実施する
1816（文化13）9月　致道館を鶴ヶ岡城三の丸に移転する
1833（天保4）　庄内地方が日照り・大雨などで大凶作となる。また、
4月〜10月　大地震で津波が押し寄せ、50人ほどが死に2000軒の家屋が破壊される
1840（天保7）11月　庄内藩主を長岡に、長岡藩主を川越に、川越藩主を庄内に国替えが命じられる（三方領知替え）
1841（天保12）7月　農民の国替え反対運動などにより、幕府は三方領知替えを中止する
1843（天保14）6月　庄内藩ら5藩に印旛沼の開削工事が命じられる。難工事で20数人の死者を出す（間9月、5藩への工事命令が免除される）。
1848（嘉永元）4月　飛島沖・温海沖に異国船が出没、庄内藩では人数を派遣する
1716（享保元）8月　将軍徳川吉宗が享保の改革を実施する（〜1745）
1787（天明7）6月　老中松平定信が寛政の改革を実施する（〜1793）
1825（文政8）2月　幕府が諸大名に異国船打払いを命じる
1833（天保4）　天保の大飢饉がおきる（〜1839）
1841（天保12）5月　老中水野忠邦が天保の改革を実施する（〜1843）
1842（天保13）7月　幕府が異国船への薪水給与令を出す
1853（嘉永6）6月　アメリカのペリー率いる黒船が開国を求め浦賀に来航する

庄内および酒井家のできごと

1849（嘉永2）12月　江戸在勤の庄内藩士の子弟が種痘を受ける
1854（嘉永7）11月　品川沖台場のうち、五番台場警備を命じられる
1857（安政4）5月　与内坂で藩士2300人が参加する大演習が行われる
1858（安政5）　鶴岡と酒田で定期的に種痘接種が行われる
1859（安政6）11月　蝦夷地が東北6藩に分与、庄内藩は西海岸が与えられ、警備地域が決められる。ハママシケに陣屋を置く
1863（文久3）4月　庄内藩が江戸市中取締を命じられる。浪士組が庄内藩に預けられ、新徴組と改称する
1867（慶応3）12月　幕府の命により、庄内藩らが薩摩藩邸を焼き討ちする
1868（慶応4）4月　戊辰戦争がおき、庄内藩が清川口で新政府軍と戦う
5月　蝦夷地にいた庄内藩士などが支配地を放棄し庄内に引きあげる
（明治元）9月　庄内藩が降伏し、新政府軍が庄内に入る
12月　庄内藩主が会津若松へ国替えを命じられる
1869（明治2）6月　庄内藩主が会津若松、次いで6月に磐城平へ国替えを命じられる。藩では70万両（実際には30万両）を献上することで、庄内に残ることが認められる
1870（明治3）11月　酒井忠篤が70余人を率い鹿児島に留学、西郷隆盛の教えを受ける
1871（明治4）11月　第2次酒田県が成立する。県令は派遣されず、旧庄内藩士が重職を独占する
1872（明治5）4月　酒井忠篤がドイツ留学のため出国する
（翌年、弟・忠宝もドイツへ留学）
8月　鶴岡士族が松ヶ岡開墾に従事する
1873（明治6）末～　雑税廃止と納めすぎた税金の返還を求めるワッパ騒動がおきる
1874（明治7）5月　鶴岡士族が通う苗秀学校と学区に7小学校が設置される／酒井忠発が黒川春日神社に参拝し、能を鑑賞する
12月　松ヶ岡開墾地に蚕室が建設される（以後順次10棟）／三島通庸が酒田県令に就任する
1875（明治8）8月　県庁を鶴岡に移し、酒田県を鶴岡県と改称する
1876（明治9）8月　馬場町の現鶴岡市役所の敷地に、朝暘学校が建設される
1877（明治10）2月～　政府が鶴岡士族の西南戦争への動きを監視する
1878（明治11）6月　ワッパ騒動で農民側に6万3000円余の返還を認める判決が出る
1879（明治12）6月　酒井忠篤・忠宝兄弟がドイツ留学から帰国する
1880（明治13）2月　酒井忠篤が再び家督を相続する
1881（明治14）4月　酒井兄弟が鶴岡に帰り、以後永住する
1888（明治21）7月　私立荘内中学校が開校する
1890（明治23）1月　『南洲翁遺訓』が刊行され、4月から6人が全国を巡り配付する
1893（明治26）　酒田の山居島に山居倉庫が建設される
1897（明治30）6月　鶴岡町立の鶴岡高等女学校が開校する
1898（明治31）12月　酒井忠篤も建設発起人となる西郷隆盛像が東京・上野に完成する
1921（大正10）3月　酒井家庄内入部300年記念の行事が挙行される
1950（昭和25）6月　酒井家の寄付により、財団法人以文会が設立される
1951（昭和26）6月　旧致道館が国史跡に指定される
1952（昭和27）4月　以文会が財団法人致道博物館と改称し、開館する
1989（平成元）8月　松ヶ岡開墾場が国史跡に指定される
2014（平成26）12月　鶴岡市がユネスコの食文化創造都市に認定される
2016（平成28）4月　「出羽三山～生まれかわりの旅～」が日本遺産に認定される
2017（平成29）4月　「サムライゆかりのシルク」が、日本遺産に認定される
酒田市が日本遺産「北前船寄港地・船主集落」に認定される
2019（令和元）5月　鶴岡市が日本遺産「北前船寄港地・船主集落」に追加認定される
2021（令和3）3月　山居倉庫が国史跡に指定される
2022（令和4）　酒井家庄内入部400年記念の行事が挙行される

酒井家歴代当主と家督期間

第12代 忠寛（ただとも）1861～1862
第13代 忠篤（ただすみ）1862～1868
第14代 忠宝（ただみち）1868～1880
第15代 忠篤（ただすみ）1880～1915
第16代 忠良（ただなが）1915～1962
第17代 忠明（ただあきら）1962～2004
第18代 忠久（ただひさ）2004年～

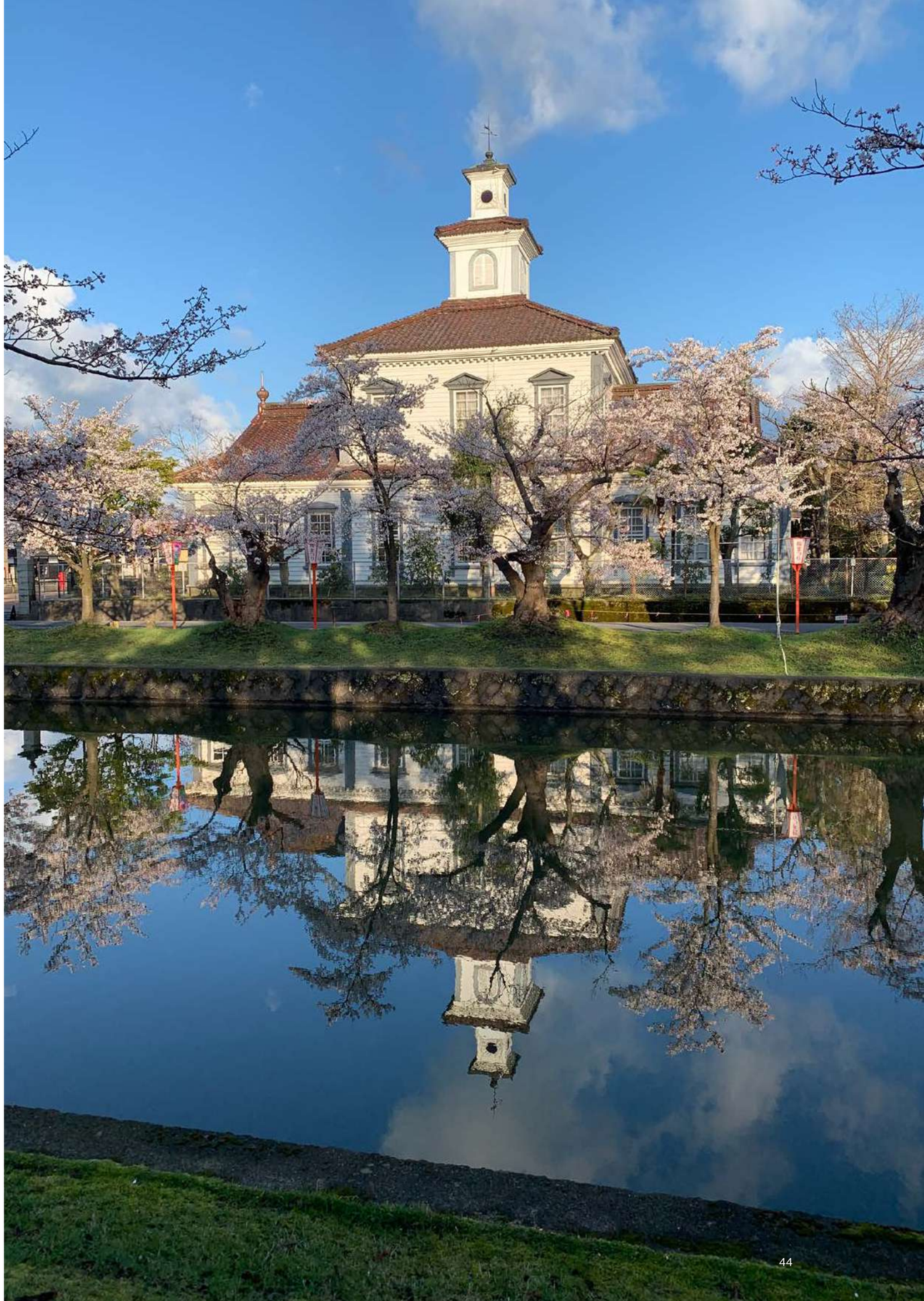
1900　2000

全国のできごと

1854（嘉永7）3月　日米和親条約が結ばれ、開国する
1858（安政5）6月　日米修好通商条約が結ばれる
1867（慶応3）10月　将軍徳川慶喜が大政奉還を申し出る
12月　朝廷が王政復古を宣言する
1868（慶応4）1月　鳥羽伏見の戦いがおき、戊辰戦争がはじまる（～1869）
3月　五ヵ条の誓文が出される
1869（明治2）6月　版籍奉還を命じ、旧藩主を藩知事に任命する
1871（明治4）7月　廃藩置県を実行する
1872（明治5）8月　学制が公布され、特に小学校教育をすすめる
9月　修験宗廃止令が出される
1873（明治6）7月　地租改正条例が公布される
8月　政府が土地にかける税の金納を許可する
10月　西郷隆盛が政府を辞職し、鹿児島に帰る
1874（明治7）1月～　自由民権運動が盛んになる
1877（明治10）9月　西郷隆盛が自害し、西南戦争が終わる
1885（明治18）12月　太政官制度を廃止し、内閣制度がはじまる
1889（明治22）2月　大日本帝国憲法が発布される
1890（明治23）7月　第1回総選挙が実施される
10月　教育勅語が発布される
11月　第1回帝国議会が召集される
1894（明治27）8月　日清戦争がはじまる（～1895）
1904（明治37）2月　日露戦争がはじまる（～1905）
1914（大正3）7月　第1次世界大戦がはじまる（～1918）
1937（昭和12）7月　日中戦争がはじまる（～1945）
1941（昭和16）12月　日本がアメリカに宣戦布告する（日米開戦）
1945（昭和20）8月　日本が降伏し、戦争が終わる
1952（昭和27）4月　連合国の占領が終わり、独立を回復する
1955（昭和30）　高度経済成長（～1973）
1964（昭和39）10月　東京オリンピックが開催される
1970（昭和46）3月　大阪で万国博覧会が開催される
2011（平成23）3月　東日本大震災がおきる
2020（令和2）～　新型コロナウィルスが猛威をふるう
2021（令和3）7月　東京オリンピックが開催される

酒井家庄内入部400年
記念事業の抄録

徳川四天王の筆頭、酒井忠次を祖とする旧庄内藩主酒井家。
元和8年（1622）に酒井家3代忠勝がここ庄内に入部してから
400年の節目を迎えました。
酒井家の400年の歩みに重なるこの地の歴史と文化。
記念事業では、鶴岡・庄内を次の100年につなげていくため、
鶴岡・庄内の歴史と文化を学び、郷土への愛着と誇りを高めながら
多くの方にその魅力を発信する取組を展開しました。



キャッチフレーズ

400年から学ぶ庄内 SHONAI
みんなでつなごう将来 SHORAI

基本方針

庄内の歴史を知り、
庄内の精神・価値を学び考え、
持続可能な未来を創造します。

事業推進体制

酒井家庄内入部400年記念事業実行委員会

総務企画部会
事業全体の進行管理、普及啓発と情報発信

- **観光部会**
  観光誘客事業
- **歴史文化部会**
  歴史発見事業
- **まちづくり部会**
  城下のまち鶴岡将来構想

公式ロゴマーク

記念事業での活用や機運醸成につなげるため、記念事業の公式ロゴマークを作成しました。

酒井家庄内入部400年

【コンセプト】
酒井家庄内入部400年の400をモチーフとし、
酒井家の家紋、鎧兜と組み合わせました。
正方形は庄内米作りの枡、円は交流、かすれは
次代への発展、勢いを表現しています。

ロゴマークができるまで

ロゴマーク決定には多くの方が携わっています。
その制作は、デザインの公募から始まりました。応募があった181点もの作品の中から、有識者等による審査会にて、候補作品3点を選定。その3作品を対象とした一般投票により決定しました。

❶デザイン公募

公募期間　令和2年12月25日㈮～令和3年1月21日㈭
応募総数　181点

❷審査会

日付・会場　令和3年2月1日㈪　鶴岡市役所庁議室
審査員
○中山ダイスケ 氏（東北芸術工科大学 学長）
○酒井忠久実行委員会顧問
○皆川治実行委員長
○武田真理子総務企画部会長（東北公益文科大学大学院公益学研究科長）
○上野由部歴史文化部会長（公益財団法人黒川能保存会 業務執行理事）
○石原純一観光部会長（鶴岡観光協会 会長、荘内神社 宮司）
○上木勝司まちづくり部会長（鶴岡市都市計画審議会 会長、山形大学名誉教授）



❸一般投票

投票期間　令和3年2月18日㈭～3月18日㈭
投票総数　3,791件

❹発表・表彰式

日付・会場　令和3年3月26日㈮
鶴岡市役所庁議室
デザイン制作者　天野穂積 氏（静岡県静岡市）
得票数1,413票



左から　皆川治実行委員長
天野穂積 氏
酒井忠久実行委員会顧問
中山ダイスケ 氏

本郷和人　歴史講演会













日　時
令和3年10月31日(日)　午後1時～3時45分

会　場
グランドエル・サン　クリスタルホール

参加者
250人

内　容
●本郷和人歴史講演会
演題「不屈の庄内」
講師 本郷和人 氏（東京大学史料編纂所教授）

●パネルディスカッション
「将来につなぎたい庄内の文化」
〈パネラー〉
本郷和人 氏
上野由部 氏（黒川春日神社 下座 能太夫（座長）20世）
荻原和歌 氏（料理研究家）
小鈴 氏（舞娘茶屋「相馬楼」芸妓）
〈コーディネーター〉
奥山知寿子 氏（フリーアナウンサー）

●かたばみ太鼓と荘内藩甲冑研究会の共演
「酒井の太鼓」

●酒田舞娘の演舞











酒井家庄内入部　400年記念式典











日　時

令和4年10月8日(土)　午後2時30分～5時45分

会　場

荘銀タクト鶴岡　大ホール

参加者

1,000人

内　容

- ●黒川能の上演　能「高砂」より
- ●小・中学生歴史文化研究コンクール表彰式
- ●記念講演「酒井家・庄内の位置づけ」
  本郷和人 氏(東京大学史料編纂所教授)
- ●記念座談会「未来に歴史と文化をつなぐために」
  徳川家広 氏
  (徳川宗家19代当主、公益財団法人徳川記念財団理事長)
  酒井忠次 氏
  (酒井家18代当主、公益財団法人致道博物館代表理事・館長)
  本多大将 氏(本多忠勝家22代当主)
  榊原政信 氏(榊原康政家17代当主)
  井伊直岳 氏(井伊直政家18代当主、彦根城博物館 館長)

〈コーディネーター〉

本郷和人 氏

山川麻衣子 氏(山形放送アナウンサー)



















本郷和人氏講演会

歴史学者で、東京大学史料編纂所教授、テレビの歴史番組でもお馴染みの本郷和人先生から、令和3年10月31日「本郷和人歴史講演会」、令和4年10月8日「酒井家庄内入部400年記念式典」で講演をいただきました。

本郷和人歴史講演会「不屈の庄内」

徳川家康が関東に入った時、家臣で一番大きな領地を与えられたのは、徳川四天王のひとり井伊直政の箕輪12万石であった。本多忠勝は、房総半島の大多喜10万石、榊原康政は、館林10万石を拝領した。では、四天王の筆頭・酒井忠次はどうであったか。既に代替わりをして、息子・家次の代になっていたが、下総臼井4万石しか与えられなかったのである。

忠次の妻・臼井姫は、家康の叔母にあたる人物で、忠次は、家康の義叔父にあたる。幼少時代から家康を支え続け、多くの武功をあげた忠次の息子・家次が、何故4万石だったのか。

これについては〝伝説〟がある。忠次が家次の加増を申し出ると、家康は「お前も息子がかわいいのか。」と言ったという。これは、織田・徳川軍が武田軍を破った長篠の戦いから4年後の1579年、家康の長男・松平信康が、織田信長の命によって切腹させられるという事件によるものだ。信康が敵の武田と通じているという嫌疑がかけられたとき、酒井忠次は、信長に意見を求められたのだが、信康をかばわなかったというものである。

酒井家は、家康の死後、2代将軍秀忠の代になってようやく10万石を与えられ、その後14万石の庄内に入部したところを見ると、家康と忠次の間には、何かがあったと考えるのが自然ではないだろうか。それでも酒井忠次が、徳川家臣の筆頭であり、そのことは譜代大名の分類をまとめた新井白石の『藩翰譜』にも記されている。十八松平、外戚、その次の武功の家、つまり戦いの中で手柄を立てた家として、第一に酒井、そして本多、榊原、井伊の名前が記されており、これこそが、徳川四天王の根拠でもある。

徳川は、信頼する四天王に大きな領地を任せ、中でも庄内を治める酒井家は、東北の要であった。酒井家は、政治の鶴岡、経済の酒田の両方を実にバランスよくしっかりと治めていた。当時は、太平洋側の航路よりも日本海側の交易の方がはるかに豊かであり、極めて重要な拠点であった酒田もしっかり押さえよということだったのだと思う。

徳川の世では、国替えがなかった譜代大名はほとんどいない。にもかかわらず酒井家がずっと庄内を治めてきたことからも、庄内地方が、徳川にとっていかに重要であったかがわかる。また、殿様に出された三方領知替えに反対し民衆が阻止運動をしたという話は、他では絶対にない。戊辰戦争では、庄内藩は、官軍を領地内に全く入れなかったという敢闘を見せた。その戦いぶりの凄さは、西郷隆盛、黒田清隆も認めざるを得なかった。

酒井家は、江戸時代の初めから終わりまで一貫して、この庄内という地方を守り抜いた。それは譜代大名にとって一番大事なことである。日本全体の政治を仕切ることよりも、一つの地域、一つの地方をがっちり固めて守り抜く。それが譜代大名に与えられた使命だった。その意味で、酒井家は徳川四天王の筆頭として見事にその使命を果たし抜いたのである。

酒井家庄内入部400年記念式典記念講演「酒井家・庄内の位置づけ」

江戸時代、東照宮信仰で好まれた『徳川十六神将図』『徳川二十八神将図』と呼ばれる絵には、徳川家康と家康に仕えた武将が描かれているが、どの絵でも必ず家康のそばには4人の武将がいる。「徳川四天王」と呼ばれる、酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政である。絵は、四天王、十二神将という古くから仏教にある考え方に由来すると推測されるが、いつから徳川四天王と呼ばれるようになったかは不明である。

徳川家に仕えた朱子学者新井白石が記した『藩翰譜』には、家康に仕えた大名がまとめられている。そこには、軍事で大きな功績を上げた酒井、本多、榊原、井伊の四家こそが徳川家臣団の筆頭であり、その次に政治を行う家が並ぶということがはっきり記されている。

しかし、江戸時代で重用されたのは、四天王のような武功の家ではなく、むしろ政治の家であった。太平の世で大きく取り上げられるのは、「政治家としての武将」であったが、家康が幕府を開いた当時、それとは、全く違った感覚、概念というものがあったのだと思う。

家康が政治よりも軍事を重んじた事は、徳川四天王が与えられた領地が、家臣団の中でも桁違いに大きいことからも伺える。酒井忠次は、家康が健在のうちは、領地こそ増えていないが、2代将軍秀忠の頃には、庄内14万石の領地を与えられ、譜代大名として相当有力であったことが分かる。本多忠勝も関東に家康が入った際、大多喜で10万石、榊原が館林で10万石、井伊直政は、箕輪12万石が与えられた。

一方、政治を行っていた武士たちはどうか。家康が「我が友」と呼び、政治的なことを何でも相談したと言われている本多正信は、政治で大きな力を発揮したにもかかわらず、領地は2万2000石、一説には1万石という話もある。また、幕府の経済的なリーダーと考えられる松平正綱も領地は2万石に過ぎない。家康が関東に入った時の関東代官も皆冷遇された。

家康は叩き上げの武功をあげる武士を高く評価した。酒井、本多は「三河譜代」の中でも松平とゆかりの深い「安祥譜代」と言われるが、いっぺんに抜擢されたわけではない。戦で着実に成果を出し、認められてきた。榊原家、井伊家は「安祥譜代」ではないが、家康に見込まれ武功を積みあげた。

家康は、信頼する部下に大きな領を任せ、守り切る事を求めた。「徳川の敵が現れたら、その敵を引きつけて、籠城し、味方が来るのを待て。いざとなれば、その城で討ち死にを遂げよ」と。

こうして、本多家、榊原家、井伊家は、特に西の大名に対しての備えとしての役割を果たしてきた。そして東北では、酒井家が庄内十四万石という大きな領地を任せられ、幕末まで活躍したのである。酒井家が幕府から与えられた役割は、会津松平家と連携を取り、上杉家（米沢）、佐竹家（秋田）、伊達家（仙台）、といった外様大名の家々を押さえることであり、江戸時代が終わるまで、その役割をしっかりと果たしたのである。





酒井家庄内入部400年記念式典 記念座談会

「未来に歴史と文化をつなぐために」

出演◎ 徳川家広氏（徳川宗家19代当主／公益財団法人徳川記念財団理事長）、酒井忠久氏（酒井家18代当主／公益財団法人致道博物館代表理事・館長）
本多大将氏（本多忠勝家22代当主）、榊原政信氏（榊原康政家17代当主）、井伊直岳氏（井伊直政家18代当主／彦根城博物館 館長）
コーディネーター◎ 本郷和人氏（東京大学史料編纂所教授）、山川麻衣子氏（山形放送アナウンサー）

徳川宗家、「徳川四天王」家が勢揃い！

記念式典の中で、徳川宗家、「徳川四天王」のご当主の皆さまから、それぞれの家に伝わる歴史やエピソードなど、語り合っていただきました。

山川（司会）――本日は、徳川ご宗家、「徳川四天王」のご当主の皆さまから、ご自身の家に伝わる歴史やエピソードなどを本郷和人先生と一緒にお伺いして参ります。はじめに、皆さまご自身の家の歴史について、どのように伝えられてきたかをお聞きかせください。

徳川　私の父（徳川宗家18代・恒孝氏）は戦後、会津松平家の分家から徳川宗家に養子で入るのですが、第2次大戦中、子どもだった父は、静岡県の御殿場市に疎開しており、ものすごくひもじい思いをしたと聞いています。というのも、父の父は横浜正金銀行に勤務していたのですが、大東亜共栄圏の事務係としてシンガポールに転勤となっており、残された家族に銀行内部のヤミ物資が入らなくなったようなのです。ですので父は、私が好き嫌いを言ったり、食事を残したりすると、とても怒りました。いわゆる旧華族やそれに近い人たちの中で、とくに厳しい生活を強いられた家だったのだな、という感慨を持っています。

酒井　私は大学生まで家の歴史を意識することはありませんでした。東京で大学卒業後も少し残りたい気持ちがあったのですが、父から「庄内の地縁や地域を知ってほしいから、すぐ帰ってこい」と言われました。あの頃は地元と東京に格差を感じていて、東京でいろいろやってみたいという思いが強かったのですが、鶴岡に戻り、松岡株式会社という製糸会社に就職しました。給料が、東京のバイトで受け取ったお金よりも非常に安かったので、びっくりした記憶があります。それでも、会社での勉強会や、論語を学ぶ機会など、地元の人たちから様々なことを教えていただき、大変よかったなと思っています。

本多　小さい頃に、本多忠勝から数えて自分が22代目であることや、忠勝の名前には「戦で負けないため（ただ勝つ）」という由来があることを聞いていました。また、本多家には代々、当主が亡くなると、お墓に刀を納めるというエピソードがあります。父の納骨のときに、お墓の中に刀が錆びているものも含めて何刀もあるのを見て、本多家の家柄や当主の勤めを認識しました。

榊原　父からは戦後になってからいろいろな話を聞きました。とくに「徳川様を大事にしなさい」と度々言われましたのを覚えています。私の母が徳川慶喜の孫なのですが、「徳川家とは切っても切れない縁があるのだから、徳川様のそばにいるように」という話でした。あとは、家として歴史の話はほとんどなく、父の貴族院議員としての話の方が多かったですね。

井伊　私は養子でして、小さい頃に先代や先々代から直接お話を伺うということはありませんでした。井伊家は彦根とのつながりが深く、井伊直政が関ヶ原の戦のあと佐和山城に入ってから420年余り、彦根との関わりがあります。先々代は彦根市長を9期36年務めました。井伊家には、戦前に評価が厳しかった井伊直弼を正しく評価していただくため、関係史料を収集・保存してきた歴史があります。幕末の井伊家史料は本郷先生の東京大学史料編纂所で活字印刷が3年前に完結し、広く使っていただけるようになりました。当主になって、井伊直弼の存在の大きさを強く感じています。

――本郷先生、皆さまのエピソードからいかがでしょうか。

本郷　皆さま、素晴らしい顔立ちをされながらお話をされていて、感銘を受けております。歴史とは、その方のお顔や人格に現れるのでしょう。井伊様も養子に入られたあと、井伊家の祖霊に守られていらっしゃるのかなと思います。

――続いて2つ目の質問ですが、皆さま、ご自分の家に代々伝わる教えや習慣などはございますか。

この地の歴史を学ぶことで次の時代につなげていきたい。

酒井家18代当主　**酒井忠久 氏**



徳川　徳川家は3代ごとに養子が入っているので何も伝わっておらず、また今は普通の民間人ですので、将軍としての心構えとかを教えられても困るばかりです。

本郷　家広様は家康公にお顔が似ていらっしゃると思うのですが？

徳川　ありがとうございます。そうですね、私も松本潤さん（『どうする家康』主演）に似るようにしたい（笑）。ただ、父とは考え方がだんだん似てくるところがあります。それは、何か代々の教えがあるということではなく、歴代の当主たちが何を考えていたかを本当に真面目に考える動機があるのは私と父くらいなものであって、それが結果として似たような人格を作っていくのだと思います。たとえば16代の家達は貴族院議長を退いた後でアメリカへフランクリン・ルーズベルト大統領に会いに行っていますが、江戸城内の田安屋敷で生まれた彼には、いったい自分の人生はどう見えていたのだろうかといったことを、大真面目に想像するわけです。あと、家訓ということで思い出しましたが、「殿様」の家は共通して、「食べ物の好き嫌いを言うな」と言われているようです。

酒井　会津には「ならぬことはならぬ」、鹿児島には「泣こよかひっ飛べ」といった厳しい教えがあります。庄内は、理不尽で我慢できないものに対して、たとえ相手の身分が高くても、負い目があっても、勝敗は度外視して敢然と戦わなければ、腰抜け侍として相手にされなくなる。「一挙一動、人と會するも他を冒さず、又他に冒されざるを勉む」と『荘内歴史』に載っています。『秋田・庄内戊辰戦争』を書いた郡義武氏は「庄内には会津よりもっと苛烈な教えが

「何事にも謙虚に感謝をもって対応すること」というのは、小さい頃から強く言われていました。

本多忠勝家22代当主　**本多大将 氏**



榊原　先ほどもお話ししたとおり、教えや習慣などは特にありませんが、父は質実剛健な人でした。「服が破れて縫い直したものを着ても恥ずかしくないのだ」と、よく言われました。ちょうどバブルの手前で、周りにはおしゃれな服を着ている人もいるのを見て、なおさら父はそう言ったのだと思います。私も、本当に質素であることは大事だと思いますし、一家を成して、続けていくには、家族がそうあるべきだと思っています。

井伊　井伊直弼が『茶湯一会集』の中で「一期一会」という言葉を書いています。「同じような顔触れの茶会でも、その茶会は二度と繰り返されることがない。一生に一度の会なので亭主もお客さんも互いに誠意を尽くす」という心構えを説いたものです。千利休の弟子の山上宗二が残した「一期に一度の会」とも一致しますが、四字熟語に記したのは『茶湯一会集』が最初だと言われています。この「一期一会」という言葉を大事にしたいと考えています。

本多　「目立った行動は慎むこと、何事にも謙虚に感謝をもって対応すること」というのは、小さい頃から強く言われていました。忠勝57戦無傷と言われていますが、殺めた敵方のほかに、本多の家臣も含めれば、相当数の人々が亡くなったのだと思います。また、仏壇には、本多の過去からの親族の戒名が記載されているものがあり、それを日々めくって合掌する習慣があります。ただ、1年365日、毎日が誰かしらの命日となっています。

ある」と話しています。だから父も、周囲に厳しいことを言わず、他人の悪口を言うことはなかったのだなと思っています。

父からは「徳川様を大事にしなさい」と度々言われましたのを覚えています。

榊原康政家17代当主　**榊原政信 氏**



――本郷先生、皆さんのお話をお聞きしていかがでしょうか。

本郷　徳川様がおっしゃった「好き嫌いを言うな」という言葉ですが、殿様が「おいしい、まずい」「お風呂がぬるかった」などと言うと、誰かが責任をとる必要があったらしいです。下手をすれば家臣が腹を切らなければならない。殿様は自分を厳しく律して生きていらっしゃったようですね。そうした重みのある言葉だと思いました。

――では続いて3つ目の質問に参ります。御家を継承、または御家に関することを引き継がれたときに、大変だったこと、あるいはありがたいと思ったことなどはありますでしょうか。

徳川　私は今、徳川記念財団の理事長を務めていますが、実際に引き継いで、極めて真面目に経営をしなくてはいけなくて、大変なことしかございません。ありがたいことはほとんどございません（笑）。ただ、楽観的に物事を見られるほうですので、そういう性格に産んでくれた両親に感謝しております。

酒井　自分の家を伝統ある家だとは思っていませんでした。昨今はいろいろと取り上げられて「四天王」と言われますが、昔は本当に地味で、ドラマではちょっと出ておしまい、という感じでした。ただ、祖父（16代・忠良公）が今の致道博物館でバラ園をやっていたとき、かなり人が来ていたのを見て「著名な家なのだな」と感じました。これから話題に

当主になって、井伊直弼の存在の大きさを強く感じています。

井伊直政家18代当主　**井伊直岳 氏**



なると思いますが、来年のNHK大河ドラマ『どうする家康』でも酒井忠次が取り上げられるので、庄内地域のPRになればいいな、と期待しています。

本多　自分の中学・高校時代の教科書には「本多忠勝」の名前まで載ることはありませんでした。今はゲームやアニメで名前が知れ渡り、とてもありがたく思います。ドラマでは、本多忠勝は屈強な方が演じることが多いのですが、実際はそんなに大きかったわけではないので直していただけたら……。岡崎市に寄託している重要文化財などの管理が少々大変なところはありますが、四百数十年を経て、宗家並びに「四天王」と呼ばれている皆さんとこういう場を共有できることは、大変喜ばしい限りです。

榊原　若い頃の私は、家が「四天王」であることは眼中になく、父のおかげで小中高と自由奔放に生活していました。家に大学の先生が史料を見るためにたくさんみえられたことや、母がその史料の整理に苦労していたことを覚えています。今は上越市と共同で史料を保管していて、そうした史料は高田にある上越市立博物館の「榊原コーナー」で展示されています。史料は古文書を中心に1745点あります。私は見ても全くわかりません。自分で情けないと思いますが、今さら勉強する気も起きませんし、皆さんが大切に保管してくださって、それが皆さんのお手元に届くのであれば、ありがたいなと思っています。

井伊　史料を守る大変さはずっとあります。先々代が亡くなった後、彦根市に史料を寄贈して、彦根城博物館で管理していただいているのですが、まさか自分がそこの館長になるとは……。井伊家の史料を管理する運命からは逃れられないようです。ありがたいことと言えば、まさに今ここ（座談会）にいることで、貴重な経験をさせていただいています。また、私は普段は地方公務員であり、文化財課で歴史や文化財を扱っています。先祖調査のお問合せをいただいても、史料が少なく分からないことが多いのですが、井伊家の場合は史料がたくさん残っていますので、その意味では、大変ありがたいことなのかなと思っています。

人の和を保って努力をしていれば、必ず良い結果が出る――鶴岡・庄内にはそうした文化がしっかりと根付いています。

徳川宗家19代当主　**徳川家広 氏**



――では続きまして、4つ目の質問に参ります。ご自身の祖先が小説やドラマ、映画などに登場する際、だ



れがどのように演じるのか、またはどのような人物像で描かれるのかといった、気になることはございますか。

徳川　全然気にしていないです。毎週同じ時間にテレビの前に座るといった規則正しいことができない人間なのです（笑）。ドラマはあまり見ないのですが、解説本で家康を演じている俳優さんがどのような方なのかを見ることはありますね。

酒井　来年の大河ドラマ『どうする家康』では、酒井忠次を大森南朋さんが演じます。特技は宴会芸「えびすくい」。時には場を盛り上げる気遣いの人であるけれども、自分の意見を控え、家康を守ることだけを考えている。奥方で、家康の叔母にあたる碓井姫・登与を猫背椿さんが演じますが、家康不在の岡崎城を裏方として支えるマネージャー的存在で、忠次と一緒に「えびすくい」を踊るお調子者のようです。「えびすくい」はうちには伝えられておらず非常に残念ですが、ドラマでどのように演じられるか興味のあることころです。

本多　特に大河ドラマですが、本多忠勝は演じる俳優さんのイメージ次第で変化するのがおもしろいなと思います。先ほども申し上げましたが、忠勝自体は大きくなかったはずなのに、何の影響なのか、大柄な体格の俳優さんが演じているのが多い。『どうする家康』では、肉体派というよりは、イケメンの若手俳優さん（山田裕貴氏）が演じるので、またそれで忠勝のイメージが変わるのかなと期待しています。

榊原　大変申し訳ないのですが、テレビで見るのは主にスポーツ中継やニュースで、ドラマを見る習慣がないのです（笑）。野球の大谷翔平君の活躍に比べると、ドラマの榊原康政からは痛快感を味わえるとは思えなくて……。

井伊　大河ドラマ1作目『花の生涯』（昭和38年4月～12月）の放送で、世間の井伊直弼の見方が変わりブームがおこりました。ドラマでは直弼の「安政の大獄」のイメージではない面が描かれたようで、放送翌年、彦根城は１２０万人を超える観覧者を迎えています。この記録はまだ破られておらず、ドラマの影響の大きさを感じています。また、井伊直政は、大河ドラマでは実年齢よりも年配の俳優さんが演じることが多いのですが、『どうする家康』では若手の役者さん（板垣李光人氏）が演じられるとのことで、直政がどのように描かれるか楽しみにしています。

――本郷先生は歴史上の人物が登場するゲームをなさっているとか。

本郷　私は武将や英雄が女性に描かれるゲームで遊ぶことがあるのですが、その中に徳川家康や本多忠勝もいます。ご当主の皆様はどう思われているのかなと考えていたのですが、問題なさそうでホっとしています（笑）。

――それでは最後に、今年、酒井家庄内入部４００年を迎えた庄内の皆さまへのメッセージをお願いいたします。

徳川　鶴岡にお邪魔したのは今回で2回目ですが、最初に来た約10年前と比べてもしっかり発展しているので驚いています。いろいろ問題が多い時代ではあるのですけれども、人の和を保って努力をしていれば、必ず良い結果が出るのもまた事実で、鶴岡・庄内にはそうした文化がしっかりと根付いています。皆さまには希望と誇りを持って未来を築いていっていただきたいと思っています。日本の良いところが凝縮された鶴岡・庄内、本当に全く心配ございません。

酒井　「三方国替え」のときに、遊佐町出身の佐藤藤佐（とうすけ）が、矢部駿河守へ相談に行った際に、「庄内の人たちの気風から、川越（松平斉典）では庄内を3年も治められないだろう」と告げられたともいわれています。庄

酒井様とともに歩んで発展してこられた庄内は憧れの土地です。

東京大学史料編纂所教授　**本郷和人氏**

内の人々は人智が優れていることに加えて、自然環境にも恵まれてこの４００年を歩んできたのだなと思います。そして、この地の歴史を学ぶことで次の時代につなげていきたい。今日は皆さんから集まっていただき、良いお話を伺うことができて本当にありがとうございました。

本多　このたび初めて庄内に来させていただきました。ありがとうございます。本多は「転勤族」で、色々なところに行っておりましたので、酒井家のように、同じところにずっとおられるのはすごくうらやましいと思っています。今後とも酒井家と庄内地域が繁栄していくことを願っています。

榊原　今日は入部４００年の記念式典にお招きいただきありがとうございます。越後高田は、榊原家が入部する以前、酒井家が治めた時代がありました。これを機会に、日本海沿いの高田と鶴岡で何か交流ができたらいいなと思います。高田と鶴岡、一緒に仲よく先へ進んでいきましょう。今後ともよろしくお願いいたします。

井伊　「○○４００年」という記念行事を展開できる「○○」があるのは素晴らしいことです。庄内と酒井家、鶴岡と酒井家のつながりの深さ、ご縁の深さをすごく感じています。今日も会場の熱気もすごいですね。記念事業が、４００年の独自に紡いできた歴史と向き合うきっかけにもなっているのかなと思います。次の１００年につなげていっていただけるようお祈りしています。

――皆様、本日はありがとうございます。それでは本郷先生から今日の座談会の感想をお願いします。

本郷　故郷を愛する気持ち――愛郷心は誰もが持っているものと思っています。鶴岡・庄内にある歴史や物語を新しい世代に伝えていくことで、自然に愛郷心が生まれてくるのではないでしょうか。今は東京に行かなくても情報・物流にアクセスできますが、だからこそ、自分のまちを大事にするということに意味がある。僕はすごく皆さんがうらやましい。僕は、東京で生まれ育ったがために全くの根無し草です。定年退職後のことを考えますが、どこにも行くところがありません。酒井様とともに歩んで発展してこられた庄内は憧れの土地です。皆さんどうぞこれからも酒井様とともに、まちを守り、つくっていただければと思います。ありがとうございました。

――本郷先生、ありがとうございました。これをもちまして、「酒井家庄内入部４００年記念座談会」を終了いたします。ご来場の皆さま、檀上の皆さまに大きな拍手をお願いいたします。







（写真上）会場となった荘銀タクト鶴岡
（写真下）コーディネーターの本郷和人氏と山川麻衣子アナウンサー

スタンプラリー対象特別展示一覧

鶴岡公園周辺エリア

◎致道博物館
特別展
4月14日～5月29日　【第1部】徳川四天王筆頭・酒井忠次
6月1日～7月18日　【第2部】中興の祖・酒井忠徳と庄内藩校致道館
7月22日～9月7日　【第3部】民衆のチカラ ～三方領知替え阻止運動～
9月10日～10月31日　【第4部】藩祖・酒井忠勝
11月3日～　【第5部】酒井家の明治維新 ～戊辰戦争と松ヶ岡開墾～

◎旧風間家住宅丙申堂
10月1日～31日　酒井家ゆかりの名品展

◎荘内神社　宝物殿
企画展
6月1日～7月10日　【第1部】武具展
7月11日～8月31日　【第2部】大絵馬展
9月1日～10月31日　【第3部】鶴ヶ岡城の姿
11月1日～12月25日　【第4部】天保お座り事件展

◎旧致道館
4月23日～11月30日　藩政時代をたどる ～入部から幕末まで～

◎大宝館
4月14日～11月30日　酒井忠明展 ～今もなほ殿と呼ばるることありて～

◎鶴岡市立藤沢周平記念館
3月25日～11月15日　藤沢周平が描いた庄内藩
11月18日～R5年5月30日　「海坂藩もの」にみる庄内藩

◎鶴岡アートフォーラム
10月21日～11月6日　鶴岡シルク特別展 ファンファーレ 扇の舞 NUNOとwe+による テキスタイルインスタレーション

◎鶴岡市郷土資料館
企画展
4月26日～9月19日　【第1部】大泉紀年の世界展
10月19日～12月4日　【第2部】庄内藩江戸市中取締展 ～庄内藩士松平造酒助がみた 幕末の江戸～

鶴岡広域エリア

◎鶴岡市立加茂水族館
4月14日～11月30日　出羽庄内藩ゆかりの食

◎出羽ノ雪酒造資料館
4月14日～11月30日　酒井家第17代当主 忠明先生の墨跡

◎東田川文化記念館
7月1日～24日　酒井家と庶民

◎出羽三山歴史博物館
4月29日～11月23日　羽黒山と庄内藩展

◎いでは文化記念館
6月25日～11月21日　羽黒山と庄内藩 ー天宥別当事蹟・芭蕉門弟と庄内俳壇ー

◎羽黒・芸術の森　今井アートギャラリー
特別展
4月24日～5月29日　【第1部】殿様の書～「墨客」としての酒井家
8月6日～9月19日　【第2部】酒井忠明作品展

◎松ヶ岡開墾記念館
4月21日～R5年3月31日　酒井家と松ヶ岡開墾場

◎黒川能の里・王祇会館
10月2日～11月29日　黒川に残る酒井家拝領品の数々

◎丸岡城跡史跡公園
10月1日～11月27日　特別企画　丸岡城跡出土品展

酒田・三川・庄内・遊佐エリア

◎本間家旧本邸
7月15日～9月5日　戊辰資料展

◎本間美術館
企画展　本間家伝来の宝物
4月10日～5月30日　【第1部】絵画と歴史資料
6月3日～7月19日　【第2部】書跡と工芸品

◎酒田あいおい工藤美術館
企画展
4月14日～6月26日　【第1部】庄内の金工作展
7月2日～9月26日　【第2部】紅花染　衣装・古布展
10月1日～11月28日　【第3部】芭蕉と出羽の俳人たち

◎ギャラリーなご美
6月4日～7月2日　殿様の書～「墨客」としての酒井家

◎松山文化伝承館
4月14日～6月19日　松山藩360年展

◎三川町文化交流館アトク先生の館
10月29日～11月27日　庄内藩西蝦夷地の開拓と庄内農民

◎清川八郎記念館
7月16日～11月30日　清川村の齋藤治兵衛家と庄内藩

◎清川歴史公園　清川関所
4月14日～11月30日　荘内藩の参勤交代

◎旧青山本邸
4月29日～　藩政下の遊佐

庄内ミュージアム連携

酒井家庄内入部400年という大きな節目を契機に、地域の歴史と文化を保管保存し、
さらに展示公開することで、その魅力を発信しているミュージアム施設間の連携を強化し、
来訪者や利用者の域内周遊の促進を図りました。

ミュージアムスタンプラリー

庄内2市3町の26の文化施設による酒井家庄内入部400年の記念展示を巡るミュージアムスタンプラリーを実施。
期　　間　令和4年4月14日㈭～11月30日㈬
対象施設　26施設 ❶鶴岡公園エリア8施設
❷鶴岡広域エリア9施設
❸酒田・三川・庄内・遊佐エリア9施設（酒田5、三川1、庄内2、遊佐1）
参 加 者　7,500人
備　　考　3つのエリアのスタンプ1個ずつに、エリア問わず1個を加えた、合計4個のスタンプを集めた参加者に、オリジナルエコバックを進呈。









オリジナルグッズなど


クリアファイル



トートバッグ（黒、白）


バッジ


タオルハンカチ


シール



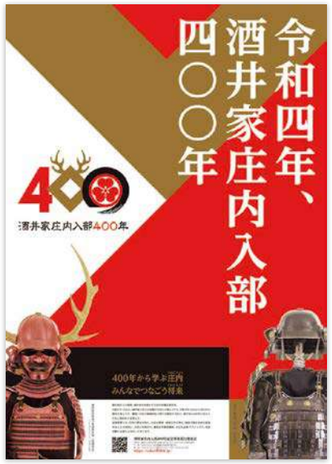
R4市役所壁面看板

周知・PR

ポスター/のぼり/リーフレット/公式サイト・SNS


R3リーフレット


R3のぼり2種



R3ポスター


R4リーフレット


R4のぼり

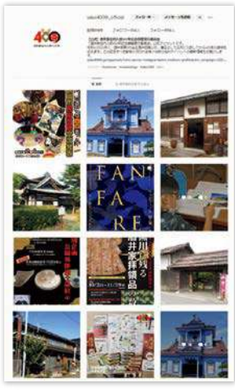


R4ポスター


X（旧Twitter）



Facebook



Instagram



公式サイト

新聞、地域誌での情報発信

●「山形新聞」
2022年1月30日　広告特集掲載
2022年3月17日～21日　特集記事掲載（全5回）
①歴史に名を刻んだ初代・忠次
②居城跡地に「鶴岡公園」
③学びの原点・致道館
④松ヶ岡開墾場の現在
⑤現代の当主

●「荘内日報」
2021年10月5日　広告特集掲載
2022年3月4日～6日　特集記事掲載（全3回）
酒井家庄内入部400年　藩校致道館
学びの系譜　上・中・下
2023年3月18日　広告特集掲載
2022年8/24号　「敬天愛人」　記念式典

●「クレードル」
2021年11月号　特集　酒井家庄内入部400年①
2022年7月号　特集　酒井家庄内入部400年②

●「庄内小僧」
2022年3月号　令和3年度プレ事業実績、令和4年度記念事業の予告

●「e-towns」
2022年 3/1号　令和3年度プレ事業実績、令和4年度記念事業の予告
5/1号　ミュージアムスタンプラリー
8/15号　記念式典・歴史講座

●「鶴岡タイムス」
2022年 5/1号　ミュージアムスタンプラリー
7/1号　こども記者プロジェクト参加募集
8/15号　記念式典
10/1号　歴史講座

●「コミュニティしんぶん」
2022年 8/12号　記念式典





ラジオ

令和3年度
YBCラジオ「ドンキーのいいのぉー！庄内」（毎週土曜日11時～12時）　番組内特別コーナー（ゲスト出演）
●8/28　アフロりゅうじ 氏　総務企画部会員、YouTuber
●9/11　菅原義勝 氏　歴史文化部会員、致道博物館主任学芸員
●10/9　石原純一 氏　観光部会長、鶴岡観光協会 会長、荘内神社 宮司
●11/13　小鈴 氏　酒田舞娘「酒田小鈴」代表
●12/11　須田剛史 氏　加茂水族館「沖海月」料理長
●1/15　上野由部 氏　歴史文化部会長、黒川能保存会 業務執行理事
●2/12　田中章夫 氏　本間美術館 館長
●3/12　酒井忠久 氏　酒井家18代当主

令和4年度
●8/23　60秒パブリシティ　内容：記念式典
●8/26　60秒パブリシティ　内容：記念式典
●9/9　生リポート　出演：本間豊 氏（致道博物館学芸部長）
内容：致道博物館「藩祖・酒井忠勝」展、刀剣乱舞コラボイベント
●10/7　TELインタビュー　出演：石原純一 氏
内容：荘内大祭・にぎわい市
●10/28　60秒パブリシティ　内容：鶴岡シルク特別展・ミュージアムスタンプラリー
●3/3　TELインタビュー　出演：上野由部 氏
内容：庄内の歴史ハンドブック

メディア等を活用した周知・PR

歴史雑誌、県外情報誌での情報発信





「歴史街道」2022年9月号・10月号（発行：各号65,000部）





「仙台闊歩 Kappo」2022年9月号（発行：25,000部）





「新潟こまちKomachi」2022年9月号（発行：55,000部）

市民活動支援

酒井家庄内入部400記念事業のPRや、地域の歴史文化を学ぶ機会の創出を目的として、
市民グループ等の自主的な活動を支援しました。

令和3年度　市民活動支援

●採択件数　6件

事業名／団体
・酒井家庄内入部400年記念アマチュア無線局の開設／日本アマチュア無線連盟鶴岡クラブ
・七絃琴復興プロジェクト／アンサンブル・チコーニア
・酒井家庄内入部400年記念演舞制作事業／荘内藩甲冑研究会・荘内武者隊
・松代・高田における酒井氏の動向に関する現地調査／鶴岡温故会
・酒井家庄内入部400年記念プレイベント
　庄内ハエヤ踊りおよびお居なり大黒舞の披露／街中パフォーマンス研究会
・酒井家庄内入部400年琵琶で語る庄内藩／錦心流琵琶全国一水会鶴岡支部

●支援内容　事業費の1/2（上限5万円）



日本アマチュア無線連盟鶴岡クラブ


街中パフォーマンス研究会



鶴岡温故会


アンサンブル・チコーニア

令和4年度　みんなでつなぐ活動支援

●採択件数　8件

事業名／団体
【グループ型】
・お居なりばやしパレードの実施およびお居なり大黒舞の披露／街中パフォーマンス研究会
・酒井家庄内入部400年記念アマチュア無線局の運用／日本アマチュア無線連盟鶴岡クラブ
・七絃琴を使ったレクチャーコンサートの開催／アンサンブル・チコーニア
・地方史研究協議会等合同研究例会／地方史研究協議会等合同研究例会実行委員会
・映像で残す「酒井家と荘内藩の今昔」事業／荘内藩甲冑研究会・荘内武者隊
・酒井家庄内入部400年記念「庄内論語素読検定会」／致道館文化振興会議
・第52回　錦心流琵琶演奏会「琵琶で語る荘内藩」／錦心流琵琶全国一水会鶴岡支部
【イベント型】
・酒井家庄内入部400年記念「宝生流能楽公演」／酒井家庄内入部400年記念宝生流能楽公演実行委員会

●支援内容　グループ型　事業費の2/3（上限10万円）
　イベント型　事業費の1/2（上限20万円）


致道館文化振興会議


荘内藩甲冑研究会・荘内武者隊


酒井家庄内入部400年記念宝生流能楽公演実行委員会


錦心流琵琶全国一水会鶴岡支部

高校生の取組

若い世代のシビックプライド、郷土への誇りと愛着を高めるため
高校生が地域の歴史文化を学び、その魅力に触れる機会を創出しました。

古文書体験

日　時　令和3年11月21日(日)　午前8時30分～正午
会　場　致道博物館　旧警察署庁舎　展示室
講　師　菅原義勝 氏（同館主任学芸員）
参加者　7人（鶴岡南高等学校1・2年生）




学芸員体験

期　間　令和4年5～12月（月1回：計7回）
会　場　致道博物館　旧警察署庁舎　展示室
講　師　本間　豊 氏（同館学芸部長）
　　佐藤　淳 氏（〃　主任学芸員）
　　菅原義勝 氏
参加者　5人（鶴岡南高等学校 1・2年生）
　　1人（酒田西高等学校 1年生）
備　考　参加者が作成した小学生向け解説パネルを同館にて展示。9,200人が見学（9月18日～12月26日）

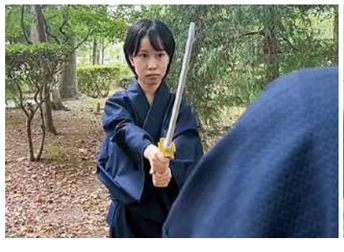



動画制作ワークショップ

令和3年度
日　付　8月8日(日)・9日(月)
参加者　13人
備　考　参加者の有志で松ヶ岡開墾150年をテーマとしたYTS「やまがたふるさとCM大賞」への応募作品を制作

令和4年度
日　付　6月11日(土)・12日(日)
参加者　5人

共通
講　師　難波竜次 氏（YouTuber・合同会社dano共同代表）





みんなでつなごう事業

記念動画の制作、鶴岡公園正面広場での桜の記念植樹・記念プレートの設置、記念品の製作などを通して、
記念事業の実績とともに、地域固有の歴史と文化の未来への継承を図りました。

記念動画制作

酒井家庄内入部400年の記念動画を2種類制作しました。
①庄内の歴史と文化を切り口に地域を見つめなおす、地域住民向け動画。市役所や公共施設での投影、地域学習等で活用。
②アフターコロナを見据えた、酒井家にもゆかりの深い3つの日本遺産を紹介するインバウンド向け動画





記念植樹

鶴岡公園正面広場「二の丸広場」のオープニングセレモニー内で記念植樹を実施しました。
日　時　令和5年3月18日(土) 午前10時
会　場　鶴岡公園正面広場
内　容　ソメイヨシノの記念植樹



記念品

鶴岡市の友好都市・江戸川区の伝統工芸「江戸扇子」と鶴岡シルクのコラボ扇子を制作しました。
・扇子 …… 江戸川区の伝統工芸「江戸扇子」
・扇子袋 …… 鶴岡シルク製
・デザイン …… 須藤玲子氏（kibiso監修デザイナー）
・製作数 …… 300個
記念式典・レセプション参加者へ記念に進呈。



誰もが楽しく、参加しやすいイベント作りのための心配りチェックリスト

「誰一人取り残さない」SDGsの理念を重視し、ユニバーサルデザインの観点から、講演会やシンポジウムなどホールで行うイベントを企画・運営する際に、主催者に心掛けてもらいたいポイントをまとめたチェックリストを作成しました。

仕様　A3両面8つ折り（ポケットサイズ）



※プレ・本番年のメイン事業として実施した、本郷和人歴史講演会と酒井家庄内入部400年記念式典では、要約筆記と手話通訳による情報保障を実施しました。



◀歴史講演会での手話通訳、パソコン要約筆記による情報保障



◀記念式典でのパソコン要約筆記の器材等の配置

酒井家庄内入部400年記念事業開始式

令和4年度の記念事業の皮切りとなるミュージアムスタンプラリーの初日に合わせて開始式を実施。

参加者みなで勝鬨を上げ、酒井家庄内入部400年の本番年の機運を高めました。

日　時　令和4年4月14日㈭　午前9時
会　場　致道博物館



鶴岡公園周辺・飲食店等連携イベント「城菓飯（じょうかめし）めぐり」

致道博物館が酒井家庄内入部400年特別展・第4弾「藩祖・酒井忠勝」に合わせ、飲食店等と連携し、実施した地域をつなぐ周遊イベントを支援。

期　間　令和4年9月10日㈯ ～ 10月31日㈪
参加店　飲食11店・菓子4店
内　容　参加店利用者には致道博物館オリジナル文化財トレカを進呈
参加者　延7,200人



酒井家庄内入部400年に寄せて

400年から学ぶSHONAI みんなでつなごうSHORAI

総務企画部会長　武田真理子
東北公益文科大学大学院公益学研究科長

総務企画部会は30代から50代の7名の部会員によって構成され、全員が異なる職業を持ち、女性が4名、移住者が3名、海外出身者が1名と、多様な視点に基づく活発な意見やアイディアが溢れる部会活動を展開することができました。

本部会の最初の重要な役割は、酒井家庄内入部400年記念事業のキャッチフレーズの提案でした。事務局からの説明や100年前の大正12年の記念事業に関する新聞記事等の参考資料をもとに、令和の記念事業だからこそ大切にしたいこと・価値を一人ひとり出し合い、提案をまとめました。部会員からは、温故知新、不易流行といった意見から、対話、共生、シビック・プライド、持続可能性、未来をつくるといったSDGsとも結びつく100年後に向けた力強い意見まで幅広い提案がありました。若い世代にも共有できるように、目に留まりやすく耳心地も良い「400年から学ぶSHONAI　みんなでつなごうSHORAI」という提案がまとまり、最終的には「庄内」と「将来」を漢字表記に修正し、実行委員会の承認を得ることができました。

グローバル化が進む中で、いま私たちが暮らす鶴岡・庄内の歴史をしっかりと学び、その知見を活かしながら現代社会の課題解決に取り組み、さらには未来を創造する。総務企画部会では、この大切な営みをどうしたらより多くの市民の参画を得て進めることができるだろうかということがテーマであり続けました。

実行委員会の各部会、関係団体も同じ視点に立ち、令和4年度には、高校生学芸員体験、小中学生対象の歴史文化研究コンクールなどの若い世代を対象とした取組、庄内地域ミュージアム連携、酒田獅子、余目姫龍がゲスト参加をした荘内大祭の開催などの庄内2市3町が一体となった取組、首都圏シティ・プロモーション、大人の休日倶楽部「趣味の会講座」開催、記念動画の世界発信などの交流人口の拡大に向けた取組がダイナミックに展開されました。本部会では、全ての人の参加を実現するためのユニバーサル・デザイン・マニュアル、イベント主催者のための『心配り』リストを製作しました。多くの協働と創発が生まれ、鶴岡・庄内の人々の間に先人が築いてきた歩みと地域資源への誇りが醸成されたように感じています。

これからの100年に向けて最も重視すべき取組は、人づくりと地域の様々な資源と情報のデジタルアーカイブ化であると考えます。鶴岡・庄内の持続的な発展のため「みんな」でつないで参りましょう。

歴史講座　※会場はいずれも出羽庄内国際村ホール。

「新政府から見た明治初年の庄内士族たちの動向」

松ヶ岡開墾150年を記念し、庄内士族たちが明治5年に始めた開墾事業前後の時代背景や明治新政府の動向について、通史的、全国的な視点から当時の庄内を捉え、講演していただきました。

日　付　令和3年11月27日(土)
講　師　宮地正人 氏(東京大学名誉教授)
参加者　160人



「三方領知替え一件をめぐる幕府政治」

天保11(1840)年11月に庄内藩主酒井家・越後藩主牧野家・川越藩主松平家へ命じられた「三方領知替え」と翌年の中止に至るまでの江戸幕府内での政治的過程について講演いただきました。

日　付　令和4年9月3日(土)
講　師　藤田覚 氏(東京大学名誉教授)
参加者　150人
[関連事業]
致道博物館「民衆のチカラ 三方領知替え阻止運動」(7/22～9/7)



「近世初期の御家騒動～最上家と加藤家の改易～」

酒井家が入部する以前の庄内を治めていた最上家、改易となり庄内へ流されることとなった加藤家について近世初期の御家騒動問題から講演いただきました。

日　付　令和4年10月22日(土)
講　師　福田千鶴 氏(九州大学基幹教育院教授)
参加者　100人
[関連事業]
致道博物館「藩祖・酒井忠勝」(9/10～10/31)



「江戸勤番武士の暮らし」

幕末に江戸市中取締を任された庄内藩士の日記「松平造酒助日記」をたどりつつ、他藩の勤番武士と比較しながら、当時江戸に勤番していた武士の生活について講演いただきました。

日　付　令和4年11月5日(土)
講　師　岩淵令治 氏
(学習院女子大学国際文化交流学部教授)
参加者　100人
[関連事業]
市郷土資料館「庄内藩江戸市中取締展」
(10/19～12/4)



歴史シンポジウム・歴史講座

致道博物館や市郷土資料館の特別展に合わせて、専門家を招致して、
シンポジウムや歴史講座を開催しました。

歴史シンポジウム「酒井家草創～庄内藩主への道程～」

戦国史、徳川氏研究の専門家5名による酒井家初代忠次・2代家次・3代忠勝の事績をテーマとした講演とパネルディスカッションを行いました。

日　時　令和4年5月7日(土)　午後1時～5時30分
会　場　荘銀タクト鶴岡 大ホール
参加者　400人

講　師
平野　明夫 氏(國學院大學兼任講師)
山田　邦明 氏(愛知大学文学部教授)
久保田昌希 氏(駒澤大学名誉教授)
柴　　裕之 氏(東洋大学非常勤講師)
小川　　雄 氏(日本大学文理学部准教授)

講演名
「松平一族と三河の酒井家」
「戦国時代の東三河と酒井忠次」
「「松平家忠日記」にみる酒井忠次」
「酒井家次の立場」
「徳川幕府下の酒井忠勝」

コーディネーター
菅原　義勝 氏(致道博物館主任学芸員)
今野　　章 氏(鶴岡市郷土資料館館長補佐)

関連事業
致道博物館「徳川四天王筆頭・酒井忠次」(4/14～5/29)









最新の研究成果をもとに第一線の研究者たちが語らいました。



酒井家と庄内藩ゆかりの地デジタルアーカイブ

全国に点在する「酒井家と庄内藩ゆかりの地」をデータベース化し、閲覧可能な特設ページを公開しました。
また、特にゆかりの深い県内外の名所50ヵ所をマップ化したリーフレットを製作しました。

掲載名所数　100ヵ所
- **鶴岡公園周辺**：鶴岡公園、致道博物館など15ヵ所
- **鶴岡広域**：金峯山、松ヶ岡など23ヵ所
- **庄内・山形県内**：本間家旧本邸、山居倉庫など20ヵ所
- **県外**：高田城址公園、松代城跡など32ヵ所



民俗芸能交流発表会での歴史解説

鶴岡市教育委員会主催の民俗芸能交流発表会において、専門家を招致し、出演した民俗芸能の歴史解説を行い、来場者の理解を深めました。

会　　場　荘銀タクト鶴岡 大ホール
歴史解説　菊地和博 氏（東北文教大学人間科学部人間関係学科特任教授）

令和3年度
日　　付　12月5日(日)
参 加 者　300人
出演団体　温海嶽熊野神社獅子舞保存会、越中山神楽保存会、
大山いざや巻保存会・キッズ華の会、
高寺八講保存会、六所神社獅子舞保存会


菊地和博 氏

令和4年度
日　　付　2月4日(土)
参 加 者　300人
出演団体　日枝神社獅子舞社中、
大山いざや巻保存会・キッズ華の会、
鶴岡市立渡前小学校、
温海嶽熊野神社獅子舞保存会、
湯田川神楽保存会


大山いざや巻保存会・キッズ華の会


鶴岡市立渡前小学校

庄内の歴史ハンドブック

次代に伝えたい庄内地域の歴史と文化をまとめた「庄内の歴史ハンドブック」を発行しました。製作には鶴岡市の高校生が関わり、子どもたちが読みやすい文章に編集しました。ハンドブックは庄内一円の小学5年生から中学生まで1万人にデジタル頒布。副読本として地域学習を促進していきます。

仕様　A5判　全58ページ
内容　酒井家入部前から明治初期までの庄内の歴史や文化を解説
発行　令和5年1月



収録内容

第1章　庄内藩前史
- 庄内入部以前の酒井家
- 戦国時代の庄内
- 最上家統治時代の庄内

第2章　庄内藩の成立
- 酒井家の庄内入部
- 庄内藩の農村支配
- 庄内の山岳信仰と寺社政策
- 松山藩と天領・預地

第3章　交易と文化の発展
- 北前船と酒田湊・加茂湊
- 鶴岡の商人
- 江戸期の文化芸能
- 庄内藩による黒川能の保護
- 松尾芭蕉と庄内俳壇
- 庄内の食文化

第4章　藩財政の窮乏と立て直し
- 江戸幕府との関係
- 酒田の本間家
- 藩校致道館の教育
- 庄内藩の武士への奨励

第5章　激動の時代へ
- 江戸時代の災害
- 疫病の流行
- 三方領知替えと印旛沼開削
- 海岸防備と蝦夷地の防衛・開拓
- 庄内藩江戸市中取締と新徴組・新整組
- 戊辰戦争とその後

第6章　明治時代以降の庄内
- 近代教育のはじまり
- 文明開化
- 西郷隆盛と庄内
- 松ヶ岡開墾
- 酒田県とワッパ騒動
- 西南戦争とその後の庄内



写真や絵図などを使いながらわかりやすく解説している


令和3年から4年にかけて、高校生たちが編集に関わった

親子で参加！こども記者プロジェクト

地域の歴史への理解を深めるため、小学生とその保護者が
庄内各地の酒井家ゆかりの地を取材しました。こども記者が書いた記事は、山形新聞で掲載されました。

令和3年度

テーマ「庄内藩領として酒井家に守られた湯殿山」

古くから山岳信仰の霊場として栄え、庄内藩からも交通の要衝として守られた湯殿山を令和3年、丑歳御縁年に取材しました。

日　付　令和3年7月31日㈯
講　師　渡部 幸 氏（出羽三山歴史博物館学芸員）
参加者　7組14名
「山形新聞」同年8月29日付に掲載





テーマ「松ヶ岡開墾150年と酒井家」

旧庄内藩士約3千人が開墾し、鶴岡の絹産業が発展する礎となった松ヶ岡開墾場を取材しました。

日　付　令和3年11月20日㈯
講　師　山田陽介 氏（松ヶ岡開墾場副理事長）
参加者　10組20名
「山形新聞」同年12月26日付に掲載





令和4年度

テーマ「酒井家の庄内入部と鶴ヶ岡城」

江戸時代の絵図や古文書を実際に見学し、鶴ヶ岡城の跡が今も残る鶴岡公園や発掘調査現場を取材しました。

日　付　令和4年7月30日㈯
講　師　菅原義勝 氏（致道博物館主任学芸員）
参加者　9組18名
「山形新聞」同年8月31日付に掲載





テーマ「酒井家ゆかりの地　丸岡と黒川」

酒井家の援助のもと発展してきた黒川能が残る黒川地区、戦国時代の武将・加藤清正の嫡男忠廣が配流となった地丸岡地区を取材しました。

日　付　令和4年11月12日㈯
講　師　上野由部 氏（黒川能保存会業務執行理事）
参加者　9組18名
「山形新聞」同年12月24日付に掲載





タブロイド紙

全4回の記事をまとめた山形新聞のタブロイド紙を発行し、庄内地域の公共施設などに配布しました。

発行日　令和5年2月28日㈫
発行数　185,000部



出前講座・現地研修／小・中学生歴史文化研究作品展

小・中学生の地域学習と連携して、出前講座や現地研修を実施し、児童生徒たちが研究作品をまとめました。
また、夏休み期間には、小・中学生から庄内地域の歴史文化をテーマとした研究作品を募集。
これらの取組みの成果である作品を記念式典の会場で展示しました。

出前講座・現地研修

実施回数　鶴岡市内小中学校　7校9回
協力団体　致道博物館、鶴岡市観光ガイド協議会など





小・中学生歴史文化研究作品展

出前講座を行った小・中学校の研究作品、歴史文化研究コンクールの応募作品を合わせて展示。
期　間　令和4年10月8日(土)～11日(月)
会　場　荘銀タクト鶴岡　小ホール
来場数　500人

歴史文化研究コンクール
募集期間　令和4年7月～8月
応募総数　46点

受賞作品・受賞者

最優秀賞
「酒井家庄内入部と鶴ヶ岡城　松ヶ岡開墾に至るまでの歴史を探る」　村瀬蒼空さん（鶴岡市立朝暘第六小学校5年）
「酒井家がつくりあげた鶴岡」　佐藤愛理さん（鶴岡市立鶴岡第四中学校2年）

優秀賞
「三浦家に伝わる享保雛を未来につなぐ」　三浦日和さん（鶴岡市立朝暘第一小学校5年）
「ぼくが歩いた松ヶ岡までの道のり」　伊藤寛人さん（鶴岡市立朝暘第二小学校3年）
「鶴岡十一口」　千葉愛香さん（鶴岡市立朝暘第六小学校6年）
「庄内400年カルタ」　齋藤風河さん（鶴岡市立羽黒小学校5年）


10月8日記念式典の中でコンクールの表彰式を開催



作品展では児童生徒の熱心な作品が並んだ

酒井家庄内入部400年に寄せて

歴史の学びを将来の活力に

歴史文化部会長　上野由部
公益財団法人黒川能保存会
業務執行理事

第1回部会の主な話題は、歴史文化部会の役割についてでした。その役割を、酒井家と歩んできた庄内の歴史や文化をどのように次世代へ伝えていくか、江戸時代を主軸とした庄内の歴史をどのように表現し将来につなげていくかと捉えました。これらをどのように具体化して取り組んでいくかという点に、多くの時間と知恵を費やしたと実感しています。そして、一過性の記念イベントとして終わらせるのではなく、次代に受け継がれ庄内人の心の活力につなげていきたいという思いで記念事業を展開しました。事業を遂行するに当たっては、鶴岡の歴史や文化に詳しい有識者の方々や、3年間で延べ16人の高校生たちからも部会員に参加していただきました。加えて、事務局や企画運営を担う株式会社山形アドビューロの皆さんも交えながら、世代を超えた闊達な意見交換を行うことができました。

高校生のみなさんからは、「庄内の歴史ハンドブック」製作での主な読者となる小中学生にとって分かりやすさを大切にした文章チェックや、「子ども記者プロジェクト」「歴史シンポジウム」などのイベントへの参加・補助など、積極的に記念事業に関わっていただきました。こうした次代を担う高校生たちの率直な発言や事業活動に取り組む姿に、図らずも次代の庄内を垣間見た感がありました。

それぞれの取組を行う中で、地域の皆さまとの関わりもありました。小中学校での「出前講座」のひとつとして行った現地学習では、致道博物館や鼠ヶ関みちくさ会、鶴岡観光ガイド協議会からも、案内解説にお力添えをいただきました。私自身、講師を務めた「子ども記者プロジェクト」の櫛引地域の丸岡・黒川地区の取材の中で、子どもたちが真剣な眼差しで説明に耳を傾け、短時間で懸命に取材をまとめる様子がとても印象的でした。また、地域の歴史や文化をつなぐ活動にかかわる地域民の存在を再認識するとともに、そうした地域民がひとりでも多くなることが大事であると強く感じました。

庄内の歴史を永く伝えていくには、これまで開催した専門家を招いた歴史講座のようなイベントやハンドブックを活用した小中学生対象の講座など、地域に根ざした様々な取組を続けていくべきでしょう。歴史を学び新たな歴史を紡いで将来の庄内を創造し続けていくことが「400年から学ぶ庄内、みんなでつなごう将来」に答える道筋と考えます。

酒井家庄内入部400年記念シンポジウム（東京）

特別講演



酒井家庄内入部400年の節目に、庄内藩酒井家の存在を首都圏の多くの皆さんに知っていただこうと企画。
会場は庄内藩の江戸上屋敷が大手門にあったことから、大手町の日経ホールを選び約460名が参加。
特別講演は歴史作家の伊東潤氏、戊辰戦争を中心に貴重な話をいただきました。

今日は戊辰戦争全体の流れと、奥羽越列藩同盟を中心とした東北戊辰戦争全体の流れ、そして庄内藩の戦いについてお話しいたします。

戊辰戦争は、慶応3（1867）年の10月から大きな流れが出てきます。この時期に大政奉還が行われ、王政復古の大号令が発せられました。小御所会議で徳川慶喜の処分が決まり、薩摩藩の西郷隆盛と大久保利通、そして公家の岩倉具視の3人による強硬策が始まります。それが東北戊辰戦争まで影響していきます。

同年12月25日、「江戸薩摩藩邸焼き討ち事件」が起こります。京都にいる会津藩や桑名藩を焚き付けるための西郷隆盛による陰謀であったという説もありますが、江戸の警備を担っていた庄内藩が、薩摩藩による幕府に対する度重なる挑発行動に怒り、江戸の薩摩藩邸を焼き討ちしたことが発端で、翌年1月3日に鳥羽・伏見の戦争が勃発するわけです。

そして、徳川慶喜は江戸に逃亡して蟄居謹慎となります。慶喜を論理的な一貫性のある人間として描く歴史番組がありますが、僕は、そうではないと思っています。慶喜は賢い人物ですが、目先のことしか見えず、

江戸の警備を担っていた庄内藩が、薩摩藩による度重なる挑発行動に怒り、江戸の薩摩藩邸を焼き討ちしたことが発端で、鳥羽・伏見の戦争が勃発します。

トータルで物事を考えないというのが僕の考えです。自分の思いつきなのか、誰かに言われたからなのかはわかりませんが、自分が逃げることのインパクトを考えませんでした。慶喜だけのせいにしたくはありませんが、東北戊辰戦争で多くの人材が亡くなった大半の責任は、慶喜にあると思っています。慶喜が「自分が腹を切るから会津藩も庄内藩も桑名藩も赦免してくれ」という一言があればよかったわけです。結果として、新政府は、松平容保（会津藩主）、松平定敬（桑名藩主）らの官位を剥奪し、討伐の方針を固めていきました。

3月6日、勝海舟と西郷隆盛の折衝が開始され、徳川慶喜の処遇や、榎本武揚の幕府艦隊の引き渡し、江戸城の明渡しなど、江戸幕府の降伏条件が決定します。4月4日、勅使が降伏条件を勅諚として通達し、ここに江戸幕府徳川家の降伏が決まりました。この後、4月11日に江戸城が開城し、5月15日、上野の彰義隊が大村益次郎の指揮によって討伐を受けます。そして、4月から9月にかけて東北戊辰戦争が行われ、9月22日の会津藩の降伏開城によって戊辰戦争がほぼ終わるという流れになります。

東北戊辰戦争については、慶応4（1868）年1月17日に京都滞在中の仙台藩家老・但木土佐が、新政府から会津藩討伐を命じられた辺りから、きな臭いにおいが漂ってきます。2月8日には、新政府の岩倉具視が秋田藩士へ直々に「賊徒追討の触頭になってほしい。」と要請します。偶然なのかは分かりませんが、東北諸藩の結束を破るためには非常に賢いやり方ですよね。秋田藩へ「お前だけは特別だよ。だからこちらに味方して、周りを押さえる役割を担ってくれ。」みたいな話をしたわけです。これにより、庄内藩は後々秋田藩と戦うことになります。

2月26日、仙台藩士が会津藩の赦免を求める建白書を提出しますが、征討軍が出発直前だったので無駄に終わります。仙台藩・米沢藩・会津藩の間で話し合われましたが、恭順のために仙台藩から会津藩へ出された条件は非常に厳しいものでした。第一次長州征伐の際、長州藩では3人の家老が切腹しているので、新政府を納得させるためには、それと同等の犠牲が必要だということで、仙台藩は、会津藩の家老3人の切腹という条件を出します。しかし、会津藩としては、これは絶対にのめないということで、もう戦うしかなくなるわけですね。

3月1日、奥羽鎮撫総督は、九条道孝が正総督、沢為量が副総督となり、下参謀として長州藩の世良修蔵と、薩摩藩の大山綱良の二人が指名されます。しかし、この下参謀の二人が乱暴者であったため、もし、この二人ではない、もっと妥協できる人間、温和な人間が指名されていたら、東北戊辰戦争は起こらなかったと思いますし、研究家の方々ともそれは一致したところだと思います。

ここで、庄内藩に起きた問題をお話しします。3月5日、幕府が、寒河江・柴橋の天領7万4千石を庄内藩の預地にすることにしました。ところが、新政府側は、その土地は既に自分の領地だと思っているので、二重支配の問題が発生し、当初は明確でなかった討庄、つまり庄内藩を討つことが決定します。前年の年貢を庄内藩が奪取したというのが新政府の言い分ですが、江戸幕府の慣習的には、前年の年貢を庄内藩が取る権利があるという説もあり、いずれにせよ、もう難癖の世界です。

これに対して、4月10日に会津・庄内の両藩の間で「会庄同盟」が締結されます。討伐が決定した2つの藩が結束して戦おうとするわけです。翌日、仙台藩主の伊達義邦が5千の兵を率いて、会津藩境に向けて出発しますが、この時点では、仙台藩は、米沢藩も絡んで、会津救済の方針で一致しています。14日、沢為量率いる討庄軍200が庄内方面に出陣。23日に新庄へ到着し、いよいよ戦機が熟していきます。そして16日、仙台藩が会津藩に、開城、削封、家老の斬首という条件をのむように勧めますが、会津藩は、藩主・容保の謹



軍は、藩主の不拡大方針に従い天童城下を占拠せずに撤退します。

こういった動きとは別に、4月11日、東北27藩が、白石城に会同して会津藩と庄内藩の降伏恭順の嘆願書を総督府に提出します。しかし、下参謀の世良と大山は聞く耳を持たず、会津藩主・容保の首を要求します。そうなると妥協点が見出せないんですね。会津藩にも武士の一分がありますから、戦うしかないわけです。更に20日には、仙台藩士らによって世良修蔵が謀殺されます。もう絶対にあとに引けなくなるのがここのポイントです。新政府から任命された下参謀が謀殺されてしまったことにより、東北全体を巻き込んだ戦争になったわけです。

5月3日、仙台城にて奥羽25藩から成る「奥羽越列藩同盟」が正式に締結されると、6日には、越後6藩が加盟して、最大31藩が加盟した大きな同盟につながっていきます。しかし、6月16日、新政府軍が白河小峰城で体制を整えて白河の東方の常陸国の平潟港に上陸し、棚倉藩、磐城平藩、三春藩を次々と降伏に追い込むと、もうなし崩し的になっていきます。8月6日には、仙台藩領の南に位置する相馬中村藩が降伏し、仙台藩は新政府軍と直接戦うことになるわけですが、どうしても勝てません。8月末には新潟港が制圧されて日本海側も危うくなり、二本松藩は、ほぼ玉砕に近い状態で降伏し、米沢藩も戦わずして降伏ということで、なし崩し的に奥羽越列藩同盟は崩壊するわけです。9月3日に榎本艦隊が仙台藩松島湾に到着して、慶邦の戦いの継続を訴えますが、時すでに遅し。仙台藩は15日に降伏という流れになります。これが奥羽越列藩同盟の戦いです。

この奥羽越列藩同盟を総括すると、もともとは会津藩と庄内藩の朝敵赦免嘆願運動を基にしていたので、軍事同盟ではなかったということが大きなポイントです。赦免が拒否されて軍事同盟へと変化しますが、兵器の入手には時間がかかるわけです。新政府軍、薩長両藩などと比べると武器に大きな差がありました。特にアームストロング砲などをもつ非常に強力な佐賀藩が参画してきたことは大きかったと思います。また、和平解決から武力解決への転換理由が曖昧で、あまりに後手に回り過ぎた点も挙げられると思います。同盟諸

慎と削封はのめるが、開城と斬首はのめないと回答します。ここが東北戊辰戦争のひとつの大きな山場でした。歴史に「もしも」はありませんが、もし仙台藩の出した条件をのめば、戦争を避けられる可能性はありました。ただ、相手が、世良修蔵と大山綱良の二人では、結果的には同じだったのではないかという気もします。

慶応4（1868）年4月19日、庄内藩は動員令を出して防御態勢を整え、清川口に200の藩兵を進出させます。ほかにも大網口、羽黒山口、吹浦口など、最上川筋と秋田方面からの侵攻が予想される北方海岸線に軍勢を配備していきます。そして24日に清川口で戦闘が開始します。庄内藩軍は、新政府軍と損害同等で苦戦はしましたが、この戦いに勝利しました。続いて26日、六十里越の大網口に待機した庄内藩軍が、村山領を押さえるために先手を打って、寒河江・柴橋に乱入します。その後、閏4月4日に庄内藩軍は、最上川を渡河して天童城下に攻め込みます。天童城下の織田氏は、皆さんご存じ織田信長の子孫です。その織田氏は、天童城を捨て逃亡しますが、庄内藩の中にも尊王攘夷派がいたので、全藩一致しての戦いはどこの藩も難しいものでした。全藩一致で戦えたのは、唯一庄内藩くらいです。奥羽越列藩同盟下の諸藩は縦割りでした。一人の司令官の下に皆がまとまるのではなく、諸藩の思惑が錯綜しています。これは幕藩体制の弱みでもあり、良さでもありました。徳川家にとっては、諸藩を縦割りにして横のつながりを持たせないというのは、非常に都合がよかったわけですが、ここに来て非常にマイナスに働いてしまいました。これらが奥羽越列藩同盟、同盟軍の破綻の原因だというふうに思っております。

そして、いよいよ庄内藩の戦いに進みます。同盟軍から庄内藩にも白河への出兵要請があり、7月4日に一番大隊と二番大隊を白河に派遣します。しかし、秋田藩が同盟から離反したことがはっきりしたため、新庄城を攻撃した上で秋田方面へ転出しようと指令が変わります。13日に酒井玄蕃が率いる二番大隊が、新政府軍と舟形で衝突し、勝利を得る。これが最初の戦いです。次に二番大隊が単独で新庄城を攻略します。25日に一番・二番両隊が合流し、大滝村で新政府軍を撃破し、8月1日、院内へ進出。一方、三番大隊は、7月13日に海辺で秋田との境の三崎山で新政府軍と衝突し、29日には新徴組と農兵組から成る四番大隊が矢島城下を攻略し、北上するという戦い方をしていきました。8月11日、一番・二番大隊が横手城を攻略します。その後も庄内藩は、苦戦しながらも戦を勝ち抜いていきますが、仙台藩や米沢藩といった味方が次々といなくなり、孤立して、もう兵を引くしかないという状態になるわけです。

こうして庄内藩の戦いは収束に向かうわけですが、そうした中でも二番大隊長の酒井玄蕃が非常に注目を集めます。玄蕃は本当に知略に富んだ大隊長でした。東北戊辰戦争後、明治新政府軍に雇われたあとも、西郷から清国を密偵するように頼まれて渡海しますが、帰国後、35歳の若さで死去してしまいます。彗星のように現れて庄内藩を率いて戦い、新政府軍をたたき、そして瞬く間に消えていった人物です。私が書いた『幕末雄藩列伝』でも酒井玄蕃を取り上げ、「世の中に軍事的天才と呼ばれる者は多いが、劣勢のときに奇跡的な戦いを続けた者こそ、そう呼ぶに値すると。盤石の鎌倉幕府を奇策によって翻弄した楠木正成、織田信長急死後の北陸戦線を一手に支えた佐久間盛政、大坂の陣で奮戦した真田信繁、そして幕末庄内藩の酒井玄蕃こそ、軍事的天才と呼ぶに値するだろう」と書いています。軍事的な才能がある人は大勢いますが、特に劣勢なとき、負けの可能性が高いときに、そういった状況をはね返して勝つ人間が、やはり天才なのではないかなと思います。奇しくも、あまり目立たないんですが、織田家の柴田勝家の家臣、寄子の佐久間盛政「鬼玄蕃」という同じ異名が付いています。佐久間盛政も軍事的天才であったので、非常に偶然ですが、共通しているのではないかなと考えています。

庄内藩軍の強さの秘密は3つ。まずは、第二大隊長酒井玄蕃の卓越した戦略・戦術眼、指揮能力。2つ目は、藩軍と農兵が一体化していたこと。3つ目は、豪商本間家の財政的バックアップですね。

最後になりますが、庄内藩軍の強さの秘密は3つあったと考えています。まずは、酒井玄蕃。第一大隊長も大活躍しているので、玄蕃だけとは言い難いんですが、玄蕃の卓越した戦略や戦術眼、そして指揮能力が非常に良かったということ。2つ目は、藩軍と農兵が一体化していたこと。農民が藩と一体化しているというところは少ないんです。会津も農民が早く離反して新政府軍に付いてしまったといわれていて、それにより思っていたよりも早く戦線が瓦解したと言えると思います。3つ目は、豪商の本間家です。本間家が、庄内藩を財政的にバックアップしていたことにより、どんどん武器が買えたということですね。この三位一体化した力によって、始祖の酒井忠次の名に恥じない武辺ぶりを発揮したことで、庄内藩軍は戊辰戦争を通じて、全勝のまま終戦を迎えるという奇跡を成し遂げることができたわけです。

酒井家庄内入部400年記念シンポジウム（東京）
パネルディスカッション

パネリスト◎ 伊東潤氏（歴史小説家）、酒井忠久氏（酒井家18代当主、公益財団法人 致道博物館代表理事・館長）、谷口雅一氏（NHK歴史番組プロデューサー）
コーディネーター◎ 本郷和人氏（歴史学者、東京大学史料編纂所教授）



「酒井家庄内入部400年を紐解く」と題し、歴史学者本郷和人氏の進行により、作家、歴史番組プロデューサー、そして酒井家ご当主から興味深い話をいただきました。

徳川家と酒井家

本郷　最初におことわりさせていただきます。本来「酒井様」とお呼びするべきところですが、今日は親しみをこめて「酒井さん」と呼ばせていただきます。また「酒井忠次公」と呼ぶべきところも、わかりやすく「酒井忠次」とさせていただきます。

さて、酒井忠次は徳川四天王の筆頭、すなわち徳川家臣団の筆頭という地位にあり、酒井家の祖であります。忠次をはじめ酒井家と徳川家の関係について、まず、酒井忠久さんから話を伺いたいと思います。

酒井　酒井家は、元は徳川家の流れをくむ家であり、酒井忠次の奥方・碓井姫は徳川家康の叔母に当たります。そうした関係もあって、忠次は徳川家に仕え忠誠に励んだのだと思います。また、歴代の庄内藩主の多くが田安徳川家から奥方を迎えています。

元禄3（1690）年、酒井家6代忠真は羽黒山に家康を祀る東照社（鶴岡市指定有形文化財）を建てました。また、忠次が家康の子・岡崎三郎信康の死に関わった件（以下、「信康事件」）では、延宝4（1676）年、支藩である松山の中山神社に信康の霊を弔う源鎮霊社が造成されています。このことに対する幕府の動向を見たうえで、貞享2（1685）年には本藩である鶴岡の山王日枝神社に信康を祀る複鎮霊社が設けられました。

最近では、昭和36（1961）年に昭和天皇があつみ温泉で「雨けふる緑の山は静かにて庭乃山かと思ひけるかな」と御製され、その後たびたび来られた徳川家正公（徳川家17代当主）に揮毫いただいた記念碑があつみ温泉熊野神社の境内にあります。

本郷　ありがとうございます。谷口さん、伊東さん、酒井忠次について何かお考えがありますか。

谷口　2008年に、NHK『その時歴史が動いた』で「徳川四天王に学べ！」と題して、50人の新社会人をオーディエンスとして呼び、徳川四天王の生き方から会社で生きる術を学ぶ企画を行いました。

四天王のうち、酒井忠次のテーマは「信康事件」でした。家康の子・信康、信長の娘・徳姫は夫婦仲がよろしくなく、徳姫は「信康が武田と通じているのではないか」と父・信長に手紙で訴えます。信長は信頼の厚い酒井忠次に真偽を問いかけます。この件は色々と議論がありますが、「忠次は肯定すれば、信長の逆鱗に触れて信康の切腹を招く一方で、徳川家という組織を救うことができる」という形で放送しました。私は、徳川家存続という意味では、忠次は極めて正しい選択をしたのではないかと考えています。庄内藩は幕末においてよく会津と比較されますが、会津の藩祖・保科正之の「会津家訓（かきん）15ヶ条」に対する庄内藩の家訓的な位置として「信康事件」に対する解決の仕方があるのではと思っています。

伊東　信長と家康の関係は、珍しく有効に機能した同盟として有名ですが、謎が多いですよね。信長と家康の「友情」といわれることもありますが、戦国時代なので、お互いにメリットがあっただけではないかと思います。ただ、家康自身は非常に義理堅いので信長の手伝いで姉川の戦いなどに出兵しています。

酒井忠次は、家康が駿府に人質に行っていた間、留守の三河を守るような立場でいました。忠次が東三河を中心とした地域を平定して、自分が大名になるという道もあったのでしょうが、家康の帰りを待っていたという、このあたりに忠次の義理堅さとか深慮遠謀を感じます。また、桶狭間の戦いのときは、家康は19歳、忠次は34歳で15歳年上なんですね。今川義元が討ち取られたあとは、忠次の判断に家康が従ったのではないかと思います。忠次は家康にとっての補佐役になると思いますが、これだけ年上で長い期間、補佐役を務めているのは珍しくて、非常にユニークな関係であると思います。

本郷　ありがとうございます。コーディネーターでありながらお話させていただきますと、徳川四天王の中で、本多忠勝、榊原康政、井伊直政は、家康のもとで功績を積み上げた、つまりは家康が育てた人たちと言ってもおかしくない。それに比べて酒井忠次やのちに家康のもとを離れる石川数正が、家康が頼りにした年上組だった気がします。不思議なのは「信康事件」と関わるのかもしれませんが、関東に家康が移った時、本多忠勝は大多喜10万石、榊原康政は館林10万石、井伊直正は箕輪…のちに高崎となる12万石を与えられているのに比べて、酒井家は家次に家督を譲ってはいるが4万石しか与えられていない。これをどう考えればいいのでしょうか。

谷口　それは「信康事件」での酒井忠次の判断を良いと思っていないということでしょうか。

本郷　しかしながら、最終的に酒井家は、庄内という東北における大変に重要な土地を与えられて、譜代大名の中でも特別な地位を占めるわけです。伊東さんはどう思われますか。

酒井家は、元は徳川家の流れをくむ家であり、そうした関係もあって、酒井忠次は徳川家に仕え忠誠に励んだのだと思います。

酒井家18代当主　**酒井忠久**氏

忠次は家康の15歳年上で、今川義元が討ち取られた後は忠次の判断に家康が従ったのではないかと思います。

歴史小説家 **伊東潤 氏**



本郷　大河ドラマ「どうする家康」でも、家康と信康の関係は一つの焦点になるかと思います。みなさんもどうぞご注目いただきたいと思います。

三方領知替え

本郷　酒井家は、譜代大名でありながらずっと庄内の地に留まっていた。これは、ほかの譜代とは全く違う特質です。老中・水野忠邦の時、川越の松平を庄内に、庄内の酒井を長岡に、長岡の牧野を川越にという三方領知替えの幕命が下りますが、これに反対した領民による幕府への直訴が功を奏して、酒井家は庄内に留まり続けたという歴史があります。酒井さん、これは酒井家ではどのような形で伝えられているのでしょうか。

酒井　酒井家としては幕命ですから仕方がありませんので、長岡を調べに行くわけです。古文書「合浦珠（がっぽのたま）」には、調べ上げた長岡の町政が書いてあります。庄内の領民が江戸へ転封阻止を訴えに行く途中、長岡に立ち寄って「長岡では藩主を留めようとしないのか」と言うと、長岡では「大身のお殿様が来る」「本間家がついて来る」「早く来てくれないか」など、大変楽しみにしていたような記録があります。庄内藩は、9代・忠徳の頃までは、藩財政が非常に厳しかったのですが、農政改革を行って「神田大黒」と呼ばれるまでに裕福な大名となりました。他藩に比べて富裕な藩とみなされ、多分にやっかみもあって三方国替えの一方として狙われたのではと思っています。

本郷　谷口さん、そのあたりは何かありますか。

谷口　水野の背後には11代将軍・徳川家斉がいました。一昨年、ＮＨＫ『英雄たちの選択』で「追跡子だくさん将軍の大名ファミリー化？計画」を放送しました。家斉が子供をたくさん作ったのは、単に好色なのではなく、徳川末期の大名統制戦略の一環と位置づけた話でした。川越藩の松平は家斉と近いので、そこに火種があったであろうことと、家斉政権下または江戸時代の後期である文化文政期の爛熟した時代の背景も大きく関わっているのかなという気がします。

本郷　伊東さんはこの三方領知替えに関して何かありますか。

伊東　やはり庄内藩の善政がもっと注目されるべきですね。会津藩の戊辰戦争における農民の離反などと比較すると、庄内藩の三方領知替えや戊辰戦争での農民の活躍を見ると、なぜそれだけ農民たちが酒井家を慕ったのか、非常に興味深い研究対象だと思います。

戊辰戦争

本郷　伊東さん、戊辰戦争での庄内藩はなぜあんなに強かったのですか。

伊東　個々の戦いを見ると、二番大隊長・酒井玄蕃の作戦や、士気を高く保つことがうまいといったところに勝因があると思いますが、それだけではなく、本当に一人一人が強いんですね。庄内藩軍の下級武士や農兵が、無茶苦茶な蛮勇を発揮する。一方で新政府軍として来ていた薩長軍や佐賀藩にとっては手伝い戦であってモチベーションの共有が出来ていなかったと思いますね。

本郷　庄内藩の戦いは「わが町」、「わが村」を守るための戦いだった、ほかの官軍とされる人たちはあくまでも手伝い戦だった、これでは庄内の方が強いだろうということでしょうか。

伊東　防衛戦争は守る方が強いですよね。絶対自分たちの土地は蹂躙されないという強い決意のもとに戦っていたと思います。

本郷　そうした話を聞いていると、酒井家はとても庄内で愛されていたというイメージが出て来ます。酒井さんはいかがでしょうか。

酒井　庄内藩では戦争する場合でもギリギリまで交渉しているのは確かです。江戸で薩摩藩邸を焼き討ちした時も「不逞の輩を早く出せ、そうすれば引き捕らえて連れて帰る、そうでなければ押し入るぞ」と言っています。そして交渉の末に焼き討ちしてしまうわけです。戊辰戦争の時も、秋田藩を通じて何の罪があるのか交渉しています。どうしてもダメならば戦わざるを得ない、全力を挙げて戦う、ということですね。新政府への「奥羽皆敵」という長州藩士・世良修蔵の書状がありますし、戦いは避けられなかったのだろうと思います。

本郷　谷口さん、戊辰戦争全体を見ていかがでしょうか。

谷口　私は、戊辰戦争の直後に関心がありまして、２０１８年、明治維新から１５０年の年に、ＮＨＫ『新日本風土記』で「明治維新への旅」を全２回で放送しました。その中で庄内を取材した時、松ヶ岡開墾士のご子孫の各家に西郷隆盛の写真が大事に飾ってあったことが非常に印象に残っています。そのあと、庄内藩の中老・菅実秀の子孫、菅秀二さん宅を訪ねると、西郷から贈られた書を紹介いただきました。これを秀二さんは「男から男へのラブレター」と表現されていましたが、西郷が菅実秀を気に入っていたことがうかがえます。官軍と賊軍という関係だったにもかかわらず、なぜここまで庄内藩は西郷を慕い、西郷は庄内藩士を慕ったのか。それは西郷が庄内藩に極めて寛大な措置をした人だからといわれています。しかし果たしてそれだけの理由でと思っていた矢先、家近良樹さんの『西郷隆盛』を読むと、王政復古のクーデターから鳥羽伏見の戦いまでの25日の間、西郷や大久保利通は窮地に陥っていたと書かれていました。当時、公議政体派が徳川慶喜の復権を図ろうとしていて、倒幕を狙う西郷と大久保は薩摩藩でも孤立するくらいかなり劣勢な状況にありました。



　家近さんの表現で面白いのは、この西郷と大久保の窮地を転回させたのが、庄内藩による薩摩藩江戸藩邸焼き討ち事件であったとする点です。つまり、この焼き討ち事件が無ければ、西郷には、鳥羽伏見の戦いやその後の勝利も無かったかもしれない。庄内藩がその大いなるきっかけを作ってくれたという恩義も少しはあったのかなと極めて深読みですが考えてしまいます。

本郷　それはなかなかテレビ的ですね（笑）。江戸の町で盛んに悪さをしていた、益満休之助、相楽総三、ヘンリーヒュースケンの殺害者などをまとめていたのが西郷隆盛です。西郷はそうした悪い奴を江戸の町に放って、そして庄内藩を怒らせて、薩摩藩邸を焼き討ちさせるように仕向けていたわけです。西郷と大久保が窮地にあったことは異議はないものの、言葉は悪いが西郷のずる賢さが窮地を救ったとも考えられるのではないでしょうか。伊東さん、どうでしょうか。

伊東　西郷はそんなにずる賢くないし、深慮遠謀はなかったと思います。最新の研究の説では、庄内藩に薩摩藩邸の焼き討ちを仕向けたのは西郷ではないと考えられています。

孫子の兵法戦わずして勝つを実践、ぎりぎりまで、交渉で戦を避ける努力をしている。

酒井家18代当主 **酒井忠久 氏**

庄内藩が『南洲翁遺訓』を生んだことはすごいことです。戊辰戦争は勝者・敗者を分けましたが、敗者も勝者も無くなるような世界を見せてくれています。

NHK歴史番組プロデューサー **谷口雅一** 氏



谷口　私もその話は最近よく耳にしています。

伊東　ただ、単に菅実秀との間で気が合っただけかな、と思います。

本郷　そこで不思議なのは、庄内と薩摩はこれで「手打ち」となっていますが、今なお会津の方達は長州に「恨み」を持っているじゃないですか。庄内と薩摩はなぜあんなに仲良くなるのでしょうか。

伊東　そこはやはり菅実秀と西郷の間の友情ですよね。その後、西南戦争で庄内から榊原正治と伴兼之という二人の少年兵が従軍して、藩の義理を果たして戦死します。それで薩摩との友情が本当に完成したという気がします。

本郷　酒井さん、これについて酒井家では何かお話があるんですか。

酒井　戊辰戦争の時、西郷さんは本当に関係していたのだろうかと感じています。西郷さんはずっと日当山（ひなたやま）温泉にいて前線に出ておらず、新政府が西郷さんに応援を頼みに来たのが庄内藩との戦いの時というタイミングでした。また、西郷さんは人を生かすことをすごくしていると思います。だから翌年、箱館戦争でも寛容な施策をしたのではないでしょうか。

庄内では、戊辰戦争後に藩主以下70名が鹿児島に行って学び、西郷の思いを後世に伝える強い責任感をもって『南洲翁遺訓』をつくり、全国に須布して回りました。また、致道博物館でも伝統的に西郷さんの肖像を掲げて偲ぶ会が行われています。その肖像画は、はじめに西郷さんと会ったことがある石川静正が描き、西郷さんと会ったことのある同僚や西郷未亡人に見せて、似ているかを確かめたうえで、黒田清隆から佐藤均画伯を紹介されて、佐藤均が石川静正の絵をもとに描いたものです。こうした徹底した肖像画の描かれ方からも、西郷さんは庄内藩の先人たちが惚れ込んだ人だったんだろうなと思います。



庄内には本当の「武士道」があり、それが西郷隆盛をも惹きつけた。そして武士や農民が酒井家を慕っていた歴史が庄内には確実にある。

歴史学者 **本郷和人** 氏

本郷　皆さんのお話をお聞きして、「西郷はずる賢い説」を謹んで撤回させていただきます。最後に、皆さまから一言ずつお話を伺いたいと思います。

谷口　日本史において庄内藩が『南洲翁遺訓』を生んだことはすごいことだと思っています。私たちの西郷さんのイメージを決めたものでもありますし、これに庄内藩の人たちの西郷さんへの思いが込められている。戊辰戦争は勝者・敗者を分けましたが、敗者から勝者への美しいバトンタッチが行われて、敗者が勝者になり得ること、あるいは敗者も勝者も無くなるような世界を見せてくれていると感じます。

伊東　今日は、戦国時代から幕末まで、皆さんと酒井家の話をして非常に楽しかったです。最後に一つ、初代・忠次のおもしろいエピソードをお話しますと、忠次の得意芸に「海老すくい」という踊りがあったそうです。忠次の残した文章などを見ると真面目で口数も多くない人だったかと思いますが、家康から「やってくれ」と言われると踊ったらしいです。その姿が滑稽でおもしろかったようなのですが、こういう人って現代の会社にもいるよな、と思いますね。いつも真面目で仕事しか興味がないような顔をしているけれど、宴会ではすごくおもしろい芸を披露する。そう思うと親しみが湧きますよね。

酒井　先生方からいろいろなお話を伺えてとてもありがたかったです。先程の2代・家次の石高が少なかった件では、穴山梅雪の補弼をしていたからなど、新説も出てきているようですので、また新しい情報があればぜひご教示をお願いしたいと思います。

本郷　庄内の土地は酒井家とは切っても切れないものであり、庄内には、ある意味で本当の「武士道」があって、それが西郷隆盛をも惹きつけた。そして武士や農民が酒井家を慕っていた歴史が庄内には確実にある。そういう豊かな土地が庄内なのだということを今日は確認できたのではないでしょうか。西郷隆盛を魅了し止まなかった庄内の武士の魂は、きっと今も生きていると思います。庄内の土地を愛し、これからも鶴岡・酒田の土地を発展させていくことは、それはすなわち日本の国を良くしていくことと密接につながっていくことではないかということで閉めさせていただきます。酒井さん、皆さん、本当にどうもありがとうございました。

酒井家庄内入部400年記念シンポジウム 東京会場

日付：令和4年7月11日(月)
会場：日経ホール（東京都千代田区大手町）







約460名の参加者で賑わったシンポジウム。石原純一観光部会長（鶴岡観光協会 会長、荘内神社 宮司）が主催者を代表し挨拶（写真中央）。休憩時間には鶴岡市特産の物販も行われ賑わった（写真下）。

大人の休日倶楽部趣味の会　地域連携講座・旅行会

㈱JR東日本びゅうツーリズム&セールスと連携して、趣味の会会員向けの誘客型講座を開催。講座参加者を対象とした庄内への旅行会を実施しました。

「酒井家の歴史と庄内を知る講座」

日　時　令和4年3月11日㈮　午前10時30分～正午
会　場　JR東日本ホテルメッツ新潟
参加者　21人
講　師　酒井忠順 氏（酒井家19代後嗣）

「若殿が語る 庄内の歴史と未来講座」

日　時　令和4年8月23日㈫
午前10時30分～正午
会　場　大人の休日倶楽部趣味の会
神田万世橋教室
参加者　65人
講　師　酒井忠順 氏

「庄内の歴史を知る旅」

旅　程
令和4年9月29日㈭・30日㈮
致道博物館、大督寺、
致道館、荘内神社
羽黒山随神門・五重塔、
出羽三山神社、松ヶ岡開墾場



「神にささげる黒川能講座」（2回講演）

日　時　令和4年8月30日㈫ 午後2時～4時
8月31日㈬ 午前10時～正午
会　場　大人の休日倶楽部趣味の会
神田万世橋教室
参加者　77人
講　師　上野由部 氏（黒川春日神社
下座能太夫、王祇会館 館長）

「黒川・蝋燭能鑑賞の旅2日間」

旅　程
令和4年10月15日㈯・16日㈰
丸岡城跡史跡公園、
黒川蝋燭能鑑賞、
王祇会館・伝習館・春日神社、
致道博物館



首都圏シティプロモーション

首都圏において、関係機関と連携しながら、酒井家庄内入部400年をテーマとしたシティプロモーションを実施しました。

「やまがたフェア」観光PR

日　付　令和4年6月22日㈬
主　催　東日本旅客鉄道株式会社 仙台支社
会　場　JR上野駅中央改札外グランドコンコース
内　容　さくらんぼなど名産品を販売する「山形産直市」（JRアグリ仙台）と協働で実施
来場者　2,000人





「やまがたフェア」観光PR

「鶴岡の観光と物産フェア」

期　間　令和4年7月20日㈬～22日㈮
主　催　鶴岡食文化創造都市推進協議会
会　場　JR大宮駅前 東日本連携センター
「まるまるひがしにほん」
来場者　6,500人





「鶴岡の観光と物産フェア」

東京都庁での観光PR

期　間　令和4年8月3日㈬～9日㈫
会　場　都庁内「全国観光PR コーナー」
来場者　1,500人

ガイドブック「今も殿が暮らすまち 城下町鶴岡・湊町酒田」

観光モデルルートを構築し、鶴岡・酒田の魅力を紹介するガイドブックを製作し、広く配布しました。

発行日
令和3年10月29日㈮
規格
B5フルカラー16ページ
発行部数（総発行部数）
15,000部（30,000部）





市内高校生へガイドブックを活用しながら、観光的視点からの出前講座を実施。
地域の魅力を知ってもらうことで、地域への愛着と誇りの醸成を図りました。

日　付　令和4年9月16日㈮
参加者　鶴岡南高校地域活性化ゼミ 4人
講　師　石原純一観光部会長

日　付　令和4年10月21日㈮
参加者　鶴岡中央高校総合学科 54人
講　師　小林好雄観光副部会長

日　付　令和5年1月25日㈬
参加者　鶴岡北高校 23人
講　師　石原純一 氏



荘内400年にぎわい市

日　時　令和4年10月9日㈰　午前10時~午後4時
会　場　鶴岡公園疎林広場
来場者　5,000人
内　容　●にぎわいステージ
チアダンスクラブ「Shooting★Stars」／表現舎刻一刻
念珠関辨天太鼓創成会／Kickin'Dance Fam
荘内藩甲冑研究会・荘内武者隊
●食イベント「美（う）夢（め）！ ごっつぉ合戦～ 庄内・朱（あか）の陣～」
主催：鶴岡青年会議所









鶴岡公園桜ライトアップ

期　間　令和4年4月14日㈭～21㈭
内　容　護国神社周辺の桜80本をライトアップ



市内飲食店ミニのぼり設置

観光客が利用する市内飲食店のレジ付近にミニのぼりを設置し、酒井家庄内入部400年のPRを図りました。ミニのぼりにはQRコードを掲載し、記念事業公式サイトへ誘導しました。

設置個所　鶴岡市内飲食店 約600店



鶴岡公園発 観光モデルルート活用事業連携

鶴岡商工会議所が主催した「酒井家ゆかりのまちなかめぐり」（令和4年10月10日開催）の周知・集客を支援しました。

◎「荘内日報」令和4年9月2日号
◎「鶴岡タイムス」令和4年9月1日号
◎「e-Towns」令和4年9月1日号
での情報発信





スマートフォン向けWebページの構築・QRコード案内板の設置

【令和3年度】致道博物館など7ヵ所に、観光案内機能を強化するため、QRコードの案内板を設置しました。
【令和4年度】サイト内情報の拡充と看板の増設を行いました。

設置場所
致道博物館（受付・御隠殿）、致道館、鶴岡公園、
荘内神社、松ヶ岡開墾場、丸岡城跡史跡公園

追加設置場所
致道博物館（多層民家）、大督寺、王祇会館、
羽黒山（山頂・随神門）

Web情報の拡充
致道博物館
丸岡城跡史跡公園
松ヶ岡開墾場





酒井家庄内入部４００年に寄せて

四百年の節目の年に感謝し 次の百年に繋ぐ

観光部会長　石原純一　鶴岡観光協会 会長　荘内神社 宮司

百年に一度の大きな節目に立ち会える事に感謝し、準備を進めて参りました。未知の感染症により危ぶまれましたが、多くの皆様の「必ず成功させる」という強い信念で、種々の事業が無事盛大に成し遂げる事が出来ました。

令和2年度は、鶴ヶ岡城址の桜ライトアップの中止に始まり、荘内大祭をはじめとして多くのイベントが開催を見送る中、地元の観光関係者による観光部会が熱意を持って、令和3年度・4年度の2カ年にわたる観光誘客事業を企画いたしました。

令和3年度は、本番年に向けて観光ＰＲと受入体制を進める重要な年でした。一年越しに実現した城址の桜ライトアップからプレ事業が始まり、鶴岡公園を起点としたモデルルートの構築、城下町鶴岡・湊町酒田の見どころを紹介するガイドブック「今も殿が暮らすまち」の発行、致道博物館などのスマホ用観光案内サイトの製作とＱＲ案内板の整備などを行いました。10月には「荘内大祭」が規模縮小しながらも、４００年前年祭として執り行われ、参加・見学した多くの皆様が、令和4年の成功に向けて、気持ちを一つにいたしました。

令和4年度本番年。城址の桜ライトアップは前年よりもゾーンを広げて行い、訪れた人々が息をのむような美しさに感動しました。首都圏では大手町・日経ホールでの「酒井家庄内入部４００年記念シンポジウム」や、大人の休日倶楽部「趣味の会講座」、大宮駅周辺でのプロモーション活動など、酒井家ゆかりの地・鶴岡・庄内の歴史と文化の魅力を知っていただけるよう、幅広く観光誘客を展開しました。

県内外で誘客を進めるなか、地元では、鶴岡出身の歌舞伎役者・中村橋吾丈、宝生流家元・和英様や狂言師・野村万作様・萬斎様をはじめ能楽界の皆様との新たなご縁をいただきました。

10月8日記念式典の翌日9日「荘内大祭」では、徳川宗家・家広様、「徳川四天王」のご子孫である酒井忠久様、本多・榊原・井伊家のご当主からご覧いただきながら、酒田まつりの大獅子、しょうない氣龍祭の姫龍など庄内一円からご参加をいただきました。時を同じく鶴岡公園疎林広場では鶴岡青年会議所による郷土食のイベントと協働で「荘内４００年にぎわい市」を行い、さらに翌日10日は、鶴岡商工会議所による「酒井家ゆかりのまちなかめぐり」が行われ多くの市民が参加されました。

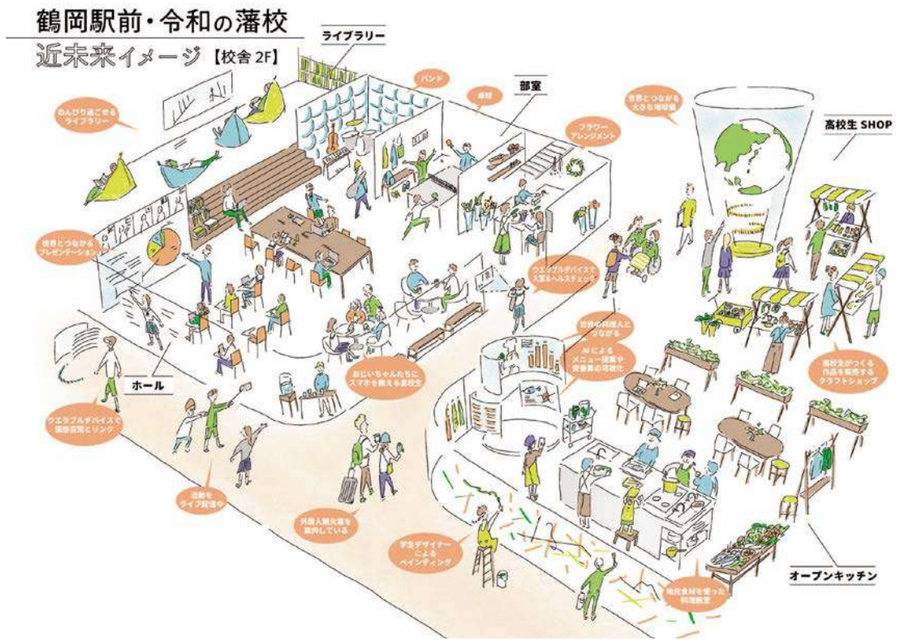
酒井家の善政により、城下町鶴岡・湊町酒田、庄内一円が文化の違いを大切にしながら庄内として発展してきました。

庄内の今後の更なる繁栄をねがい、かけがえのない歴史と文化を「次の百年」につないで行くことが、「先人への感謝」であり「次代への責任」であると感じております。

鶴岡駅前地区は、主な駅利用者である高校生や世代を超えた市民が集い、学び、交流する「学びのサードプレイス」としての機能を整え再構築します。

コンセプト：「人とまちを育てる場」＝いわば「令和の藩校」
まちづくりの方向性：第三の居場所＝「学びのサードプレイス」





城下のまち鶴岡　将来構想

「城下のまち鶴岡将来構想　鶴岡駅前地区将来ビジョン」の策定



「城下のまち鶴岡将来構想」は、鶴岡駅前から鶴岡公園までの区域を総合的に捉えて、歴史文化資源の保存継承と活用を検討するとともに、将来を見据えた鶴岡らしいまちづくりの方向性を示すものです。令和2年度から3年度にかけて議論を重ね、まずは鶴岡駅前地区の課題解決に取り組むこととし、駅前地区におけるまちづくりのグランドデザインとなる「鶴岡駅前地区将来ビジョン」を策定しました。



城下のまち鶴岡将来構想策定委員会

委員

上木 勝司	鶴岡市都市計画審議会 会長・山形大学名誉教授
矢口 哲也	早稲田大学 教授
加藤 捷男	鶴岡商工会議所 会頭
上野 隆一	出羽商工会 会長
佐藤 泰光	全国農業協同組合連合会山形県本部 庄内地区担当次長
前田 直之	一般社団法人東北ニュービジネス協議会やまがた支部 支部長
國井 英夫	株式会社庄交コーポレーション 代表取締役社長
丸山 貴光	東日本旅客鉄道株式会社 鶴岡駅長
酒井 忠順	一般社団法人荘内酒井歴史文化振興会 代表理事
宮澤 巌	独立行政法人都市再生機構 東日本都市再生本部 事業推進部 担当部長
山口 朗	一般財団法人鶴岡市開発公社 理事長（～令和3年10月）
阿部 真一	一般財団法人鶴岡市開発公社 理事長（令和3年12月～）
三浦 秀人	鶴岡駅前商店街振興組合 理事
伊藤 秀樹	マリカ西館管理組合 副理事長
佐々木 邦夫	鶴岡市コミュニティ組織連合会 第五学区コミュニティ振興会 会長
阿部 貴一	鶴岡市町内会連合会 末広町駅前町内会 会長
秋野 公子	一般社団法人山形県建築士会 鶴岡田川支部 事務局長
大久保 紀子	鶴岡市社会教育委員 副委員長

アドバイザー

中山 ダイスケ	東北芸術工科大学 学長
古田 秘馬	株式会社umari 代表取締役
陳内 裕樹	内閣府 クールジャパン地域プロデューサー

※（　　）内は在職期間、敬称略

「城下のまち鶴岡 将来構想」の今後

「城下のまち鶴岡将来構想 鶴岡駅前地区将来ビジョン」の中で示した駅前地区の将来像、「主な駅利用者である高校生や世代を超えた市民が集い、学び、交流する『学びのサードプレイス』」の機能実装に向けて、令和5年度は、高校生をメインターゲットとした学び・交流の機会の創出や居心地の良い空間づくりの社会実験を行っています。

今後も社会実験を継続しながら、鶴岡駅前地区将来ビジョンで示した将来像の実現を図ります。

令和5年度社会実験　サードプレイス「つるおかAZITO（アジト）」

マリカ東館に、高校生をはじめとする学生限定のフリースペースを期間限定で開設。高校生等にとっての、自宅や学校ではない、居心地の良い第3の場所「高校生みんなでつくる秘密基地 アジト」を創出して、地域の大学生や社会人の協力を得ながら、使う側の需要や課題把握のための社会実験を行っています。

●**主催**　鶴岡市建設部都市計画課（公募型プロポーザルによる業務委託）
●**場所**　マリカ東館2階
●**対象**　高校生を中心とした学生（無料）
●**開設期間**
　第1弾　令和5年10月30日（月）～11月12日（日）
　第2弾　令和5年12月4日（月）～12月17日（日）
　第3弾　令和6年2月19日（月）～2月25日（日）
●**実施するプログラム**
・みんなで選ぶ「欲しい備品」投票キャンペーン
・庄内出身で活躍するゲストによるトークイベント「進路のトビラ」
・高校生と大学生が街の人たちと一緒に取り組むチャレンジ企画　など









酒井家庄内入部400年に寄せて

明日の鶴岡を創る 駅前地区活性化に向けて

まちづくり部会長　上木勝司
鶴岡市都市計画審議会会長
山形大学名誉教授

「酒井家庄内入部400年記念事業実行委員会」の「まちづくり部会」の代表として、「城下のまち鶴岡将来構想策定委員会」（委員会）における鶴岡市将来構想の策定に向けた審議に委員長として関与した。

委員会は『歴史文化資源の保存継承及び鶴岡駅前から鶴岡公園までの中心市街地活性化基本計画区域におけるまちづくり方針の策定』を目的に設立され、先ず駅前地区開発のための将来ビジョンの策定に向けて審議した。委員構成は地域経済団体関係者、地域開発・都市計画と本市の歴史・文化の各専門家、地域コミュニティー関係者他18名で、アドバイザーとして東北芸術工科大学中山学長と2名の地域振興プランナーを擁していた。

令和2年開催の第一回と第二回の委員会では駅前地区の将来像と期待される機能について意見交換した。委員各位からは、明日の鶴岡への強い期待がこめられた、異なった視点からの多様な意見が披露された。駅前地区に図書館や郷土資料館を配置し、鶴岡・庄内の歴史・文化の集積と情報発信の拠点へと整備する提案もあった。最終的に第五回委員会（令和4年3月）で「城下のまち鶴岡将来構想　鶴岡駅前地区将来ビジョン」（将来ビジョン）を取り纏めた。

将来ビジョンでは、駅前地区に駅ターミナル、にぎわい・発信、学び・活動、そして憩い・交流の4つのエリアを配置し、各エリアで特性を活かした発展を図るとともに、エリア間の連携を強化し、駅前地区の総合的な発展を目指すこととした。先導的に学び・活動エリアの整備を進め、マリカ東館に高校生対象の学習や集いの場、社会活動への参加拠点などを設け、また市民一般対象の学習や交流の場として、生涯学習やリカレント教育、子育て支援、起業支援などの機能を強化することとした。本委員会の設置目的である中心市街地活性化に向けた全体的方針の策定にはなお一層の論議を必要とするが、今回のビジョンがそのための起点となることを願う。

なお、入部400年の節目に鑑み、私たちの生活の場である地域社会をより広い視点から省みると、SDGsへの取り組み、とりわけ気象災害激甚化への対応（防・減災対策強化、市街地緑化他）やコロナ禍やロシアのウクライナ侵攻で露呈したグローバルな物流体制の脆弱さへの対応（地域生産に依拠した食料・エネルギー需給の自立的基盤の強化他）など、私たちが平穏な生活を安定して維持して行く上で対処すべき課題は多い。

馬出遺構の活用

令和3年12月、山形地方裁判所鶴岡支部付近（馬場町5-23）での道路整備工事において、鶴ヶ岡城址の馬出遺構が確認されました。馬出遺構から出土した約30個の「金峯石」などの活用方針を定めるため、鶴岡市において、鶴ヶ岡城跡馬出遺構活用検討委員会やワークショップが開催されました。

これらの石は、令和5年秋、鶴岡公園内の一画で、出土状況を再現しながら、来訪者の休憩スペースとして整備されています。

※馬出（うまだし）…馬出とは虎口（城の出入口）前に敵をひきつけ、城兵との挟撃を狙う攻撃型防御拠点。土塁や石垣の周囲は堀が穿たれ、壁面に兵が取り付くことを防いでいる。（『戦国の城の絵辞典』中井均監修、成美堂出版より）



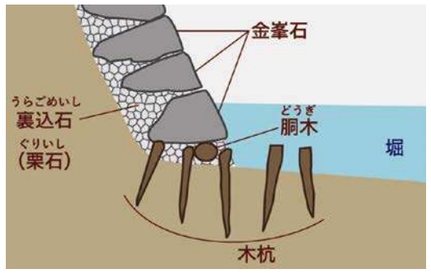
明和7年（1770）の鶴ヶ岡城の様子
「出羽庄内鶴岡城絵図」
（鶴岡市郷土資料館所蔵）より



現在の鶴岡公園


馬出遺構から出土した石の展示


馬出跡発見時の状況（令和3年12月撮影）



鶴ヶ岡城の馬出の断面（イメージ）


鶴岡市役所でのワークショップ

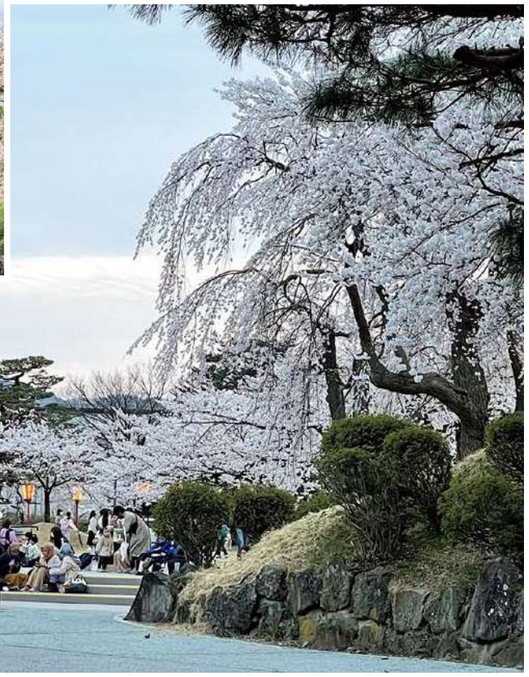
鶴岡公園正面広場

令和3年度から整備を進めてきた鶴岡公園正面広場。堀をイメージした広場や園路のほか、土塁や石積みを模した擁壁を設けるなど、城下町の歴史を感じられる作りです。

鶴ヶ岡城の二の丸に位置することから、愛称は公募で「二の丸広場」に決定しました。

様々なイベントやキッチンカーの出店など、市街地のにぎわい創出の場として活用していきます。













致道博物館　酒井家庄内入部400年記念特別展

致道博物館では、大きな節目の年である令和4年に、酒井家の庄内入部400年の軌跡を辿る5つの特別展を開催しました。











【第1部】徳川四天王筆頭・酒井忠次　　4月14日㈭～　5月29日㈰
【第2部】中興の祖・酒井忠徳と庄内藩校致道館　　6月　1日㈬～　7月18日㈪
【第3部】民衆のチカラ ～三方領知替え阻止運動～　　7月22日㈮～　9月　7日㈬
【第4部】藩祖・酒井忠勝　　9月10日㈯～10月31日㈪
【第5部】酒井家の明治維新 ～戊辰戦争と松ヶ岡開墾～　　11月　3日㈭～12月25日㈰



【第1部】徳川四天王筆頭　酒井忠次
三方ヶ原の戦いにて初代忠次が打ち鳴らしたと伝わる太鼓などが展示されました。



【第2部】中興の祖・酒井忠徳と庄内藩校致道館
致道館を創設し、「中興の祖」と称される忠徳の事跡を紹介。
貴重な祭器も全て陳列されました。



【第4部】藩祖・酒井忠勝
一字千金、3,000両で譲り受けたと伝わる書「潮音堂」など、
3代忠勝が愛でた名品などが一堂に会しました。

酒井家墓所

酒井家の菩提寺大督寺（鶴岡市家中新町）に隣接する、約7,270㎡の広大な土地に酒井家墓所があります。初代忠次からはじまる酒井家の歴代当主や夫人らの墓45基があり、全国各地の大名家の墓で用いられている亀趺（亀の形を刻んだ台石）も見られ、学術的な調査が進んでいます。

また、一般社団法人荘内酒井歴史文化振興会が酒井家墓所の一般公開を目指した取組を行っています。





左から2代家次、3代忠勝、初代忠次の墓



左から9代忠徳、7代忠寄の墓



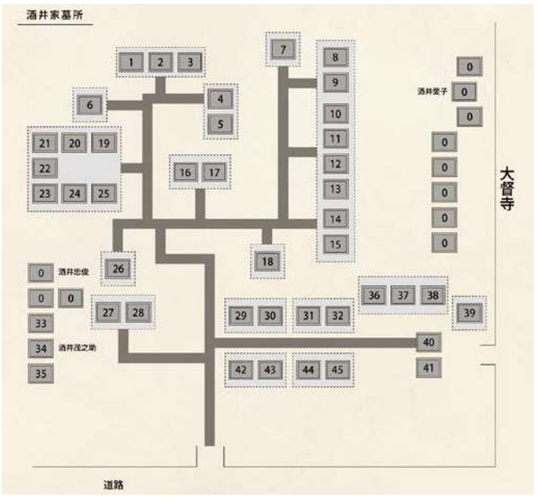
門の先にある鳥居



6代忠真の墓。当主の墓碑の中には亀趺も見られる



令和5年10月28日、初代忠次の命日に特別公開された



提供：一般社団法人荘内酒井歴史文化振興会

1.二代家次　2.三代忠勝　3.初代忠次　4.四代忠当　5.同夫人千万　6.五代忠義
7.六代忠真　8.八代忠温　9.同夫人為心珠院　10.七代忠寄夫人　11.九代忠徳夫人
12.ー　13.六代忠真次男忠辰　14.十一代忠発男忠恕　15.忠恕夫人瑛、瑛昌院
16.九代忠徳　17.七代忠寄　18.十代忠器　19.忠辰実母永寿院
20.忠寛生母兼、澄月院　21.忠器生母幸、深照院　22.五代忠義姉
23.忠順（忠温次男）　24.ー　25.ー　26.十二代忠寛　27.十一代忠発
28.同夫人錦子　29.十三代忠篤　30.同夫人鎮子　31.十四代忠宝　32.同夫人鍒子
33.忠篤生母五百子　34.同五男　35.同長女　36.ー　37.忠発夫人市橋留子
38.忠庸女澄子　39.忠庸生母福本照　40.五代忠義夫人東陽院　41.同女
42.十六代夫人萬千子　43.十六代忠良　44.十七代夫人慎子　45.十七代忠明

企業・民間団体の取組（令和4年度主なもの）

件名	実施月日	主催／内容	会場
岡崎市物産展「美食×美酒 やまがた」	4/1㈮–4/4㈪	岡崎信用金庫・鶴岡信用金庫	山形県名古屋事務所
アマチュア無線400年記念局の運用	4/1㈮-10/31㈪	JARL鶴岡クラブ［みんなでつなぐ活動支援対象事業］	
中村橋吾氏奉納公演	4/16㈯		荘内神社
鹿児島フェア	4/23㈯–5/1㈰	鶴岡信用金庫・鹿児島相互信用金庫	庄内観光物産館
酒田まつり	5/20㈮	時代行列での酒井忠勝公登場、荘内藩甲冑研究会参加	
鶴岡天神祭	5/25㈬	化けもの特典「木札」酒井忠久氏揮毫	
宝生流能楽公演	6/14㈫・15㈬	庄内能楽館［みんなでつなぐ活動支援対象事業］ 出演：宝生和英氏、野村万作・萬斎氏、大倉源次郎氏ほか	荘銀タクト鶴岡
東北公益文科大学「山形地域論」	6/15㈬	講師：石原純一氏（荘内神社宮司）	
「三方領知替え」 講演会・パネルディスカッション	7/2㈯	講師：杉山徳光氏（元神奈川県立 歴史博物館館長）、酒井忠久氏ほか	櫛引生涯学習センター
地方史研究協議会等合同研究例会	7/2㈯	［みんなでつなぐ活動支援対象事業］	鶴岡市立図書館
古琴演奏会	7/15㈮	アンサンブル・チコーニア ［みんなでつなぐ活動支援対象事業］	鶴岡市立加茂水族館
つるおか文化財めぐり	7/24㈰・8/10㈬ 9/24㈯	鶴岡市教育委員会社会教育課	
庄内論語素読検定	8/7㈰	致道館文化振興会議 ［みんなでつなぐ活動支援対象事業］	致道館
赤川花火プレゼンツ2022	8/20㈯	酒井家庄内入部400年記念花火	
学校給食400年記念献立	9/1㈭・2㈮	学校給食センター／鶏飯・だだちゃ豆コロッケなど	
東北公益文科大学 記念講演会・鼎談会	9/5㈪	出演：磯田道史氏（国際日本文化研究センター教授）、 門松秀樹氏、酒井忠久氏	公益ホール・大ホール
荘内銀行酒井家庄内入部400年 記念事業PR協力	9/9㈮–11/30㈬		荘内銀行山形ビル ウインドーディスプレイ
錦心流琵琶演奏会	9/11㈰	錦心流琵琶全国一水会鶴岡支部 ［みんなでつなぐ活動支援対象事業］	鶴岡市中央公民館
あつみ温泉講演会・ ばら植樹・お湯輿まつり	9/17㈯		あつみ温泉 林業センターほか
観光ガイド「特製ミニ御殿まり」配布	9/17㈯–11/30㈬	鶴岡市観光ガイド協議会	鶴岡公園周辺
松ヶ岡クラフトフェス	10/1㈯・2㈰	松ヶ岡クラフトフェス実行委員会	松ヶ岡開墾場
荘内大祭	10/9㈰	大名行列、祝賀行列 （酒田大獅子、余目姫龍などのゲスト参加）	鶴岡公園周辺
お居なりばやしパレード	10/9㈰	街中パフォーマンス研究会 ［みんなでつなぐ活動支援対象事業］	みゆき通り
酒井家ゆかりのまちなかめぐり	10/10㈪	鶴岡商工会議所	鶴岡公園周辺
鶴岡シルク特別企画展 ファンファーレ扇の舞	10/21㈮–11/6㈰	kibiso製品テキスタイルデザイナー 須藤玲子氏の作品展	鶴岡アートフォーラム
劇「三方領知替え騒動記」	11/12㈯・13㈰	表現舎刻一刻	鶴岡市中央公民館
黒川能保存伝承研究会	11/26㈯	黒川能保存会	黒川能伝習館
シルクノチカラ2022	12/10㈯	鶴岡「サムライゆかりのシルク」推進協議会	荘銀タクト鶴岡

他団体の取組





荘内大祭


赤川花火プレゼンツ2022での400年記念花火
写真提供：赤川花火大会実行委員会



鹿児島フェア


酒田まつり


お湯輿しまつり


学校給食での400年記念献立


荘内銀行山形ビル ウインドーディスプレイ


特製ミニ御殿まり


中村橋吾氏奉納講演


鶴岡シルク特別企画展


松ヶ岡クラフトフェス

酒井家庄内入部400年記念事業
NEXT100事業

令和5年度、3年度・4年度の2か年の記念事業を生かして、歴史と文化の伝承、
シビックプライド・郷土愛の醸成を通じて、庄内を次の100年につなぐための「NEXT100事業」を展開しました。

次代への歴史と文化の継承事業

高校生学芸員体験「ChiDoアカデミー」

致道博物館が実施する、庄内地域在住の高校生を対象とした学芸員体験を支援しました。

①歴史編　8月6日㈯［参加9人］



②美術編　8月9日㈬［参加7人］



③民俗編　8月10日㈭［参加10人］



庄内歴史ハンドブックを活用した出前授業

令和4年度に発行した庄内歴史ハンドブックを教材とし、地域の歴史文化を学ぶ出前授業を実施。

［藤島中学校・1年生・約80名］

【座学】

日付・会場　5月16日㈫・藤島中体育館
内　　容　庄内藩主酒井家と鶴ヶ岡城
講　　師　菅原義勝 氏（致道博物館主任学芸員）

【現地学習】

日　　付　5月18日㈭
内　　容　市街地の文化施設等の見学
…致道館・大寶館・鶴岡公園・致道博物館
〈案内：鶴岡観光ガイド3名〉



庄内地域ミュージアムネットワーク

庄内地域ミュージアムスタンプラリー

令和4年度の取組を拡充。庄内2市3町、合計29の博物館などの文化施設が参加したスタンプラリーを実施。

期　　間　9月1日㈮～11月30日㈭
対象施設　29施設
参 加 者　6,000人



対象施設一覧

〈鶴岡エリア・18施設〉
- 致道博物館
- 旧風間家住宅 丙申堂
- 荘内神社 宝物殿
- 庄内藩校 致道館
- 大宝館
- 鶴岡市立藤沢周平記念館
- 鶴岡アートフォーラム
- 鶴岡市立加茂水族館
- 出羽ノ雪酒造資料館
- 東田川文化記念館
- 出羽三山歴史博物館
- いでは文化記念館
- 羽黒・芸術の森 今井アートギャラリー
- 松ヶ岡開墾記念館
- 黒川能の里 王祇会館
- 丸岡城跡史跡公園
- 月山あさひ博物村文化創造館 ～六十里越街道番所～
- 関川しな織センター

〈酒田（6）三川（2）庄内（1）遊佐（2）エリア・11施設〉
- 本間家旧本邸
- 本間美術館
- 酒田あいおい工藤美術館
- 舞娘茶屋 相馬楼 竹下夢二美術館
- 酒田市美術館
- 土門拳記念館
- 猛禽類保護センター 鳥海イヌワシみらい館
- 清川八郎記念館
- 清川歴史公園 清川関所
- 旧青山本邸

大河ドラマ「どうする家康」連携事業

歴史講演会

大河ドラマ「どうする家康」の時代考証を担当した平山氏、柴氏より講演いただきました。致道博物館で開催した特別展「徳川家康と酒井忠次」（4月29日～6月12日）との連携企画として実施。

日　時　6月3日㈯　午後1時30分～4時30分
会　場　鶴岡市中央公民館
参加者　300人
テーマ　家康と忠次が生きた時代 ―危機を乗り越えた先に―
講　師　平山　優 氏（健康科学大学特任教授、武田氏研究会副会長、大河ドラマ「真田丸」「どうする家康」時代考証、映画「信虎」武田家考証）
「家康vs武田信玄・勝頼 ―戦争と外交―」
柴　裕之 氏（東洋大学文学部非常勤講師、大河ドラマ「どうする家康」時代考証）
「家康と忠次 ―二人が歩んだ徳川家の戦国時代―」
対　　談　「時代考証から見た家康と忠次」









観光PRイベント「あいち家康戦国絵巻 in 江戸」への参加

日　時　8月26日㈯・27日㈰
午前10時～午後5時
会　場　二子玉川ライズ「ガレリア」
来場者　16,000人（各日8,000人）





JR大人の休日倶楽部趣味の会　地域連携講座・旅行会

【講座】

若殿が語る徳川四天王筆頭 酒井忠次講座
～酒井家庄内入部400年記念NEXT100～

日　時　8月3日㈭　午後2時～3時30分
会　場　大人の休日倶楽部趣味の会神田万世橋教室
参加者　84人
講　師　酒井忠順氏（酒井家19代後嗣）



【旅行会】

特別貸切！ 徳川四天王・酒井家ゆかりの「御隠殿」での夕餉（ゆうげ）と城下町鶴岡・悠久の歴史絵巻「荘内大祭」

旅　程　10月6日㈮・7日㈯
荘内大祭、荘内神社、致道博物館、大督寺、御隠殿（夕食会）、加茂水族館、出羽三山神社






鶴岡公園周辺賑わい創出事業「鶴岡名物帳」

致道博物館が特別展示「日本刀物語～変遷と魅力～」に合わせ、市内の飲食店等と連携し実施した周遊企画を支援。

期　間　9月21日㈭～11月5日㈰
参加店　公園東エリア 8店舗
駅前・公園西・広域エリア 8店舗





PR用のぼり 制作

大河ドラマを視聴して庄内地域に来訪した観光客の受入と域内周遊を促す、PR用のぼりを制作。
観光施設や文化施設等に設置しました。





NHKとの相互協力事業

令和5年の大河ドラマ「どうする家康」（NHK）は、徳川家康を主人公とした作品となっており、作中、旧庄内藩主酒井家の祖で、徳川四天王筆頭の酒井忠次が大きく取り上げられました。
大河ドラマを活用したシティプロモーションを展開し、鶴岡市の歴史文化と、その魅力をPRしました。

大河ドラマ「どうする家康」スペシャルトークショー in 鶴岡 開催

日　時　9月9日㈯　午後2時～3時15分
会　場　荘銀タクト鶴岡
参加者　850人
出演者　大森 南朋 氏（俳優・酒井忠次役）
磯　智明 氏（大河ドラマ「どうする家康」制作統括）
羽隅 将一 氏（NHK山形放送局アナウンサー）
主　催　NHK山形放送局、鶴岡市
鶴岡市教育委員会、タクトつるおか共同企業体








大河ドラマ「どうする家康」 相互協力冊子 制作

城下町・鶴岡の市街地に点在する酒井忠次や酒井家ゆかりの地を紹介する街歩きマップを掲載したシティプロモーション冊子を制作。
市内の文化施設や観光施設、隣県の観光案内所、道の駅などに設置しました。





実行委員会委員

●実行委員長

皆川　治	鶴岡市長	

●副実行委員長

本間新兵衛	鶴岡市議会　議長	（～R3.10.22、R4.12.16～R5.11.13）
菅原　一浩	〃	（R3.11.9～R4.12.16）
尾形　昌彦	〃	（R5.11.13～）

●委員

加藤　捷男	鶴岡商工会議所　会頭 （鶴岡信用金庫　会長）	（～R4.10.31）
上野　雅史	鶴岡商工会議所　会頭 （株式会社荘内銀行　名誉顧問）	（R4.11.1～）
上野　隆一	出羽商工会　会長	
國井　英夫	株式会社庄交コーポレーション　代表取締役社長	
宮野　直生	出羽三山神社　宮司	（～R5.7.14）
阿部　良一	〃	（R5.7.15～）
石原　純一	鶴岡観光協会　会長	
上木　勝司	鶴岡市都市計画審議会　会長	
酒井　忠順	公益財団法人致道博物館　代表理事・館長	
布川　敦	鶴岡市教育委員会　教育長	
中野　洋	鶴岡市小学校校長会　会長	（R1～2年度）
尾形圭一郎	〃	（R3年度）
鈴木　郁生	〃	（R4年度）
成澤　和則	〃	（R5年度）
碓氷　勉	鶴岡市中学校校長会　会長	（R2年度）
五十嵐良二	〃	（R2～3年度）
齋藤　範夫	〃	（R4年度）
加藤　弘人	〃	（R5年度）
上野　由部	鶴岡市文化財保護審議会　委員	
阿部　博行	鶴岡市史編纂会　委員	
上野　雅史	株式会社荘内銀行　名誉顧問	（～R4.10.31）
佐藤　祐司	鶴岡信用金庫　理事長	（R4.11.1～）
峯田　益宏	株式会社山形新聞社　鶴岡支社長	（～R2.3.31）
保科　裕之	〃	（R2.4.1～R3.12.13）
古頭　哲	〃	（R3.12.14～R5.2.28）
松田　直樹	〃	（R5.3.1～）

●監事

堀　誠	松ヶ岡開墾場　理事長
橋本　政之	株式会社荘内日報社　代表取締役社長

●顧問

酒井　忠久	酒井家18代当主、公益財団法人致道博物館　顧問・名誉館長

参与・アドバイザー

●参与

加藤　鮎子	衆議院議員	
石塚　慶	山形県議会議員	（R5.4.30～）
今野美奈子	〃	
佐藤　正胤	〃	（R5.4.30～）
関　徹	〃	
髙橋　淳	〃	
阿部ひとみ	〃	（～R3.9.24、R5.4.30～）
石黒　覚	〃	
江口　暢子	〃	（R5.4.30～）
梶原　宗明	〃	
森田　廣	〃	
田澤　伸一	〃	
佐藤　聡	〃	（～R3.7.2）
志田　英紀	〃	（～R5.4.29）
星川　純一	〃	（～R5.4.29）
沼澤　好徳	山形県庄内総合支庁長	（R1年度）
永澤　浩一	〃	（R2年度）
髙橋　正美	〃	（R3～4年度）
村山　朋也	〃	（R5年度）
寺嶋　一郎	山形県教育庁庄内教育事務所長	（R1年度）
加藤　弘人	〃	（R2～4年度）
佐藤　寿尚	〃	（R5年度）
丸山　至	酒田市長	（～R5.9.5）
矢口　明子	〃	（R5.9.6～）
阿部　誠	三川町長	
原田　眞樹	庄内町長	（～R3.7.30）
富樫　透	〃	（R3.7.31～）
時田　博機	遊佐町長	
鈴木　仁	庄内観光コンベンション協会　専務理事	（R1～2年度）
村山　朋也	〃	（R3年度）
武田　広幸	〃	（R4年度）
早坂　誠司	〃	（R5年度）
水野　貞吉	公益財団法人荘内南洲会　理事長	（～R5.6.21）
小野寺良信	〃	（R5.6.22～）

●アドバイザー

太下　義之	同志社大学経済学部　教授
渡邉　賢一	株式会社XPJP　代表

専門部会員

【総務企画部会】

●部会長

武田真理子	東北公益文科大学大学院　公益学研究科長

●副部会長

大橋　由明	フェルメクテス株式会社　代表取締役

●部会員

佐藤　友介	鶴岡青年会議所　理事長　（R2年）
五十嵐由浩	〃　（R3年）
佐藤　友昭	〃　（R4年）
伊藤　暁生	〃　（R5年）
岡部　浩美	鶴岡全国通訳案内士の会
宮城　妙	こしゃってマルシェ、まちづくり塾
難波　竜次	まちづくり塾プラス、YouTuber
ミヨ　サラ	一般社団法人DEGAM鶴岡ツーリズムビューロー

【観光部会】

●部会長

石原　純一	鶴岡観光協会　会長

●副部会長

小林　好雄	株式会社出羽庄内地域デザイン　代表取締役

●部会員

大和　匡輔	鶴岡シルク株式会社　代表取締役
上林　弘昌	株式会社庄交コーポレーション、庄交トラベル
中村　聰	荘内大祭実行委員会
佐藤　忠雄	荘内大祭実行委員会
渡部　政一	御料理新茶屋　社長
太田　百合	湯田川温泉 理太夫旅館
永壽　祥司	一般社団法人DEGAM鶴岡ツーリズムビューロー
後藤　富美	鶴岡商工会議所
眞田　奈巳	出羽商工会

【歴史文化部会】

●部会長

上野　由部	公益財団法人黒川能保存会　業務執行理事

●副部会長

阿部　博行	鶴岡市史編纂委員

●部会員

渡部　幸	出羽三山歴史博物館　学芸員
菅原　義勝	公益財団法人致道博物館　主任学芸員
山形県立鶴岡南高等学校の皆さん	

【まちづくり部会】

●部会長

上木　勝司	鶴岡市都市計画審議会　会長・山形大学　名誉教授

●副部会長

秋野　公子	一般社団法人山形県建築士会　鶴岡田川支部　事務局長

●部会員

矢口　哲也	早稲田大学　教授
加藤　捷男	鶴岡商工会議所　会頭
上野　隆一	出羽商工会　会長
佐藤　泰光	全国農業協同組合連合会山形県本部　庄内地区担当次長
前田　直之	一般社団法人東北ニュービジネス協議会　やまがた支部　支部長
國井　英夫	株式会社庄交コーポレーション　代表取締役社長
丸山　貴光	東日本旅客鉄道株式会社　鶴岡駅長
酒井　忠順	一般社団法人荘内酒井歴史文化振興会　代表理事
宮澤　厳	独立行政法人都市再生機構 東日本都市再生本部 事業推進部　担当部長
山口　朗	一般社団法人鶴岡市開発公社　理事長（～R3.11.22）
阿部　真一	〃　（R3.11.22～）
三浦　秀人	鶴岡駅前商店街振興組合　理事
伊藤　秀樹	マリカ西館管理組合　副理事長
佐々木邦夫	鶴岡市コミュニティ組織連合会　第五学区コミュニティ振興会　会長
阿部　貴一	鶴岡市町内会連合会　末広町駅前町内会　会長
大久保紀子	鶴岡市社会教育委員　副委員長

※（　　）内は在職期間、敬称略

協力

ご寄付・ご協賛をいただいた企業等の皆様に、心より御礼を申し上げます

株式会社バーンフュージョン

有限会社武商事

有限会社昭商事

鶴岡建設株式会社

株式会社荘内銀行

松岡株式会社

鶴岡市金融協会

鶴岡桜の会

酒井家庄内入部400年記念誌

令和6年2月15日発行

発行◉酒井家庄内入部400年記念事業実行委員会

〒997-8601 山形県鶴岡市馬場町9番25号

電話番号：0235-25-2111（内線525,526）

事務局◉鶴岡市企画部政策企画課　酒井家庄内入部400年記念事業推進室

編集・印刷製本◉株式会社山形アドビューロ